



ふたいろの幕がおりるまで



舞夜じよんぬ

1 立村上総のまだ伝えてない言葉

どこかで見たことがある。いやというほど会ったことがある。近づかなくても一発でわかる顔している。

あそこにいるのは、あの人だ。

上総は廊下奥で数回頭を下げつつ、声高にしゃべっている女性の姿を認めると、窓際に移動し立ち止まった。応接室とよばれる部屋が一階には用意されていて、学校を訪れるお客様の多くはそこに招き入れられる。たまに掃除当番で入ることもあるけれども、ちゃんとお茶やらソファーやら、何から何まで用意された豪華な部屋だった。もっとも人がめったに来ないので、掃除することもないくらいだが。

——何しに来てるんだよ、あの人。

舌打ちしつつ、様子をうかがう。

髪は軽く束ねている。焦げ茶のブレザーとズボンで身をまとめている。たぶん口紅だけは真っ赤だろう。見た目二十代後半くらい。好みにもよるがきれいと思う人は思うだろう。

——実際三十四だって分かってるからな。俺の方も。

たぶん言わなければわからないだろう。彼女に、今年十四才のひとり息子がいることなんて。しかもその息子が。

「それでは、また機会がございましたらよろしくお願いします」

深く一礼した後、その人は大股に歩き始めた。向かう方向は来客用玄関。これまたこざれいにされていて、ふかふかのスリッパが用意されているというところだ。生徒が遅刻した時にもここを使用する。違反カードと一緒に入ることを許される、生徒にとっては覚悟の場所でもある。

一歩近づくごとに感じる強烈な威圧感。

——よりによってこんなところで。

上総は観念して、窓辺にもたれかかった。九月の半ばともなるとブレザーを羽織ってもへんに思われなかった。すでに夏服から冬服への切り替えも行われている。うつむいて、できれば気づかぬまま通り過ぎてくれればいい、そう思った。

甘い。速度を落とさずにその人は廊下を斜めにつつきって目の前に立った。

「上総、あんたなんでこんなところにいるの」

「母さんこそ何の用だよ」

廊下には誰もいなかった。それが幸いなり。上総は母がやっぱり、服に合わない派手な口紅をつけてきているのを見て取った。

「先生に呼び出されたわけではないんだろ」

「仕事中にあなたの成績が悪いこと知らされたって、別に私には関係ないわよ。そんなに甘やかしてもらえてるなんて思うんじゃないわよ」

相変わらずだ。この人は。

廊下の天井を見上げ、冷たく答えることにした。左側を指した。

「ほら、客用玄関はあっちだから」

「ははん、上総、あんたここで相当悪いことしてるんでしょう」

「なんでそういうことになるんだよ」

「早く私を追い出したがってるんだから」

「用事があって通っているだけだろ。なんでそうつかかってくるんだよ」

母の口調からすると、応接間での出来事はいまひとつ気に入らない形に終わったらしい。これが自宅だったら非常に怖いことだけれども、幸い学校は公共の場所だ。手は飛んでこないだろう。

「上総、あんた中学に入ってからすっかり親に対する態度、なめくさってるわね。こう言う時、小学校の頃のおんただったらもっと慰めとかなんとか言ってくれたもんじゃないの？ 全く、この学校の先生ときたら」

そうとう母はご機嫌斜めらしい。

「わかったよ。何あったんだよ」

仕方ない。玄関まで来客をお送りするという顔をして、上総は歩き出した。肩を並べて五メートル先の来客用玄関までお送りすることにした。

背がまだ、母に追いついていないのが情けなかった。廊下に伸びた影がやはり、一回り小さかった。

「全く頭くるったらないわよ。遠い存在の日本伝統芸能をもっと身近に感じられるように、和楽器と洋楽のコラボレーションを中心としたイベントを行います。ぜひ御校の生徒さんたちにも勧めていただけませんか、ってチケットを持ってきてただけよ。学生さんたちだから高いチケットじゃないわよ。招待券でいっかってことで用意したわよ。あんたもいることだし」

「あんたって人を呼びつけにするなよ」

ようやく理由が判明した。九月にそういうのがあるとは上総も知っていた。招待状の宛名も書かされたし、当日は手伝わされた。今回もそうだろう。一学期の段階で「もっと友だちにも宣伝してちょうだい」と命令され、何人かには話していた。

「でも、どうしてだめだったの」

「ライブの場所がね、お酒を出すところだから未成年の学生さんはだめだって。ばかよね。頼まなかったら出さなければいいんだから。そんなこともわからないのかなあ。馬鹿みたいよ。本当にあんたの学校の人たちは」

「そういうところに入れたのはそっちだろう。鬼のように勉強させて」

「ええ、そうよ。あんた何かあるといつも泣きじゃくってたくせにね」

事実だったから何も言えない。すのこの上に立ったまま、母がパンプスに履きかえるのを見て

いた。スリッパを渡された。早くしまえ、ってことだ。

「それとね、上総。十月五日のことだけど、人数に数えさせてもらっていいでしょう？ 当然よね。あとで家に電話かけるわ」

さっと手を挙げて母は、来客用玄関を出て行った。

玄関のたたきにうす橙の光が広がるのを上総は黙って眺めていた。秋のかすれたほこりっぽい匂い。咽が痛くなりそうだった。

一度教室に戻ってから図書室に寄るつもりだった。今日は委員会もないし、取り立てて用事もない。放課後の時は貴重だ。日が暮れる前に大急ぎで帰ろうと決めた。

「立村、おい」

振り返ると、羽飛貴史がワイシャツ姿のまま待っていた。

「ああ、羽飛か、どこ行ってた？」

「美術室に呼び出されたんだ。それよかお前さっきさあ、すっげえ美人と歩いてただろ」

にやにやしなながら貴史は上総の肩に手をやった。

「見たぞ、ほら応接室から出て来た人とさあ。お前、知り合い？」

軽い口調だった。

——よりに寄って。羽飛に見られてるのかよ。

——しくじったな。

どこまで見られているのかわからない。話まで聞かれていたら一発でばれるだろう。自分のことを「上総」と呼び捨てにするのは親しかいない。とにかくみっともない。

「まさか、そんなんじゃないよ。知らない人」

さらっと答えた。

肩から貴史の手が離れた。一緒に日が落ちるように笑みが消えていった。

こういうことに上総は敏感すぎるほど敏感だ。

「あ、っそ」

口先で吹くように言葉を返した後、貴史は黙って廊下を突っ切っていった。並ぶと貴史の方が影長かった。

——別に隠したわけじゃないけどさ。

——なあに言ってるんだよって言われたら、「ごめん、うちの親だって」って答えたってよかったのに。

——いつもの羽飛じゃないな。

——いや、九月に入ってからはいつもかな。

原因は自分にあるとよく自覚している。外の街路樹も、学校内の樹木も、まだとりわけて色を変えているわけではない。銀杏が黄色く色づくのも、紅葉がうっとおしいほど熱く燃え滾るのも

、まだまだ先の青濁の気候だ。なんとなくななかまどの実が青から黄色にふくれはじめている程度だ。こんな景色で「もう秋ですね」なんて言う奴がいたら、よっぽど植物に詳しいか自分と同じく夏が苦手で気温の下がる季節を求めている奴かのどちらかだろう。——どうすればいいんだらう。

図書室に向かい歩き出し、途中先生とすれ違っては一礼した。誰も上総に向かって何かを言うわけではない。誰も怒っていない、誰も気づいていない。それでも上総にはわかっていた。

——絶対に、傷つけてるんだ。

でなかったら、もっと違った答えが貴史から返ってくるはずだった。

——あいつだったら絶対、「なあーに、冗談言ってるんだよ。あれ、お前の姉さん？ 腹違いのなんとかってよくあるだろ？ だってそっくりだったもんなあ。それともなにか？ 美里に内緒の年上の彼女？ ちくらねばならねえぞそれだと！」とか言って、茶化してくれたはずなんだ。

図書室で借りた本を二冊取り出し、カウンターに渡した。本棚に目を走らせるのも、借りたい本を選び出すのも面倒くさかった。数人残っていた友達に一声かけた後、上総は図書室を出た。

——どうすれば、つぐなえるんだらう。

——どうすれば。]

——それにどうして俺は、嘘ついてしまったんだらう。

入学式の日、初めて声をかけてくれた同級生、それが羽飛貴史だった。

廊下に整列させられてたまたま貴史の前に並んだのがきっかけだった。

「立村って、言ったよな。俺は羽飛。よく覚えておいてくれよな」

ぽんと肩に手を置かれて笑顔で話し掛けられたことを覚えている。

ろくに言葉も出なくて、ひたすら教室では学校パンフレットをにらみつけ、何とかぼろが出ないようにしようと、椅子に浅く腰掛けていた日のことを覚えている。

——羽飛とは、嫌われないように友だちでいよう。

毎日気を張って学校に通っていた一年、いろいろあったけれども男子連中とはうまくやり、女子も清坂美里という、もったいないくらいの彼女ができた。信じられない。自分に似つかわしくないことばかりだった。どうしても受け入れられない部分があるのはしかたないけれど、友だちとしてはみな最高の奴だ。だから、絶対に裏切らないようにしよう。そう決めていたはずなのだ。

——あっさり友情放棄している奴が、俺だもんな。まったく。

八月末の、あの事件を思い出すと自転車をこぐ足がとろくなりそうだ。

手すりをすべり降りたい気分で上総は玄関へ急いだ。踊り場の窓からは知っている奴が見え

なかった。たぶん、貴史も美里も、先に帰ったのだろう。

2 羽飛貴史のかたづいてない問題

——あの顔見たら、ばればれだろ。ったく、あいつ馬鹿じゃねえの。

美術室を出た時にすっかり舞い上がっていたのに、凧を電線にひっかけてしまった気分になった。貴史は廊下の曲がり角を振り向かずに歩いた。いつもだったら立村を待っていてやるんだが。「おい、なにとろとろしてるんだよ。早く来いよ」って声をかけるんだが。

なんとなく、そんな流暢なことをしたくなかった。

原因は自分でもよくわからない。いつも教室で花札やっている時とか、与太ネタでからかっている時とかだったらもっと、落ち着いて返事ができたんだろう。ここ数日、完全に自分が反抗期に突入してしまった気がする。限定、立村上総に対してのみ、だが。

そりゃあ、年増のべっぴんさんと歩いていたら何かあるのではとも思うのは当たり前だろう。しかも、立村の顔つきが愛想笑いなしで文句をかましている様子を見たら、そりゃあ答えは一つしかないだろう。

——あれだけ目が似てるんだぜ。俺じゃなくたって一発解答だぜ。

貴史の母よりもはるかに若い人だとは聞いていた。二十歳の時に上総を産んで、三十二歳の時に離婚、家を出て行ったという。話だけ聞けば不幸な家庭なのかもしれないが、語る上総の口調は明るかった。

「それでも毎月、家の状態が荒れ果ててないか試験しにくるんだよあの人。ちゃんと季節ごとの飾り付けとか、掃除洗濯がきちんとなされているか、まともな食生活を送っているのか、コンビニ弁当なんて食べてないかとか」

上総がなぜ、男子にも関わらず家事一般および季節の行事に詳しいのか、謎はあっさり解けた。おっかない母さんに仕込まれているだけのことだ。日本伝統文化一般のコーディネーターか製作か、よくわからんがマネージャーみたいなことをしているとも聞いた。

——俺が気付かねえとも思ったのか。あほんだら。

ポケットに手をつっこむ。こういう時ほんものの不良だったら、煙草を取り出してすぱっとやるんだろうが、身体によくはないことはやめたい。かっこつけるんならガムがいいんだろうが腹がすいたので、こっそり朝買ってきたチョコレートを取り出した。体温でかなり形が崩れていたが食えればよい。銀紙を引き剥がして口にほおりこんだ。たぶん、ばれたら呼び出した。

「貴史、あんたなに口の周りにべったりチョコレートくっつけてるのよ。泥棒さんのひげみたいじゃない。まったく。早く拭きな。自分のハンカチで」

待ち合わせの場所は大学の生協カフェテリアだった。たまに腹がすいた時、よくもぐりこんで「五十円の揚げたてコロケ」「三十円の山盛りご飯」をトレイに載せ腹に掻きこんだものだった。すでに美里は、四人がけの真四角テーブルに座って珈琲ゼリーをすくっていた。

「鏡、見せたげようか」

「あれま。ほんとだ」

ほっぺたまでチョコレートの跡が、猫ひげのように伸びていた。びんぼうたらしく、銀紙までなめたのがまズかったのだろう。手の甲でこすってみたが、取れない。美里が大げさにため息をついて、ポケットティッシュをひとパック、提供してくれた。

「いいよ。どうせ学校じゃないんだから。それよかさあ、貴史」

さすがに夕方五時前に、定食を食うのは、食事をこしらえてくれる母に失礼だと思う。貴史も大学いもを八十円分だけ盛ってもらった。

「美里、お前も食うだろ」

「やあだ。夜のご飯食べられなくなっちゃう」

「太るのがやなんだろ。どうせ」

「ご心配ありがと」

体重のことをからかうといつもなら怒るのだが、今日はおとなしい。

美里が言い返さないのは、何か真面目に話がある時だ。

今朝、学校に行く途中で、「ちょっと放課後、小学校時代のネタで相談があるんだけどさ、大学のカフェテリアでどう？」と持ちかけられた。別に一緒に帰ったっておなじじゃねえかと思うものの、食べ物があるのは大きい。美里も同じだろう、ということで落ち合ったわけだった。

物心ついた時からの幼なじみであり、男女合わせた中で屈指の親友。

しかもこいつの彼氏が貴史の親友ときた。

これ以上、望むところのない関係だ。

「食いながらでいいだろ。で、なんだ。話って」

「ほら、詩子ちゃんのことなんだけどさ」

スプーンを加えてすっと引き抜き、美里は貴史の顔を見つめた。

——相手が立村だったらさぞや、ぶりっこして食べてるんだろうなあ。

想像するのにもなにか面倒だ。貴史は大学いもをほおぼりうなづいた。

「藤野のことかよ」

「昨日ね、うちの母さんところに、詩子ちゃんから手紙が来たのよ」

あまり美里は藤野詩子と付き合いがないはずだが。どうしたんだろう。

同じ小学校の同級生だ。気にならないことはない。

髪の長い、美里と対を張るくらいの気の強い女だった。

一部に熱狂的なファンがいて、二年くらい追いかけてつづけてきたものの転校というありがちな終り方だったという、哀れな奴を貴史は知っている。

「お前のとこじゃねくて、おばさんところに来たのか？」

「そう。詩子ちゃんの名前になっていたけど、たぶんお母さんが書いたんじゃないかって思うのよ。でね、中に二枚入ってたの」

「二枚ってなんだよ。話飛ぶなあ」

「『志遠流日本舞踊おさらい会』とか書いててね、ちゃんと黒くチケット代のところが塗りつぶされてるの。手紙は入ってなくて、でも私宛じゃないからうちのお母さんが電話でお礼言って

たよ」

「確か木村がずっと藤野のこと追い掛け回していて、結局日舞に藤野を取られたって泣いてたぜ」

「聞いた聞いた、宿泊研修の時に聞いたよ」

宿泊研修。

思わず、黙りこくった。

押し入れに押し込んでいたふとんが、一、二の三、で溢れてきたようだった。

「そういうこともあったよなあ。それでだ、藤野が日本舞踊やってるのは聞いたがそれとなになが関係あるんだ？」

「つまりねえ」

美里はしばらく人差し指と親指を擦り合わせていた。いきなり大学芋に手を伸ばすと、あっという間に口の中へほおりこんだ。

「ああっ、俺の貴重な食料を！」

「だっておなかすいちゃったんだもん。でね」

話を逸らして自分の罪をなしにしようとする美里。こういう奴だ。

「詩子ちゃん初めて大きい舞台に立つんだって。すごいきれいな着物着て、衣装つけて、踊るらしいんだ。だからぜひ来てくださって詩子ちゃんのお母さんが私に送ってくれたんだと思うんだ。お母さんは私と詩子ちゃんが仲良しだったと思っているから絶対、ね」

美里の言いたいことはわからなくもなかった。

確かに美里は小学校時代、藤野と仲がよかった。ちょっとしたことで美里がクラスの女子一部から白い目でみられると速攻、マシンガンのようにまくし立てて相手を黙らせてしまう。また美里のことを親友だと思い込み、何を考えたのか貴史にまでやきもちを妬く始末だった。一度「美里をひとりじめするのは、おねがだからやめて」という手紙を受け取ったことがある。正直、何勘違いしてるんだこいつ、と思うものの、貴史にとって美里が当時、一番話せる相手だったことを考えるとしかたないかとも思った。

あえて言おう。六年後半までは確かに美里と藤野詩子の仲は円満だった。

美里と貴史が同じ青大附中を受験することになるまでは。

最初から美里の家では、内申書がぼろぼろだったにも関わらず成績が群を抜いていたということで、青大附属中学進学を検討していたらしい。また、貴史の両親も「たぶん美里ちゃんが行くなら貴史も行きたがるに決まってる。本気でやればあの子も意外と」という計算が働いていたらしい。あっさりひっかかって受験し、結局貴史と美里だけ合格してしまった。不合格だった女子のひとりに藤野詩子がいた。成績からしてもまず、無理だろうとは言われていたけれども、「美里が受けるから私も」と言い張ったとか。

美里ももてる女だと思う一方、つれない奴だとも感じた。

冷たくつぶやいた言葉を貴史は耳にしている。

——なんで詩子ちゃん、そんな私にくつつきたがるんだろう。

このあたりから天秤のバランスが崩れていたのだろう。

美里が合格発表の日に、貴史に抱きついて涙ぐんだ時。

「あんと離れたら、私、誰にも本当のことがいえない」

つぶやいた言葉が耳に残っている。

あの時、藤野詩子の名前が並んでいなかったことを全く気づかなかった美里は、どんな顔して接したのだろう。貴史にはわからなかった。ただ、卒業式まで一切、藤野が美里に口を利かなかったこと。美里も男子たちと必要以上にわいわいしゃべっていたこと。女子たちとの仲が不本意なまま終わってしまったらしいということ。貴史の把握していることはそのくらいだった。

なぜいまさら美里のところに、「日舞のおさらい会」チケットが届くのだろう。もちろん来てほしいからだろうし、読み方によっては藤野が美里と仲直りしたいと考えている、とも受け取れる。だったら万才だ。美里だって嫌いな女子ではないのだから、友情復活は待ってましたってところだろう。

「じゃあ、行けばいいだろ。お前。おばさんと一緒に」

「それがさあ、母さんいうのよ。日本舞踊の発表会って、なんかお金を持っていくのが常識だから、いやだって。やだねえ、大人って。心がすさんでるよね。だから、貴史かこずえか誰かに行けばっていうのよ。それだったら同じ小学校の付き合いだし貴史がいいかなって思ったのよ」

「俺たちだったら金持ってかないでいいのかよ」

「子どもだから花束だけでいいって」

日本舞踊なんて貴史は全くといって良いほど観たことがない。たぶん盆踊りの延長みたいなものだろう。もしくは赤と白のふさふさ鬘をつけて頭振り回すあやしいことをするらしい。未知の世界なのは美里も同じだろう。

「詳しいことなら、お前の近くにいるだろう、日本伝統文化のプロフェッショナルが」

「ああ、昼行灯の君ね」

「お前、あれでも一応彼氏だろ」

「どうだか。向こうは違うと思ってるかもよ。わかんないけど」

なぜやりに答える美里をちかす気にもなれず、貴史は最後の一切れを飲み込んだ。ちょっとなら食ってないのに、やたら腹持ちがいい。

「昼行灯の君が出たところで、つなげていい？」

「敬意払って立村って呼べよ」

「だってなんか、知っている人に聞かれたらやだよ。私の直感なんだけど、立村くんもしかして、詩子ちゃんのこと知っているのかもしれないって」

——こいつ、どこまでやきもち妬けば気が済むんだ。

貴史としては一言、告げるに限る。

「会ったこともなさそうな奴にまでやきもちやいてどうするんだ、ばあか」

「違うよ。ほら覚えてる？ 一学期の社会の授業中にね、うちにあるチラシを持って行って、そ

の内容について研究するとかいうことやったでしょ」

「ああ、あったあった。そんで？」

「それでこずえがさ、夕刊に入っていた日本舞踊教室のチラシ持ってきたでしょ。それを立村くんに見せて、根掘り葉掘り日本舞踊の話でつつこんでたでしょ」

「ああ、下ネタでな。いつもの夫婦漫才じゃねえか」

美里の現在親友に位置しているのが、古川こずえだ。さばさばしていて結構いい奴なんだが、どうも貴史に熱を上げているらしくあえて避けざるをえない存在でもある。貴史の愛は、アイドル鈴蘭優に捧げられている。いきなり立村くんに向かって「あんた童貞？」とかますような相手はお呼びでない。

「そのチラシに、先生と一緒にポーズ取らされている女の子がいて、あれが詩子ちゃんだったのよ。背が高くってさ、ポニーテールにしてて、すごく真面目な顔で。そしたら立村くんがかなり慌ててたのよ」

「またすけベネタかまされたからパニック起こしてただけだろ。美里、お前も少し手ほどきしてやれよ」

「手ほどきするのは男の役目でしょ。そういうのをあの昼行灯に求めてどうするのよ。それよりも立村くんがね」

結局最後は「立村くん」に戻している。やっぱり彼氏だ。

「お母さんが日本舞踊とかお茶とかお花とか、そういうものの仕事してるんですよ。それで知っているんだとは思ったんだけどね。でもいつものことだけど、あの人しゃべらないでしょう。何にも」

美里の口調はいつものことながら語尾が曖昧だった。

立村のことを話す時は、わたあめをほおばったような言い方をする。

甘いんだけど、口にまとわりつくというか。

「あのなあ、美里。お前ら一応付き合ってるんだろ。奴に聞かねえのかよ」

「貴史こそ立村くんと親友なんですよ。男同士でそういうことオープンにしないの？」

——痛いところを突かれたよな。

じっと見つめあう。恋人同士のまなざしじゃない。一緒にいた時間が長いからわかる気合だ。

「女子と違うんだって言ってるだろ、そんなべったべたしたような付き合いしねえんだよ。野郎同士は」

「私もそういう方が好きだけどね。別に立村くんが詩子ちゃん知っててもおかしくないとは思いますが、隠すことはないでしょうよ。隠すことは。いつもそうだよ立村くんって。宿泊研修の時だって」

禁句二度目。

「そのことは言わないって、決めただろ。俺も美里も」

「わかってるけどさ、あんたとだったらかまわないじゃない。そりゃ、私だって無神経なところあったかもしれないよ。頭に来てたかもしれないし、ぐあい悪かったならしかたないかもしれないよ。でもね、貴史、私だってできるだけのことをしてるんだよ。わかったげようとしてるじゃ

ない」

——何も俺の前でそんなこと言うことねえじゃねえか。奴に言えよ奴に。

貴史は黙ったまま聞いていた。水を飲んでいて。

「隠し事ばかりしてるんじゃないよって怒鳴りたくなること、なあい？」

地雷を踏まれた。

3 清坂美里のいいたいことすべて

すでに三人の間で、「宿泊研修」という言葉は禁句になっていた。

貴史が、美里と約束したことだった。

「あれっきりにしるよ。美里。立村と続けるんだったらな」

「うん、わかったよ」

——絶対に、あの日のことを口に出さないって決めたんだ。

——わかってるけど、でも。さ、やっぱり。

まだ部屋には姉、妹ともに戻ってきていなかった。姉が夜遊びに徹しているのは周知の事実だし、妹も今ごろは塾だろう。美里と同じ青大附属に進学したいからだそう。六年後半は山場なのだそうだが、たぶんそういうもんなんだろう。美里のようにあっさりと、「もうここで勉強するより家でやったほういいもん」と切ることもしないようだ。

——まあね、受かっちゃったらあとは天国だもんね。

一学期の段階でコピーしてもらった立村くんの英語リーダー訳本、通称アンチョコを丸写しして、明日の予習はおしまいだった。まず間違いはない。ファッション雑誌をぱらっとめくってみたり、化粧品の宣伝を見ては小遣い額を確認したり、つめみがきで磨いたり、自分なりの「美」を磨くレッスンを続けていた。

——十月五日かあ。

ギンガムチェックの真っ赤なワンピースを来た女の子が卓上カレンダーの中で微笑んでいる。人気ファッションモデルの子だ。貴史の好きな鈴蘭優よりもずっとかっこいいし、美少女だと思う。赤丸をつけた。

チケットを取り出し、見直す。木の皮をはがした時に見える白い肌の色だった。和紙で「志遠流日本舞踊おさらい会」と綴られている。場所は青潟市民会館大ホールだそう。広いだろう。おーいと声をかけて届くかどうかってところだろう。

——日本舞踊かあ。すごくきれいなんだろうなあ。

美里も日本舞踊というのがどういうものなのか全く見当がつかない。立村くんのお母さんが日本伝統芸能のマネージャーらしきことをしていることくらいは聞いているけれども、本人があまり話したくなさそうだったので聞かなかった。

隠し事の多い彼氏を持つと、いろいろ大変だ。

本当だったら、母が心配していた通り「ねえ日本舞踊の会に招待されちゃって、貴史と行くこ

とになったんだけどね、どういうもの持っていけばいいのかなあ？やっぱり花束？」とか聞けばすむのだ。ついでに「そういえばこの前、立村くん、志遠流とかいう日本舞踊のチラシ観てたでしょ。あの写真の子なんだけど、もしかして知ってる？もし知ってたら聞いてみてよ。清坂美里のこと覚えてるって」と、気軽に言ってしまうえば楽なのだ。詳しい人に教えてもらう方が一番いい。ましてや、大の仲良し、のはずなのだから。

——それができればね、いいんだけどね。

——結局相談相手は貴史になるってところが、問題なのよ。

六月に美里の方から付き合いをかけ、それから三ヶ月近く経つ。

付き合いの場合、一週間で終わる子もいれば、小学校時代の恋人がまだ続いている子もいる。いちがいにどのくらいが平均期間とは言いがたい。ただ、こずえに言わせれば、

「長いよ。良く続いているよねえ。美里もがまんしてるでしょ」

とのことだが、どっちががまんしているのかはわからない。

学校を休んだら気になって電話したくなる。

体育の百メートル走やっている時は、やっぱり順位が気になる。

他の女子、特に一年の女子たちと話しているのを見ると、つい仲間に混ぜてもらいたくなる。

帰りはやっぱり、一緒に帰りたくなる。

今までは偶然を装ってすることが多かったけれども、六月を境に回りからは公認の証をいただいた。立村くんの方からなりゆきで「俺と清坂氏は付き合っているから」と言ったのもかなり影響しているのだろう。

からかわれることもなく、自然に付き合っている。

夢見た通りのお付き合い。もちろん立村くんの神経質過ぎるところとか、人の顔色ばかり見すぎて足をひっぱる所とか、不満がないとは言えない。もっとずぶとくなればいいのに。自信持てばいいのに。貴史みたいに、と思わないとは絶対に言えない。でも、付き合う前、付き合った後も全く態度変わることなく美里を気遣ってくれる。こんな相手、なかなかいないと他の女子も言う。男子は一度付き合ってしまうとがらっぱちになってしまい、態度がでかくなるという。一切、なかった。

完璧だと思っていたのに、どうしてだろうか。

——あの、宿泊研修からおかしくなっちゃったんだ。きっと。

——立村くん、どうして。

むあっと湧き出す雲みたいな気持ちが押さえられない。工作で使った画用紙の裏を机に広げ、机からクレパスを取り出した。十二色。小学時代の使い残しだ。橙色の一番長いクレパスを取り出して、美里は一気に書きなぐった。百点満点の花丸をびっしり埋め尽くしたような文字が、躍った。

——なんでなにもいわないのよ。なんで自分一人で決めつけてしまうのよ。なんで私のことを信じようとしらないのよ。なんでしてほしいことなんにも言ってくれないのよ。私が信用できないの

。私のことが嫌いなの。私と付き合うのがほんとはいやなの。どうしてあの時、私に相談してくれなかったの。私だって手伝えることできたのに。あんたひとりだけ先生に怒られるようなことさせなかったのに。どうして私が心配してるの気づかないのよ。昼あんどんのくせに、数学なんて何にもできないくせに、暗い文学少年してるくせに。胸大きい子好きなくせに。いじめられてたこと私知ってるんだから。みんな、私知ってるんだから。みんな隠さないでよ。嘘言わないでよ。そんなあんただっていいって、みんな言ってるじゃない。あんたなんか。

もし立村くんが幽体離脱して美里の部屋に現われたら、きっと読むなり卒倒するだろう。見ればいいんだ。読めばいいんだ。そのまんま押し付けてやりたい。あの、線の細い表情がどうゆがむのかとっぴりと拝ませていただきたいものだ。

——あんたなんか大きらい！

文字が読み取られないよう、最後に大きく真上から書きなぐった。

まだ小学校に通っていない子どもたちの、らくがきにしか見えないだろう。

言葉をそのまんま、立村くんにぶついたらどう答えるだろう。

縦に引き裂き、重ねて四枚、さらに重ねて破り続けた。最後は重たい紙ふぶき。ごみ箱へ、両手ですくって捨てた。

こういう気持ちを、五年の頃だったら詩子ちゃんにぶつけていただろう。

あの当時は確かに詩子ちゃんが親友だと思っていた。美里が五年の時窮地に経たされ、追い詰められた時も必死にかばってくれたことを忘れはしない。誰よりも大切な親友だと思ってくれたこと、貴史にすらやきもちを妬いてくれるくらい美里のことを好きだと思ってくれた。

いい友だちだった。なのに詩子ちゃんが美里と一緒にの中学に行きたいと言って青大附属を受験すると聞いた時、どうして自分は「ふうん」としか思えなかったのだろう。六年の頃どうして、詩子ちゃんと一緒にいるのがうざったくなくなって離れたりしたのだろう。塾や児童館に逃げたりしたのだろう。

——だって、男子たちと遊んだりしてる方が楽しかったんだもの。

——児童館のこともいろいろあったけど、けど。

チケットの文字が美里をにらみつける。こちらも気合でにらみ返した。

——ほんっとに、ふつうの友だちだったら詩子ちゃんとも、付き合っていたのに。どうして、私にばかりあんなべたべたくっついてきたんだらう。だから、私、いやだったんだ。

自分の中の、冷たい視線がうごめき出した。

——だから、合格発表の時、貴史と私だけが受かったのが嬉しかったんだ。

ふたりだけの合格。詩子ちゃんが落ちたことが全く悲しくなかった。

卒業式まで一切詩子ちゃんは口を利いてくれなかったけれども、それはそれで仕方ない。その

くらい割り切っていた自分が残酷だと、今でも思う。今は後悔しているし、機会があれば仲直りしたいと虫のいいことを考えているけれども、これっきりならそれでもいい。

詩子ちゃんが日舞おさらい会のチケットを送ってきたということは、また美里に会いたい、仲直りしたいというメッセージなのだろうか。

美里は右手をチケットの上に重ねた。キューピットさまをする時と同じように、目を閉じた。

——けど、詩子ちゃんのお母さんが送りつけてきたんだよね。詩子ちゃんは私を呼びたくないと思っていたのかもしれないのよね。それに。

キューピット様のお告げが、ぴかっと頭に光った。

——立村くん、やっぱり詩子ちゃんの行ってる日舞教室のこと、知ってるのかな。

別に隠すことなんてないだろうに、と思う。たまたまこずえの持ってきていた日本舞踊教室のチラシに、詩子ちゃんらしい人が映っていて、

「ねえねえ、貴史、これって詩子ちゃんじゃない？」

「ほんとだ。藤野だぜ、全然変わってねえの」

と盛り上がった時、立村くんは必死にそっぽを向いていた。こずえがいつものように、

「ねえねえ、日本舞踊の曲ってさ、清元とか長唄とかあるんでしょ。文字で読むとさ、すっごくやさしいこと書いてるってほんと？ 「松の根上がりの」ってとこ、男のあれがたってるってことなんだって？ あんた、お母さんこういうの詳しいんでしょ。ねえもっと教えてよ」

と突っ込んでいたのに、うんざりした顔で、

「そんなの知らないよ。知らないってさ」

嘘みえみえの言葉を返していた。そのくせちらちらとチラシを手にとって、じっと見据えていたくせにだ。貴史も、こずえも、そして美里も、みなわかっていたはずだ。立村くんはポーカークフェイスを使っているくせして嘘がばればれの性格だってことを。素直に言っちゃえばいいのだ。お母さんの関係で日本舞踊関係の話詳しいんだってこと。男子だとそういうなよなよしたこと知っているのが恥ずかしいって気持ち、あるんだろうか。

隠し事するのは美里にとっても性に合わない。貴史とペアで出かけることだって、誤解する人にとっては浮気だと思われてしまう。冗談じゃない。素直に、言いたいことを言っちゃえばいいのだ。美里も、貴史も、そして立村くんも。一番すっきりするのはそこなんだから。

でも立村くんのことだ。簡単に白状はしないだろう。

直感に響いたものにはすぐに従うのが清坂美里流だった。

——立村くんが逃げられないように、貴史と相談して一芝居打ってやろう。

——今までずっと隠してきたことを、白状させちゃおう。

——宿泊研修のことも、日舞のことも、みんな。全部。

立村くんの前で「ねえねえ、今度日本舞踊のおさらい会に貴史と行くんだけど、知ってる？ こういうとこ」と話を持ちかけてみよう。ついでに、詩子ちゃんのこととか、プログラムとかを

ちらつかせて、立村くんが良心の呵責に苦しむところを見てやろう。最後に、こらえきれなくなった立村くんが、

「ごめん、俺が悪かった。実は全部知ってるんだ。あのさ、日本舞踊の世界って実は……」

と白状させてやろう。美里も貴史と一緒に、詩子ちゃんへの土産を用意することができるし、立村くんもこれ以上隠し事しないですむし、詩子ちゃんももしかしたら喜んでくれるかもしれないし。いいことづくめ。ちゃんちゃんってわけだ。おなかの中が膨れ上がって大変だろうに。美里は一応立村くんの彼女だ。彼氏が苦しんでいるところを助けてやりたいと思うし、友だちとしても当然のことだろう。たぶん、きっかけがなかったのだ。きっと。立村くんはきっと言い出そうとして言いそびれているだけなのだ、たぶん。

——立村くん、一芝居打って大騒ぎ起こされた相手の立場、少しは理解してよ。私だって、一年の評議委員会演劇ビデオでは、「忠臣蔵」のお軽やらされたんだからね！ 演技力、あんた以上なんだからね！ ちゃんと白状しなさいよ。誰があんたのことを嫌いになるっていうのよ！ね、貴史！

1 立村上総は直感で判断する

夜、母から再確認の電話が入った。十月五日、志遠流のおさらい会にて肉体労働がほとんどの手伝いをさせられることに関して、「絶対にいやだなんて言わせない」と気迫のこもった口のききかただった。

——次の日から中間試験だってのに。

父がまだ帰っていなかったこともあり、通話時間は二分くらいだった。一人暮らしだと電話代もばかにならないからだとか。コレクトコールでかけてこなかっただけでもまだよしとしよう。

「わかった？ それじゃあ、近くなったらもう一度電話するわ。忘れてたわ、上総、四日の土曜日にリハーサル、あと九月の最後の日曜に衣装あわせとつぼ合わせがあるのよ。そのあたりも明けておいてよ。一応あんたも舞台がどんなものか見ておかないとわけわからないでしょう」

「当日だけって約束だろ！」

「舞台は裏方さんががんばってくれてはじめて成り立つものなのよ。あんたも子どもじゃないんだからその辺、学習しなさい」

一方的に切れた。日本伝統芸能というのは「礼」を大切にすると習った。母の電話の切り方は、どう考えたって礼儀に叶っているとは思えない。鼓膜破けそうだった。

居間にかかっているカレンダーに、ちゃんと赤マジックでしるしをつけた後、上総は自分の部屋に戻った。風呂から上がって髪は生乾き状態。夜は秋一杯の匂いに満たされ、鈴虫の声が聞こえる。そのままベットに転がり込んだ。

——明日、羽飛しゃべってくれるかな。

後味悪かった。帰り道、後悔したけれどもどうしようもなかった。

素直に電話を入れて、「さっきはごめん、あれうちの母さんなんだ」と言えば済むんだろう。でも

「たかがそんならいのことでなんでかけてくるんだよ」

と返されそうでためらった。

「お前の母さんって、すっげえ怖いよなあ。お前のこと名前で呼び捨てにしてたっけさ」

そのくらいのことは言われそう。決して悪意を持っているわけではないけれど、でも上総は聞きたくない言葉ばかりだった。

——やっぱり、明日謝ったほうがいいよな。

青大附中に入学してから一年半、どうやってD組でうまく学校生活を過ごしていくか、どうやってむかつく先生たちをやり過ごしていくか、どうやって冷たい視線の女子たちから逃れるか、そればかり考えてきた。貴史や美里のように、人気者であっさりさらりと流してくれるいい友だ

ちもいる。たくさんいる。

——でも、いつどうなるか、わからない。

男子で鏡をちょこちょこ見るのはナルシストの証。学校ではめったにしない。人前で自分の顔をまじまじと見つめるのは、せいぜい顔を洗う時くらいだ。

不安で息苦しくなった夜なんかは、顔の凹凸にどのくらい黒い影が漂っているかを探した。涙の洪水状態で目がはれぼったくなっていないか、口がぽっかり開いてないか、唇を無意識のうちに尖らせていないか。

全部確認して、自分の理想とする顔に整え、やっと背を向ける。

いつもの儀式を上総は寝る前にしていた。枕もとの鏡を胸の上で広げ、じっくり身だしなみを確かめた。見慣れた落ち着かない瞳や細い唇が映っていた。色がなまっちょろくて、周りからは

、「そうか、やっぱり立村は本条先輩とホモの関係か。でお前が女役？」

と頭痛いことをささやかれたりする。父に似て痩せ型なところと、母と同じ人を吸い込むような瞳が備わっているのは、まあそんなもんかとも思う。

だが、ひとつだけ物足りないものがあるとすれば。

——どんどん追い抜かれてるよな。

つま先で布団を軽く蹴り上げてみた。入学式の際は羽飛貴史よりもたっぱがあったから後ろに並んでいたのにだ。二年に上がってから、屈辱にも二人間を置いて前に並ぶ羽目におちいっている。クラスの男子十五人中九番目の背丈というのは、中くらいなんだろうが、それでも低い。

——何もかも、みんな抜かれてるよな。

上総はしばらく鏡を眺めた後、伏せて枕もとに置いた。

——とにかく、明日、羽飛に謝ってしまえばいいんだ。昨日は悪かったって言えばそれですむ。

——あいつは、俺があれだけひどいことをしたにも関わらず、いまだにふつうの友だちでいてくれてるんだから。

二週間前、クラスの宿泊研修二泊三日、黄葉山に泊りに出かけた時のことだった。

もともと上総は担任の菱本先生と相性が合わず、長時間のバス移動で体調も崩していたりして、かなりみっともない姿をさらけ出していた。真夜中に廊下をふらふらして担任にとっつかまり、その後高熱だしてぶっ倒れ二日目はホテルで寝込んでしまった。美里とも言葉の行き違いで大喧嘩してしまうわ、羽飛にもあきれはてられるわ、さんざんだった。

このくらいのことなら、まだ二学期に入ってから「ごめん、あの時は」と頭を掻くだけですみそうなことだろう。美里にもすぐあやまったし、貴史も土産をもってきてくれたりした。上総の方が自分を改めればすべて片付くことだらけだった。

——三日目のあのことは、いくら仏の羽飛でも許せないだろうな。

上総ひとりで策を練り実行した、宿泊研修三日目、「明星美術館に向かうバスからの逃亡劇」

計画遂行には全く悔いなどない。。

ことが終り菱本先生に美術館内で殴られた時も、次の日学校で説教された時も、上総は全く何も感じなかった。わかってくれない相手には自分なりの冴えたやり方で勝負するだけだ。あの日以来上総は、菱本先生に対してフィルターをかけて接することに決めていた。どうしようもない相手には、自分の方で合わせていって求めるものを奪い取るそれしかないと感じたからだった。反抗する気もない。「菱本先生はこういう人なのだ」と割り切って、受け流そうと決めていた。シャッターを下ろして付き合うと決めてしまえば楽なのだ。

——羽飛にも、そうできれば楽なんだけどな。

でも貴史、美里にはそれができなかった。

もちろん自分でそうしたいと思えばそうできただろう。あの日に狩野先生が教えてくれた、「君はこれから、鋭すぎる自分の感覚を、飼いならすすべを覚えていけばいいんです」

何度も繰り返すつづやいた言葉だった。なんとか自分の大切な友だちふたりが訴えてくるものを、さらっと受け止めて、「そういう奴なんだ」と割り切ろう、必死にそうしてきた。上総にとってふたりは、青大附属で初めて出会い、ずっと一年半友だちでいてくれた相手だ。いやな気持ちにさせないで、ずっといい友だちでいられるように、自分を変えていきたかった。

でも、うまくいかなかった。菱本先生を始めとする、ずかずか心に入り込んでくる大人にはいくらでも冷たく見返すことができるのに、あのふたりにだけは無理だった。

貴史が上総に対して冷たい態度を取ったのも、もしかしたら思い過ぎしなのかもしれない。美里がやはり、腫れ物に触るように宿泊研修の話をしないのもそこにあるのかもしれない。ふたりにはいやってほど感謝しているはずなのに、どうしても最後のハードルが越えられない。

——いい奴なんだ。なのに、どうしても、「そういう奴なんだ」って割り切れない。

——こんな奴のどこがよくて清坂氏は俺なんかと付き合いたいって思ったんだろう。

言葉の裏に見え隠れする、

「なんでそこで受け入れようとしらないんだよ、お前」

と責める響きが耳鳴りのようにものをいう。

——フィルターで、そんなのを気にしないようにろ過して、ふたりともいい奴なんだって思えば。

ふたりが思いっきり傷ついていることを、上総は感じている。事情が事情とはいえ大嘘ついて脱出してしまったことがどれだけ許しがたいことか、重々承知だ。だからなんとか、伝わってくる感情に、頭を下げたかった。なんとか、なんとかしなければ。

夜が明けた。朝五時半。いつものように間違いのない格好に着替えた。上総の言う「間違いのない」とは、決して校則違反か否かということではない。あぶらっぽい顔してないか、ふけが肩に落ちてないか、ボタンが取れていないか。などなど。服の乱れは心の乱れではない、不潔感により自分の居場所がなくなる危険信号の点滅だ。いつどうなるかわからない、そういう場所が学

校なのだから。

——危機感はいつも、持ってないとまずいよな。

父は深夜に戻ってきたらしく、全く起きる気配なしだった。もうテーブルの上にパンやオレンジジュースを置いたままにしているも腐らない季節だった。自分の分だけさっさとこしらえて平らげた。もちろん、料理した後、スクランブルエッグの匂いが服に移っていないかを確認するのも忘れなかった。

外の気を台所の窓からうかがうと、だいぶ木の葉が赤茶けてきているのが見て取れた。やはり僻地の我が家なのだろう。天気が違う、気候も温度も全く異なっていた。うちだけは、秋だった。

自転車で四十分弱。遠回りして通う分早く家を発せばよい。必死にペダルをこぐ必要もなく、とろとろと進んだ。自分の住んでいる町から離れるとだんだん、知り合いの連中とすれ違う率が高くなる。同じ遠距離自転車通学をしている奴とか、自動車を使用して通っている奴とか、実家に用があつて帰った下宿生とか。

「はよっ！」

「おおっす」

「おっさきー」

みんないろいろな挨拶言葉を発して去っていく。笑みと顔きで上総は返した。商店街もまだ静まっている中、すいすいと進んだ。学校に到着した。すでに自転車置き場には、羽飛の、サドルのやたら高い自転車がつけられていた。白い塗料でサインまでしてあるところが奴らしかった。

——羽飛がいるってことは、清坂氏もいるのかな。

——うちが近いからあまり早くくるなんてことないんだけどな。

謝るんだったら、お互い早いうちにけりをつけたほうがいい。誰もいないうちに。本当は重たい足取りを、無理して軽くするために上総は走った。街路樹の、手のひらほどある葉が青いまま、道端に数枚、落ちていた。

二年D組に向かう階段の途中、降りてくる南雲秋世、奈良岡彰子とすれ違った。この二人もずいぶん早いものだった。いろいろあったとはいえ二年D組の公認カップルになってしまっている。見た目からすると南雲の方が「いわゆるアイドル系の顔立ち」ゆえに、「肝っ玉母さん」的明るさの奈良岡さんとは不釣合いに見えた。しかも惚れぬいているのは南雲であり、今では毎日家に迎えに行くという騎士ぶりを発揮している。

「立村くん、早いね」

「それよりうちのクラス、もう誰か来てたか」

南雲に尋ねた。奈良岡さんが笑顔で答えた。南雲は一瞬だけつまらなさそうな顔をしたが、すぐに何も考えてない風に戻った。

「羽飛くんと美里ちゃんがね、なんか話で盛り上がってたよ」

「なーんかさ、いづらかったんで、俺たちは鐘鳴るまで、中庭にしようかなあってさ」

「ははあ、早朝の語り合いか」

茶化しても南雲は怒らなかった。当然、とばかりに大きく頷いた。否定するのは奈良岡さんだった。

「ううん、私は保健室に寄ってくるの。立村くん、秋になってだいぶ、倒れなくなったでしょう。今の時期結構、季節の変わり目で風邪ひく人多いんだって。立村くんも体弱いんだから、気をつけなくちゃだめだよ」

「どうもありがとう。ほんっと、俺もそう思う」

じゃあ、と片手を挙げて教室に向かった。まだ朝の八時になるかならないかだった。踊り場の外を覗くと、運動部の朝連のために走り回っている連中がうろついていた。通学ラッシュはこれからだ。

二年D組の扉を握り締め、ゆっくりと開けた。

覗きこんでから声をかけるつもりだった。すぐに気付かれ、呼ばれた。

「立村くん、おはよ！」

美里の、少し作り加減の明るい声だった。なんで「作った」と思ってしまうのか、自分でもわからなくて、もごもごと答えるだけだった。

「おはよう、ふたりとも、早いなあ」

羽飛の顔をまず覗き込んだ。

「立村か。ちょっと来いよ」

やっぱり恐れていた通り笑顔での手招きではなかった。少しにらみが入っていた。ブレザーとネクタイを外して椅子の背中にかけて、自分の席で片足外して座っていた。

「ああ、あのさ、羽飛」

「いや、なあ美里、さっき話していたんだよなあ」

上総の言葉を遮るように、貴史の手は美里を指差した。

「美里、ほら、再来週さ、藤野の踊りの発表会行くって言っただろ？」

「うん、言ったよ」

——なんか、羽飛も作った言葉使っているような気がする。

背中に窓枠が影をこしらえていた。貴史の背中、白いシャツの上に十字架を背負わせたかのように見えた。

「立村知らないだろうなあ。あのな、俺と美里と小学校の時同じクラスだった奴で、藤野って子がいるんだけど、今度の踊り発表会があって日曜日、お前から美里を借りなくちゃなんないんだ。ジェラシー燃やされる前にあらかじめ報告しといたほう、いいだろ？」

立ちすくんだまま、上総は貴史の前髪を見つめていた。若干くせがあるのはドライヤーでえせりーゼント風にこしらえたからかもしれない。眉とひたいが丸見えだが、顔はさほど大きく見えなかった。目線が鋭いせいだろう。やっぱり、口調が親しげなのに反して、まなざしがきつい。

「別に。いいよ。そんなの」

「そっか。じゃあ、美里。立村の許可が出たからここで予定立てるか」

「いいよ、でねでね」

貴史の前にいる奴はまだ来ていなかった。さっそく美里は上総を素通りして椅子に横座りした。ちゃんと足をそろえて流した。ニュースキャスターのお姉さん風座り方だった。貴史も今度は美里のみに顔を向け、目は穏やかに話し出した。目が穏やかだった。

——踊り発表会って、再来週の日曜？

昨夜、カレンダーに赤丸をつけた日だった。

いきなり背を向けるのもなんなので、もう少し机に近づいて立った。片手を広げたままぶら下げて、耳を傾けた。ふたりは完全に上総のことを無視してしゃべりまくっている。

「ほら知ってるでしょ。一学期にこずえが日舞教室のチラシ持ってきたことあったでしょ。あの写真の子なんだ。立村くん」

申しわけ程度に美里が説明してくれた。その「藤野」という苗字の元同級生は美里ととりわけ仲がいいらしい。話の内容からだいたい把握した。

「でね、今度初舞台を踏むから来てねってチケットをもらったのよ。やっぱり同じ学校の奴同士で行くのが一番だよ。貴史と花束持っていこうって思ったの。立村くん日本舞踊とかそういうのに詳しいでしょ。どういう花持っていっての方がいいと思う？」

「んだよな。俺もそれ知りたいよな。俺だったら花束もらったって母ちゃん姉ちゃんに分捕られるだけだから、ありがた迷惑だと思うぞ」

ふたり、四つの眼が上総を見据えた。さらっとだが重たい。

「いや、たぶん、花束は、喜ばれるんじゃないかな」

語尾をどもらせながら上総は答えた。花束よりもむしろ、一万円を包んでもらった方がいいとは母の言い分だがその辺は誤解を招くので言わないでおいた。

「ふうん、あっそ。でね」

しらけた口調で美里がつぶやき、ふたたび貴史と話を弾ませた。

「場所がね青潟市民会館なんだけど、どうなのかなあ。日本舞踊の会って、私たちがいきなり楽屋に入っていったいいようなもん？ お高い人たちばかりって感じで追い出されたりなんか、しないかなあ？」

「やっぱり制服で行かねばなんねえのかよ」

「私は卒業式に来たようなグレーのロングワンピースで行こうって決めてるの。でも貴史はねえ、まさかねえ。トレーナーとジーンズはよくないよ」

——いや、別にいいんじゃないか？ そんなあらたまらなくても。

会話を振ってくれるならば、ちゃんと答えてやったのに。

「立村くんなら絶対スーツで行くよね。ちゃんとネクタイ締めて」

もう一度顔を上げてふたりがねめっちくみる。

「いや、細いのは締めるかもしれないけど、そんな大げさでなくても」

言いかけたところで、

「あっそ、わかった。でさあ貴史」

切り方が冷たいのなんのったらなかった。少しむっとしたけれど、割り込む気もなかったので黙って聞き役に徹することにした。うっかり口走って後悔しないとも限らない。

「たぶん、詩子ちゃんが踊るのってすごく可愛い着物きると思うんだ。女の子が踊るものって袖が長くて髪の毛にかんざしたくさんつけたので。詩子ちゃん背が高いからきっと、似合うと思うんだ」

「さあな、俺はその辺全然わからねえよ。母ちゃんも何がなんだかって言ってたぜ。金持ちだなあってさ」

「ふうん。十月五日、日曜日よね。こずえが持ってきてくれたチラシにも、ええっと」

胸ポケットの生徒手帳に挟み込んだチケットらしきものを取り出し、上総の方にちらつかせ、後、貴史に一枚手渡した。

「ほら、志遠流、って書いてる。知ってる？ 立村くん？ この前は知らないとか言ってたけど」

「そうだよな、なんか裏がありそうな言い方してたよな、お前」

ふたり、もう一度呼吸を合わせて上総を射た。

射られた拍子に窓の照り返しがまぶしくて、瞬きを数回。目の前には綿を細く引きのばしたような雲が広がっていた。理科の授業で習ったうろこ雲だった。

——まさか、このふたり。俺にあてつけてるのか。

虫に食われてしまいそうだった。言葉が出てこないのは、あの雲の子のような虫たちに全部食べられてしまったからかもしれない。ぼこぼこ孔が開いていきそうだった。すうすう気持ちが冷えていきそうだった。上総はひたすらこらえた。美里、貴史から飛び出す言葉の虫たちが食い破ってきそうだった。

——なんでそんなこと言うんだよ。

かばんの柄を握り締めた。美里と貴史、交互にじっと見返した。

——でもやっぱり、本当のことは言えない。

二人が話す内容から考えて、上総が母の下僕としてこき使われる「志遠流日本舞踊おさらい会」に出かけるらしいことは確実だと思った。青潟市民会館の大ホールで日曜日、十月五日。これ以上何も言うことはない。

また、美里の友だちという「藤野」という子にも聞き覚えがあった。

一学期の段階では、日舞教室の写真に載っているというところまで記憶してはいなかった。断じて、あの段階では藤野という美里の友だちについての記憶は残っていなかった。彼女と知り合いだから動揺しているのでは、とかんぐられるのはお門違いだ。

ただし、八月十五日に行われた「ゆかたざらい」にて、上総はひよんなことから「藤野詩子」という中学生が志遠流のお弟子さんにいることを知った。会話らしいものはほとんど交わしていない。ただ、向こうは上総のことを覚えているかもしれない。ちょっとだけ楽しくない出来事が起こったので、思い出したくない対象の可能性が高い。自分の身に置き換えてみても、かっこ悪

いところやうそがばれた場面なんかを、貴史や美里に見られるのは、避けたい。

——まさか、清坂氏の友だちが、あの藤野さんだとはな。

彼女だってそうだろう。上総の母と多少なりともやりあったちょっとした出来事……ひそかに上総は「玉兎事件」と呼んでいる……は、決して自分の名誉になる話ではない。そういうところを見られた相手が、仲良しの友だちの「彼氏」だったとしたら。

——小学校時代の俺の暗い過去を、清坂氏に全部知られたらどうする、ってのと同じことだよな。

上総の判断としては、

——その子、知らないよ。

と答える方が自然のように思えた。もちろん嘘をつくことにはなってしまうし、ばれた時にはまた「藤野とやましいことしてたのか」とかんぐられる恐れはある。でも、「どうして知ってるの？」と聞かれて「ただゆかたざらいで名前知ってたから」と言い訳するだけではまずいような気もした。言うならばすべて、きっかけ、「玉兎事件」、ついでに上総の恐ろしい母上沙名子さんとの顛末も語り尽くさねばならない。巧くごまかせればいい。でも、貴史と美里にそんな小細工は通用しないだろう。嘘をつくなら徹底しなければ。一年間付き合ってきた経験そのもので、そう思う。

——嘘もこれ以上つきたくない。やっぱり黙るか。

約五秒。そのままだった。

だいぶクラスの連中も教室に集まってきていたけれども、まだまだ空席だらけ。南雲と奈良岡さんがそろそろと入ってきたが、二人の世界を心地よく教室の隅でこしらえているらしい。気が付いているとは思えなかった。

「立村くん」

口を切ったのは、やはり美里だった。

貴史がじっと見据えたままではいる。

「もういいかげんにしてよ！ 黙ってたらわからないよね！」

声は響かなかった。様子をうかがう奴もいない。ただ上総の方には怖いくらいはっきりと響く声だった。

「美里、おいおい」

「全然白状してくれないんだよね。立村くん、あんたって人は！」

「何やってるんだよお前」

貴史が机を軽く叩いた。上総にも視線を投げながら、

「でもまあ美里の言いたいことも俺は分かる。立村。お前さあ、知ってるんだろ、藤野のこととかさ。お前の母ちゃん、日本伝統芸能のなんかかんとかしてるとって言ってたからさ、知ってるんでないかって俺も思ってたんだ。お前がストレートに言わねえから」

「貴史ももういいよ。こんなに私だって立村くんに、隠し事しないように言いやすく持って行ってあげたのにさ、なんでいつも黙ってるのよ！ 別に知られたって困ることじゃないじゃない。

もっと私たちの話に割り込んでくればいいじゃない。なんでそう様子見して黙ってるの？ いつもいつも、いつも！」

「ごめん、俺もそれは」

言いかけたとたん、美里はぴしゃっと貴史の机を平手打ちした。本当は上総を一発張り倒したかったに違いない。

「あんた口癖だよな、『俺が悪かった』っていつも言うよね。本当にそう思ってるわけ？ 口癖だからつい出てしまう、ただそれだけじゃないの？ 本当に頭を下げたいんだったら、ちゃんと土下座するなりなんなりしてよ。いつもそうなのよ、立村くんってば口先ばかりで」

「おい美里、それは言いすぎだぞ」

思いがけず貴史が割って入ってきた。上総はただ視線を逸らさずに言葉を受けるのがやっとなかった。静かに美里の罵詈雑言を受け止めていると思われたのだろう。だんだん気付いたらしく周りの連中たちが様子をうかがう気配がした。声を低くしてほしい。周りの「また立村やらかしたのかよ、またまた」という雰囲気 が苦しい。

「美里よくわかった。落ち着けよ」

「私、貴史に言ってるんじゃないの！ もうがまんできないのよ。なんで立村くんいつも隠し事ばかりするのよ。宿泊研修の時だって」

「これ以上言うな！」

上総が言葉を虫食われている間、貴史は数回止めるしぐさをしていた。手で何度も机を叩いていた。其の手がつかいに美里の腕を引つつかみ、ぶるんと揺らした。

「美里止めろ」

「もう知らないから！」

美里は音を立てて椅子を机の下に押し込み、上総を一秒しっかとにらみつけると、かばんを持ったまま教室から出て行った。貴史が難しい顔をして机に向かいうつむいているのが意外だった。

上総はとうとう意味ある言葉を投げられなかった。当然、あやまることもできなかった。

「あのさ、羽飛」

「お前追っかけねえのかよ！」

今度は貴史が上総を怒鳴りつけた。一步うしろずさりして周囲を見渡すと、D組教室内が興味深々といった空気に満たされている。完全、舞台、主役だった。

「いや、俺が追っかけていたら、たぶん逆上するんじゃないかな。俺だったらたぶん放っておいてほしいと思うはずだから」

「お前本当にバカか？ お前本当に美里の彼氏やってるのかよ」

「それとこれとは別だってさ。なんか俺も今顔合わせたら、ひどいこと言って傷つけてしまいそうな」

「だからお前は救いようのないあほんだからだっというんだよ！ どけよ」

美里に対しては腕だけだったが、上総に対しては肩を突き飛ばした。男女の差だ。貴史は一点

に集まった視線をひとつひとつつぶすように見据え、舌を鳴らした。

「勝手にしろ、ったく」

扉を開けて出て行った。ちょうど締まるのと同時にチャイムが鳴った。みなばたばたと席に付き始める。朝自習の用紙を箱から取り出し始めた。数学の問題だった。具合が悪くなりそうで上総はほとんど見ずに裏返しした。

——じゃあどうすればいいんだよ。

結局、その日は帰りの会が終わるまで美里、貴史ともに姿を現さなかった。いわゆる「さぼり」だった。南雲も何か言いたそうな顔をしていたけれども、あえて先週の全英ヒットチャート1000についての話でごまかしてくれた。隣席の古川こずえからも、

「なんで羽飛まで行くわけ？ あんたほんっとに、ガキよねえ。ま、あんたが追っかけていけない理由も私にはわかんないことないけどね。ふう」

と、バカにしてるんだか思いやってくれてるんだかわからないお言葉を賜った。

「おい、どうした、羽飛、清坂いきなりエスケープなあ？ いったいあの幼なじみコンビ、珍しくもなあ。あとでたっぷり絞り上げるとするか。さ、授業始めるぞ」

菱本先生も、よりによってなぜこの二人がいないのか、納得のいかない表情を浮かべていたけれど、取り立てて上総に「どうした、あいつらは？」と尋ねはしなかった。一学期までだったら、おそらく上総に対していろいろ

「清坂とやりあったんだってなあ。お前も全く、清坂の思いやりを全然受け止めようとしなかったんだろ？ 少しは大人になれ」

と説教されていたに違いない。宿泊研修三日目バス脱出事件以来、菱本先生も上総に対しては距離を置くよう心している。上総にとっては非常に好ましい状態だった

もっとも、菱本先生と相性のいい生徒たちから仔細を聞き出したらしい。

大して心配するようなことでもないさ、と笑顔で明日以降、説教することを考えているらしかった。

「じゃあな、明日、おさぼりのお二人さんにはたっぷり油を絞ってやるからな」

笑顔で職員室に戻って行ってしまった。たぶん上総に事情聴取したところで、ろくなことにはならないと割り切っているらしい。

一日、ふたりが出席していない授業中、上総は真剣にノートを取った。文系授業ならいつも通りだが、数学の解き方をすべて写し取るのは骨だった。しかも数学担当の狩野先生は、上総のために小学生レベルの問題を補習教材として渡してくれる。自分にとってはありがたい内容だが、美里、貴史にとっては「けっ」の一言だろう。黒板の数字やアルファベットを、いわゆる「写生」している気がした。丸写しは骨が折れた。

——たぶん、見落としはないよな。

六時間目終了まで、とうとうふたりの席はつるんと光ったままだった。

うろこ雲が消えた後、空には金色の太陽を隠し持った綿雲がペールを張っていた。クラスの連

中と「じゃあな」「お先」、言葉を交し合う間、上総も空と同じペールを被り続けていた。どうかミスがないように、どうか虫食いで破れていませんように。祈りながら。

美里に怒鳴り返すことは簡単だっただろう。いくらなんでもあそこまで嫌味っらしいことを言われ、あてつけがましくも「立村くんいいかげん白状しなさいよ」という態度をされたら、文句のひとつふたつ言いたくなる。貴史も昨日の意趣返しなのかどうかわからないが、そうとう根に持っていたことは確かだった。

謝ろうと思っていたのだ。ちゃんと切り出そうとしたのだ。

なのに。

——俺はほんっとに、救いようないことしてるんだよな。

——あのふたりが、あいつらに似合わないようなことしてしまいたくなるくらい、許せないことしてるんだよな。

——あんなことされて俺も当然だよな。傷つく権利なんてないよ。

——謝っても口先だけだと思われるのなら、何も言わないほうがましなのかな。

——どうすればいいんだろう。

手元の大学ノート在五冊、取り出した。

国語、数学、英語、社会の歴史、あとは茶道。

文字はたぶんコピーしても読み取れるだけ、濃く書いている。

印刷室へと向かった。ここだと青大附中生の特権で無料コピーを取らせてもらえる。個人コピーは禁止のはずだけれども、その辺は大目に見てもらっている。評議委員の用事がある振りをして、図書館から借りた本を重ねて持っていった。大きなコピー機の蓋を開け、ガラス張りのセット部分にノートを開き載せた。二枚ずつ刷るよう「2」のボタンを押し、作動させた。

なんだか繰り返し、残りの茶道、英語、数学、国語、すべての複製を完成させた。摩擦熱でかなり高温な用紙をテーブルに載せ、いち、にと分け、半分に折りたたんだ。印刷室を出る頃には、廊下側から見える空もだいぶ黒味を帯びてきていた。風が揺らす音は夏と変わらなかつたけれど。

ふたたび二年D組の教室へ向かった。やはり二人は戻っていなかった。

持ってきたコピーの束をもう一度数え直し、端と端をきちんとあわせて折り目をつけ、それぞれ机に突っ込んだ。

誰もいない。両手を合わせて双方の机に頭を下げた。

——どうか明日こそ、元に戻れますように。

2 羽飛貴史は経験で判断する

——だから言っただろっての。できねえことするからだっての。

美里の足は速い。駆け出していったのだろう。でも貴史には十年以上つちかってきた、「美里を追いかけるための触角」が備わっていた。まずは玄関に向かうことにした。生徒玄関のたたきで靴を脱いでいるところを発見した。幸い、鍵は内側だ。出ていく分にはかまわない。遅刻者をチェックするために先生たちはみな、来客用玄関に移動している。

「美里、待てよ」

「今日は学校休むから」

「休むって、お前ここに来てるじゃねえか」

「だから帰るの」

口を尖らせて、貴史の目をじっとにらんだ。

「だからなあ、お前、なんで途中で暴露しちまうんだよ。こういうところがお前、女だよなあ」

「女、女、って言わないでよ！」

まずい、火に油を注いでしまっている。しかたなく貴史もかばんをあごでささえながら外靴に履き替えた。

「どこ行くんだ？ 反省会やるんだったらつきあうぜ」

「別にあんたに来てほしいわけじゃないもん」

「ばあか、このまま俺が教室に戻ったらどうするんだよ。まず立村にはにらまれるし、他の女子連中には文句言われるし、菱本さんにはお前がいない理由を問い詰められるし、と三重苦もいとこだ」

「要するに貴史、自分のエスケープ理由を私にかこつけてるでしょ」

吐き捨てるようにつぶやき、美里がかぎを外した。掛け金式だ。すぐに開いた。

「悪いか、第一お前が持ちかけたんだからな、これからどうするかは考えないとまずいだろ」

しばらく掛け金をひとさし指でもてあそんでいた美里。もう一度貴史に向かい、

「あんた、出席日数足りてるの」

「二年になってから休んでねえもん」

「あっそう。大学の中庭でどう」

昼間から午前中、制服姿でうろついても補導員に声かけられないですむ、先生に見つかっても言い訳ができる場所。となったら附属高校をすっとぼして、大学構内にもぐりこむのが一番だ。

青澗大学附属の場合、附属高校、大学の授業でも学校側からの許可があれば出席することができるシステムを取っている。立村がたまに公認でドイツ語と英語の授業にもぐりこんでいるのもその辺に理由がある。貴史と美里はあまり関心がないのでどうでもいいのだが、大学のキャンパスをうろついても怪訝な顔をされない環境というのは嬉しいものがあった。高校の授業でも、美術や音楽などで同じ扱いをされている奴は結構いるらしい。

天気はくずれそうでくずれない。傘が必要なのかいらぬのか、よくわからない。はっきりしないのに、風だけは強くぶつかってくる。ごわっとひらいた手の平程度の落ち葉がころがっていた。

美里はなれたもので、すぐに大学中庭のベンチを見つけて座り込んだ。女子大生たちが生協で

買い込んだチョコレートを分け合ってはしゃいでいる。煙草を吸っている野郎連中、みなそろいにそろってジーンズ姿だ。中に一部、濃いグレーの薄いチェックを着ている連中もいないことはないが、たぶん高校生連中だろう。目をつけられるんでないかと最初ひやひやしていたけれども、どうやら中学生をいじめて喜ぶような連中はあまりいないようだった。

「貴史、最近けんかしてないんじゃないの？ 青大附中に来てから、あんたおっとなしくなったね」

「別に殴るような相手いねえもん」

靴の紐がほどけていた。結び直しながら汗をぬぐった。

「小学校の頃はすごかったのにね。何があんたをそうさせたわけ？」

「なんてっか、なあ」

考えてみるとわからなかった。むかつく奴や気に入らない連中がいないことはない。クラスの中には弱いものいじめをするような奴がいないから手を出さないだけであって、個人的にはむしろしゃするものがたしかにある。

——たとえば、南雲あたりだなあ。

会った時から虫の好かない相手というのはいるわけで、貴史にとっては規律委員の南雲がどうもその対象らしかった。一言二言交わす時に、妙に気取っている態度が気に入らない。小学校時代だったら。

「立村が押さえてるだろ、しゃあねえよ」

ようやくこれだけ答えた。美里相手だ、そのくらい本音言ったっていいだろう。

「そうなんだ。まさに隠し事得意な人だからね」

「しゃあねえだろ。こっちだって一発ぶんぐってやろうかと思ってたら、あっという間に立村が話をつけてなんもなくなってしまうんだ。俺だってまあ、片付いていれば意味なくバカやる必要もねえから、そのままなあなあになっちまうっていうか、さ」

欲求不満がたまっているのは否めない。貴史は美里の顔を覗き込んだ。納得顔で頷いていた。

「だけどね、貴史」

「なんよ」

「いい時はいいけど、あのままじゃあまずいよね。私、今ほんつとにそう思ったよ」

「今って、ああ今な」

貴史ももし、他に誰もいない場所だったら、ためらうことなく二発くらいぶんぐっているだろうと思う。朝っぱらからアザ作るようなこともしたくない。向こうだって、やり返すだろう。本気出したら怖い奴だ、立村は。

朝、美里が学校帰りに持ちかけたときはさすがにおどろいた。

「立村くん絶対、詩子ちゃんの出る舞台のこと知ってると思うんだ。詩子ちゃんのことには知らなかったとしても、志遠流とかいう日舞の流派については知らないわけ絶対ないし、お母さんが日舞やお茶の関係の人詳しいってのも聞いているはずよ。貴史、昨日立村くんがお母さんらしい人と一緒にいたけど、違うって言われてどうのこうのって言ってたじゃない？ だったらさ、とぼ

けるのもいいかげんにしろって、言ってやりたくならない？ 向こうの性格考えると絶対に、素直に口を割るなんて思えないから、私と貴史とふたりで」

——芝居、かよ。

当然貴史としては止めたかった。あたりまえだ。仮にも貴史にとっては親友で、美里にとっては彼氏の立村をだ。騙すなんてやり方が汚すぎる。

「やめろよ。こけたらお前立村から三行半突きつけられるぜ」

「だってさ、私も貴史も、そのくらいのことたんまりされてるんだよ！ 昨日から言ってるじゃない。私だって何度も、言いたいことあるなら言ってよね、って口すっぱくして言ってるのに、全然聞いてくれないんだよ！ だったら、荒療治するしかないじゃない！」

「お前なあ、難しいこと言ってるんじゃないかねえよ。それだったら、えさでつりあげりゃいいじゃないか」

「えさってなによ」

「ほんとのこと言ってくれたら、ちゅーのひとつでもしてやるって」

「変態！」

すねを蹴られて逃げられた。捕まえるのに一苦労した。ブレザーの襟を掴んで思いっきり突き飛ばしてやった。通りすがりの高校生たちに、

「やだねえ中学生、女子いじめてるよね」

と、非常に勘違いしたネタを飛ばされた。

結局校門で説得されてしまった。

だから話をあわせた。

——でもな、やっぱりやだよなあ。尾を引くぜ。

別れ際の立村が、唇をかみ締めてうつむいていた姿が、二週間前のあのことをいやおうなしに思い出させる。

宿泊研修三日目帰り際も、貴史はぎりぎりのところでがまんして家にかえった。襟ぐり掴んで追い詰めたけれども必死にこらえた。

——やったことが悪いとか、そんな先公みたいなことは言わねえよ。ただ。

バスの中から脱走したことに関して立村は一切言い訳しなかった。次の日、菱本先生により、ある程度かいつまんだ形で事件の真相を知らされたけれども、立村は一言も言い返さなかった。冷たい目で二言三言尋ねただけだった。

いつかは話してくれるだろう。そういう気持ちでどうしようもないということを打ち明けてくれるだろう。これでも仲良くやってきたんだから。美里だって彼女だし、貴史だって親友だ。

ずっと待ちつづけてきた二週間。しかし、立村の口は堅かった。

何事もなく、何も起こらず、当り障りのない言葉だけが続いていた。

「わかった。美里。どうするこれから」

「これからって？」

「教室にもどっちゃうか、それとも大学の中で遊ぶか」

答えはだいたいわかっていた。

「戻ってまたあの不景気な面見て、何が楽しいっていうのよ。向こうが頭にきてるのはわかってるから、こっちだってなににするかわかんないもん」

「わからねえなんて、言うなよ。しゃあねえなあ。美里、今日金どのくらい持ってるんだ？」

「ええっと、千円くらい」

そのくらいあれば十分だ。自転車もある。

「大学の図書館行ってみっか。あそこまで補導員も来ねえだろうし。そこでさ、バンでもかじりながらひとつ、考えるとするか」

美里もようやく笑顔を取り戻した。こいつだって二週間というものの、ひたすら悩んでいたはずだ。自分の彼氏だというのに、何も教えてもらえなかったときたらプライドもずたずただろう。立村は美里がどれだけあの宿泊研修中神経を痛めていたのか想像すらしてないに違いない。どのくらい泣いていたのか、どのくらい心配していたのか、たぶん。

「あとな、確認するが、美里」

「なによ」

大切なことを、もう一度、きちんと確かめておきたかった。

「お前、立村と別れる気はねえんだな」

「あたりまえでしょ！」

——これが本音だよこいつ。

五時間同じ顔をつき合わせていると飽きるのでは、とよく親からも言われるが、なぜか美里相手だとそんなことがなかった。会話が続く続く。切れない。合同家族旅行でも、いつもふたりが車の中で繰り広げる会話のおかげで誰も酔わないという、副産物つきだ。

図書館ではみな必死に、分厚い本を積み上げて勉強していた。閲覧室ではさすがに熱く語るのもためられるので、ロビーの長いすを占領し、チョコレートパンだけ一袋買い込み、ふたりで分け合って食べた。

「要するにさ、立村にいいかげん隠し事するのを止めろって言いたいだけだろ」

「そうよ。それだけよ」

「でも直接言っても無駄だって思うんだな」

「思うよ。何度も口で言ったけど、だめだったんだもん」

「そりゃそうだな。だったら」

ひとつの案を授けることにした。正直、貴史もやり方が汚いと思うのだが、男としては本音でもあるわけで。

「美里、しばらくあいつと口を利くのをやめろ。一緒に帰るのもやめろよ」

「え？」

両手を口に重ねて、咳き込む美里。食いすぎたんだろう。

「つまりだな、男としては、自分の付き合っている女が相手にしてくれなくなったらまず焦るだろ。俺も鈴蘭優ちゃんが……」

「あんた生で会ったこともなくせに、ばあか」

「うるせえ。立村もお前の知ってるとおりに、お前に、まあ、その、あれだってことは男の立場からしてよおくわかる」

「うそばかり」

口ではそういうものの、ソファのクッションを指先でもみもみしているところみると、まんざらでもなさそう。おもしろい。

「そういう相手がだ、いきなり相手にしてくれないとなったらどうする？」

「でも男子だよ。やきもち妬くなんてこと立村くんにかぎって」

「いや、世の中わからねえぞ。まあ代わりに俺と帰ったっていつものことだからあいつも何も言わないだろうよ。他の奴と帰るとか、あとはそうだな、大学にもぐりこむか小学校時代の連中と遊んでるか、言い訳してとにかくあいつから距離を取れ。そうしたら」

「うそだあ」

美里は目を真ん丸く見開いた。

「そんなことしたら、立村くん、あっさり」

「わかってねえなあ、美里。お前、男の心理を全然理解してねえよ。まったく、だから女は神経逆なでするようなこと平気で言うんだよなあ」

「なによ、あんただってその倍言うくせに！」

一瞬、後ろの方から、ちっと舌打ちする音が聞こえた。カウンターに座っている、白いトレーナー姿の若い男性だった。

「もっと小さい声で言えよ。ばあか。美里いいか、よっく聞け」

仕方ない。貴史の経験的男性心理のレクチャーをするしかない。聞きたくてならないのが見え見えの美里が、ずいっと貴史の方に顔を向ける。肩と肩が触れ合わんくらいくっついてしまう。相手が鈴蘭優だったら話は別だろうが、なにせ一緒の布団に寝てもトークで盛り上がるのが関の山の自分らだった。勝手に想像する連中にはば一か、と言ってやろう。

「あのな、男はしつこい女が好きじゃねえんだ。別にしな作って迫るのも気持ち悪いが、こっちの方からべたっとやられると、やる気がだんだんなくなってくるもんなんだ」

「ははん、だから一年のあの子を振ったわけなんだ」

「関係ねえだろ！ とにかくだ、うるさくされると気に入っていた相手ともしゃべる気なくなるし、かえってうざったくなるってわけだ」

妙に納得顔で頷く美里がいる。素直にしてりゃいくらでも教えてやるのにだ。反省しろ、とつぶやいた。

「ふうん、そうなんだ。でも相手によるんじゃない？ それか貴史の趣味か」

「大抵の男はそういうもんなんだ。立村が本条先輩とホモの関係でない限り、奴にも通用するはずだ」

「難しいところね」

おいおい、お前の彼氏だろ、とつっこみたくなるが、ここは落ち着けと自分に言い聞かせた。「けど、一学期の奈良岡と南雲の一件みただろ？ 全然奈良岡のねーさんがその気なかったのに、あの女ったらしがすべてをかなぐり捨てて追い掛け回したっていうあれだ。俺からしたらどうも、きな臭い匂いがするんだが、結局くっついちゃったんだからしゃあねえな。あれがいい例だろ」

「彰子ちゃんの場合は特別だよ。男子は性格のいい子が好きだっていうただそれだけでしょ」

いちいち言い返す美里を説得するのは面倒だ。貴史はひとつ、じゃがっしいとつぶやいた。

「黙れ。要するに俺が伝授したいことってのはだ」

声を低めて、両手に息を吹きかけて。

「立村に追いかせさせろ。美里がもう自分のことを好きでないんでないかって不安にさせてみる。そうしたらあいつだって男だ。必死になんとかしようとするに決まってる。無視されたらその時は、お前もあきらめろ」

「あきらめろって？」

「ま、そういうことはねえと思うがな、あれだけお前のことを清坂氏とか言ってるくらいなんだからなあ。別に好きな奴がいるような顔して、しばらく奴のことを無視してやれば少しは、反省するだろうな。男はな、美里」

最後の秘策を授けた。

「アイドルの追っかけとおんなじだ。手が届かないと思うほど、燃えるんだ」

「あんたと鈴蘭優のようにね」

今度は貴史が美里をかばんでぶん殴る番だった。きゃあ、っと小さな悲鳴をあげつつ、尻でパンをつぶしそうになりながら、ソファーに倒れこんだ。

羽飛家と清坂家を知る人にはごくふつうの日常なのだが、どうもこの図書館では違うらしい。斜め前のコピー機前に並んでいた五人の男女が、申し合わせたようにじろっとにらみつけてきた。

「どうする？ 場所移動する？」

「そうだな、次は生協のカフェテリアだな」

そそくさと図書館を後にした。まだ一時間目は終わっていないだろう。

やはり空は雨が降りそうで降らない、しけた風が吹いていた。

3 清坂美里は見たもので判断する

小遣いはかなり減ったけれども、久々のおさぼりはなかなか楽しかった。連れの相手が貴史だったから、気兼ねなかったっていうのもあるだろう。別の授業でたまたまビデオ映画が放映されていたのでこっそりもぐりこんだり、カフェテリアで贅沢してアイスクリーム付き珈琲ゼリーを頼んだり。

四時過ぎになるまでずっと遊びほうけていたかった。

「明日は、どうする？」

「学校に戻るしかねえだろ！」

「そだよねえ、でもさ、念のため教室に戻ってまない？」

美里は時計の針が四時十分をさすのを確認してから中学の方角を指差した。

「だな、なんかプリント渡されてたらしゃれにならねえし」

見事なくらいのさぼりだったから、たぶん明日、先生には呼び出しを食うだろう。それは仕方ない。あとでこずえにクラスがどんな状態だったかを確認すべく電話をかけようと決めた。

空はまだ雨が降らなかった。途中、

「やっぱりあんたらさぼってたんだあ」

と、他のクラスの子から声をかけられたりもした。でも貴史と一緒に行動することは、すでに当たり前のことになっていた。そう思うように仕向けたのだ。一年間、クラス、教師、その他もろもろよく教育したと、美里は思う。

いつもだと教室に誰かかいらいるのだが、今日はひとりもいなかった。いつも残っている相手の代表格、立村上総の姿もなかった。

——しかたないよね、帰ってるか。今日は委員会もないから、本条先輩のところに行ってるのかな。

「本条先輩」と名前が浮かんだとたん、ちりりと心に紙の破れる音がした。

——きっと、立村くんは本条先輩にだけ、本当のこと話してるんだらうな。

——私には絶対話せないこと。

「おいどうした美里」

うつむいてしまったのに気付かれたらしい。貴史がちょっとだけどすの利いた声で尋ねてきた。だんだんぎこぎこ声に変わってきている。

「なんでもないよ」

掃除の終わったぴかぴかの机と床。美里は自分の机にしゃがみこんだ。まずかばんから筆記用具とノートを用意した。一枚引きちぎってメモを残した。

「何書いてるんだよ」

「菱本先生に、今日のごめんなさいって」

——菱本先生、今日はさぼってしまいごめんなさい。明日はちゃんと学校に来ますからよろしく！

「なんだよ、これ」

「ほらあんたも書いときなよ」

貴史にマジックペンを渡した。書くまで見張るつもりでいた。

「どつぼにはまりそうな気、するけどな」

——先生ごめん。いろいろと事情があるんだ。人生いろいろあるってことだよな。

お互いの名前を最後に記した。教師用の靴箱に入れておくことにした。

「じゃあさてと、万が一うちに連絡が入っていた場合の言い訳を考えるか」

「そうね、でもまあいろいろあったとごまかすしかないよね。たぶん菱本さんのことだから、すぐに連絡が行ってるとは思わないけどね。大学の図書館で調べたいものがあるって貴史をひっぱっていったら、あつという間に時間が経ってしまってたってことにしようか」

美里なりに考えた案である。学校がどれほどのものかと割り切っている両親に言い訳するのはそれほど辛くないけれど、やはりさぼりはまずいだらう。特に原因が立村くんのことだとしたらなおさらだ。

——なんかわかんないけど、うちの親嫌がってるらしいもんね。あの人のこと。

「わかった。口裏あわせとく」

「お願いよ。さてと、なんかプリントかなにか入ってるかな」

机の中を覗き込んだ。学校を休んだ次の日、必ずなにかかしら入っているものだった。たぶん誰かが入れてくれたのだろう。左手でかき回してみると、しゃかしゃかと音がした。かなりたくさん入っている。ノートかもしれない。引っ張り出してみると、「学年だより」「保健委員会だより」に混じって分厚いコピーが十枚くらい、二つ折りで押し込まれていた。

「なんだろうね、これ」

言いながら開いた。

——立村くんの字だ。

書道の楷書に似た細い文字だった。和歌でも短冊に書いて飾っておきたい、そんな細々とした文字だった。見忘れるはずがない。名前がなくてもわかる。

「おい、美里、これってさあなんだよ」

窓際で背中の中のシャツを橙色に染めてかがみこんでいた貴史も叫んでいた。

「わかってるってば」

「わかってるっておい。お前のところにも入ってたのか？」

窓から差し込んでくるいきなりの夕焼け色。うす曇の雲が突然裂け、溢れている輝きがまぶしかった。さっきまであんなに暗かったのに。貴史の全身を染めていた。どう思っているのかは光に溶けて見えないけれど。

「これ、立村くんのノートまるまるコピーだよ。英語も、国語も入ってる」

「あいつコピーしたのかよ」

「今日の数学、立村くん空間図形のこんな難しい問題、自分で解けるわけじゃない。いつだって狩野先生に小学生レベルの易しい問題渡されてるんだよ。絶対に難しい問題写すわけじゃない。それに英語だって」

あせってめくり取り落とした。しゃがみこみ、広げた。

「私だったら絶対こんな難しい訳つけないよ。引用文まで写したりしないよ。全部立村くん、明日の分の予習分、全部作ってくれてる」

「あいつがか」

拾い集めてもう一度たたんだ。手がコピーのインクでうっすら艶のある黒味を帯びた。ハンカチでこすろうとしたとたん、鼻のところがつんとして息が詰まった。目を閉じたとたん、まぶたが熱くなった。

「おい、どうした美里」

「違うよこんなの」

貴史が橙色の光から飛び出してきた。背負った影が長く伸びた。近寄られると体温からか、じわっと首筋が熱くなった。たぶんさっきまで浴びていた夕日の余熱なのだろう。かえって泣ける。美里はコピー用紙を机に叩きつけた。他の関係ないプリント用紙が滑り落ちた。

「私、こんなことしてほしかったからじゃないって、どうしてわかんないのよ！ どうしてよどうしてよ！」

「おいおい何いきなりわめいてるんだよ」

「わかってないのよ全然！ 立村くん、これで罪滅ぼししたつもりなんだよきっと。立村くん、これで私にあやまったつもりでいるんだよ。ばかみたい。そんなことしてほしいからじゃないんだよ。どうして立村くんには言葉が通じないのよ。もういやだよ」

言葉は返ってこなかった。いつもなら貴史も立村くんについてかばう言葉を口にするはずなのに、窓の方を向いて顔を見せないようにした。美里の机に尻を押し付け、身体を折り曲げていた

「貴史、わかってるよね、あの日のこと。なんで立村くんが宿泊研修三日目の日、大嘘ついてバスから飛び降りて美術館に逃げ出したのか。理由わかってるよね」

「ああ」

首を振りたくてならなかった。わかってるなら言ってほしかった。

「A組の人たちと合流するのをやめさせたかったんでしょ。ただそれだけでしょ。そりゃわかるよ。前の日だって立村くんずっと菱本先生に食って掛かってたもん。A組の人が退学するから集まっているだけだから、ほっといてあげてほしいって思うのが立村くん流だよ。わからないわけじゃないけどでも」

「まあな」

貴史の返事は短い。

「でもどうして、私に言ってくれなかったのかわかんないよ。ううん、貴史にだって一言も、ぎりぎりまで言ってくれなかったんでしょ。わざとこずえの隣に座って、わざとものを外に落としたりして、わざと菱本先生に泣きついて下ろしてくれって嘘いって、あんな情けないことしてまでして、なんでそこまでしなくちゃいけなかったのか、私にはわかんないよ」

「俺たちだったら、もっとうまくやったよな、美里」

こらえきれない、身体を顔を焼き尽くすのは、きっとあの夕日だ。沸騰してしまいそうだった。

「だいきらい、あんな奴、だいきらい」

涙曇の眼に、テレホンクラブの電話番号がプリントされた深紅のポケットティッシュが見えた

。貴史がポケットから出したものだった。まだ手付かずだ。コピーの上にぽんと置いてくれた。

家に戻ったのはかなり遅かった。親の顔を覗き込んだが何も知らされていないらしくいつものように洗濯の手伝いをさせられた。やっぱり菱本先生、その辺はわかってきている。怒られたくないのは当然だ。明日言い訳しておこうと決めた。優等生っぽく、「図書館で本読んでいてはまった」が一番だろう。

部屋に戻ると一通、手紙が机の上に置かれていた。

銀杏のイラストで飾られたきれいな封筒。

差出人は「藤野詩子」だった。

——詩子ちゃんだ。

——一年ぶり、だよ。

すぐに封を切った。たった一枚だけ一筆書きの便箋が入っている

——清坂美里さま

お久しぶりです。お元気ですか。

このたびは、いらしてくださるそうでありがとうございます。

ぜひ、楽屋にもいらしてください。

お待ちしております。

木々が揺さぶられて葉が落ちた時、きっと幹は淋しく思うのだろう。

来てほしくないというのが見え見えだ。

言葉どおりに受け止めれば、感謝で一杯なのだろうけれども。

——前の詩子ちゃんだったらもっと、いっぱい書いてくれてたよね。

決して文章が巧いわけではないけれど、以前の詩子ちゃんだったらもっと、学校のこととか、クラスのこととか、家族のこととかをたくさん綴ってくれたはずだった。なのに、用件と心のこもらないありがとうだけ。

——きっと詩子ちゃん、まだ私のことを許してないんだ。

封筒にしまおうとしてびんせんをひっくり返した拍子に、銀色の文字がちらっと横切った。目に入るか入らないか、本当に小さく。本文よりも丸っこい文字だった。きっと封印する寸前に書き込んだのだろう。目に近づけてゆっくり読んだ。

——時辻さんという人、青大附属にいますか？

——今度会った時、教えてください。

三回読み返した。何度読んでもわからない。

——時辻さんってだれ？

——少なくとも二年にはいないけど。

——詩子ちゃんの知り合いなのかなあ。

「立村」ではないのかと何度もみ返した。でもどうみても「時辻」としか読めなかった。別の関係で、詩子ちゃんには知り合いがいるのだろうか。

「今度会った時、教えてください」とあるところみると、十月五日に美里と会って話をしたいという気持ちはあるのだろう。別の日に会いたいから電話をよこせてことかもしれない。どちらにせよ、落ち着かないので美里としては時間を作って会いたかった。顔を合わせて一対一で話をしないと、伝わるものも伝わらない。あのばか彼氏で泣きじゃくった後の美里としては、なんとか口ですべてを伝えたかった。

——詩子ちゃんに会おう。絶対に。

——私が、青大附属に行こうと思った理由をすべて話そう。

——これで詩子ちゃんとはこれっきりになるかもしれないけど、でも。

こらえて知らん顔で楽屋を尋ねてゆくのだろう。立村くんだったらきっとそうするだろう。何事もなかったかのように友だちづきあいをしつづけるのだろう。立村くんのように。

でも、明日から美里は立村くんを一切無視しつづける予定だった。

立村くんのやり方を真っ正面から否定してやるつもりだった。

後ろには貴史もついている。

相手のやり方を別の友だちで真似るのだけは、絶対にいやだった。

——私は、あんたが間違ってるってこと、絶対に認めさせてやるんだから。立村くん。あんたが何も言わないから私が怒ってるってこと、わかってもらわないと、絶対に困るんだから。私だけじゃない、貴史だって絶対そうなんだって。

1 立村上総としては当然のことだと思い

全く状況は変わっていない。

「あのさ、立村も何やってるんだかねえ。美里を怒らせるようなことしたわけ？ あんたにはもう少し気合入れてがんばってもらわないと、こっちの方が大変なんだからね」

朝一番、古川こずえのやかましい声が耳をつんざいた。

「古川さんに何迷惑かけたっていうんだよ」

「羽飛と美里がくつついちゃったらどうするのさ」

靴をすのこの上で履き替えながら、上総は深くため息をついた。

「それでもいいだろ、別に」

昨日、美里を追いかけて貴史まで姿をくらましてしまったことに、きっとこずえは動揺しているのだろう。そうに違いない。一年の頃からこずえは「羽飛がんばれー！」の絶叫で並み居るクラスメート一同を凍らせていたのだから。非常に分かりやすい「好き」の表現者だ。

もっとも貴史は全く無視しているらしい。タイプではないらしい。何のことはない。貴史の場合アイドル鈴蘭優ばりの美少女でないかぎり、女を感じないのだからしかたない。

——羽飛もな、人のことばかり面倒みてないで自分のことも。

上総から見ると、こずえと貴史はなかなかいいコンビになりそうな気がする。妙にいちゃいちゃしない、からっとした、他人様にも迷惑をかけない感じの仲良しにだった。南雲と奈良岡彰子ほどくつつきあっていない。自分と清坂美里ほど隔たりがない。

——でも、そんな面倒なことしたくないってのもわかるよな。

しつこく顔を覗き込んでくるこずえを手で追い払った。

「古川さん、俺以外にもかまいたい相手がいるんだろ。ほらさっさと行けば」

「なあに言ってるのよ。エッチの対象外だから安心して話せるんじゃないの」

「あのさ、朝から話すことじゃないだろ」

よくわからないがこずえは決して上総のことを嫌っていないというのがよくわかる。だから安心して下ネタの応酬ができるってわけだろう。裏を返せば色恋の対象外だと割り切ってくれているから、何を話しても傷つけないで済む。こういう付き合いだったらいくらでも受けて立つのに、なんで。

——清坂氏とはうまくいかないだろう。

——付き合うって、やっぱり、よくわからないよな。

外は黒雲に覆われている。驟雨の到来か。上総は三年側の靴箱を、身体斜めにして覗き込んだ。A組の、下の段が乱れていないかを確認めた。本条先輩の靴がその辺に並んでいる。来ていたら靴箱が開いたままになっているはずだった。

「ほらほら、行くよ」

憎まれ口を叩きながら待っていてくれたらしい。好意を無にするのもなんだってことで、上総はこずえと並んで歩いた。階段を昇りがけに、また一発、

「でさ、今日あんたも朝、大丈夫だった？」

「なにがだよ」

「朝立ちあった？」

いつものパターンだ。さらりと流した。

「あったらどうする」

「いや、ストレスたまるといろいろ男子って大変だってきくからさ。お姉さんとしては気にしてやったのよ」

「そういうのを、よけいなお世話っていうんだよ。女子のみなさんには気遣いのひとつとして覚えておいた方がいいと思うな」

顔をしかめて見せたこずえ。やれやれといった風に片腕をぐるんと回した。

「あのさ立村、あんたどうして女子みたいな発想するわけ？ 昨日あんたが美里を追いかけてなかった気持ちもわかんなくはないけどさ、でも」

「話を蒸し返すようだったら、今のネタを全部羽飛に言いつけるからな」

こずえの弱点を知っている上総の逆襲技。貴史の前ではもう少し可愛く見せたいと思う乙女心だ。みんな承知しているのにつっこまないのは、後でこずえに下ネタ攻撃されるのが怖いからだろう。その点、上総は一年半、猥談攻撃に慣らされていた。

「わかったわよ。ほんっとあんたって反抗期よね」

三年A組の教室に寄ってからにしようと思われ、二階まで来たところでこずえと別れた。来週の評議委員会に関する資料、十月末の学校祭、および二年限定合唱コンクールに関する意見書を本条先輩に渡したかったからだった。理由はある。

「なあに逃げてるのよ」

とはこずえの捨て台詞だった。

用事があるのだから仕方ない。

三年の教室にはだいぶ人が揃っていた。顔見知りの先輩も並んでいた。

上総が扉を開けて覗き込むと、

「まだ本条来てねえぞ」

と声をかけてくれた。二年間しつこく通い続けたかいあって、すっかり「本条里希の弟分」としての認識を持たれているらしかった。クラスにいづらくなって休み時間、本条先輩のいる場所に避難したことも一度や二度ではない。無理やり用事を見つけては側にくっついていて、時間をつぶすだけのことだ。十分いやされた。

少し待つつもりで廊下の窓辺にもたれた。

外にいのししめいた雲が通り過ぎているのが見えた。

昨日と違いだいぶ冷え込んできたのが肌で感じられる。首筋、手の甲の皮が堅くなっていた。上総は外をぼんやりと眺めながら、銀杏の葉が黄葉していないかを確認した。一枚もその気配

なし。かばんからノートを取り出した。昨日の夜は眠れなかったから、十月の学校祭、球技大会、二年限定合唱コンクールの手はずについて書き込んでいただけだった。

ゆっくり動いていく黒い雲。

——本条先輩、公立高校行くんだよな。

誰にも打ち明けていないと、本条先輩は夏の評議委員夏合宿の夜話していた。

確認していないけれども、まだ他のクラスから「評議委員長本条里希が公立高校を受験する」噂が流れてこないところを見ると自主的に話をしてはいないらしい。知っているのは上総だけなのかもしれない。男女問わず交流の多い本条先輩だが、とりわけて親友と言える相手がいるわけではなさそうだ。上総も一年半じっくりと観察してきたが、男性との友情関係はつかず離れず、上手に取っているふうに見えた

——いなくなっちゃうんだよな。

もう一度心でつぶやき、上総は二階に下りていった。すれ違うかと思って何度かきよろきよろした。全く気配がなかった。二年D組の教室にたどり着くまでの間、友だちとは顔を合わせたし挨拶もしたけれど、結局本条先輩の姿は見かけなかった。

「立村、お前なあ」

開口一番。

貴史が上総の机に寄りかかって腕組みをして待っていた。

「ああ、羽飛、昨日はごめん」

「そんなのどうでもいい。あのな、よく聞けよ」

機嫌は決して良くなさそうだった。腰を低くして貴史の側に寄った。

「ごめん、俺も悪かった、だから」

「黙ってる、お前美里があの後どうしたのか知らねえのかよ」

美里の席はからっぽだった。貴史の首の陰から覗き込むが、他の女子が勝手に椅子を借用してだべっているだけだった。

「清坂氏、まだ来てないんだ」

「当たり前だろ！　ここだけの話だがな、立村」

声をくぐもらせて貴史が耳にささやいた。

「美里、お前に相当愛想尽かしたみたいだぞ。あいつ、真剣に今後のこと考えねばって言ってたぞ」

「今後って、なんだよ」

にやっと笑って上総のネクタイを軽く引っ張った。

「お前は一年半しかあいつのことを見てないから知らんだろうが、美里は結構、上級生受けする性格なんだ。かなり、今までもちょっかい出されてたらしいんだ。でも立村がいるからってことできっぱり断ってきたらしいけどな。聞いてねえか。でも、言ってたぞ。『一回、まともな人と付き合ってみて、それから立村くんとどうするか考えた方がいいかも』ってな。まあまだ、相手を選ぼうとか、そういうとこまでは進んでないみたいだけどな。立村。お前本当に、このままだ

と美里に縁切られちまうぞ」

「縁を切られるって言っても」

上総は貴史と互いの顔を見交わした。嘘を言っていないか、もしかしたらたくらみごとを隠しているのか、どちらかを確認したかった。

「昨日お前、結局美里を追っかけなかつた。あいつのことだ、もしかしたら立村が引き止めてくれるんでないかと真剣に思っていたらしいぞ。せっかく追っかけてやったのにさ、俺なんておよびでなかったみたいだしな。しゃあないから、俺があいつをとっつかまえて聞き出したところ、そういうことだ。立村、本当にこのままだと大変だぞ。まあ、俺には関係ねえけどな」

以上、一切、周りのクラスメートには聞き取れない声でささやき、貴史は自分の席に戻った。誰かがいきなり蛍光灯をつけた。初めて教室が暗く、人の顔色を読み取れないくらいだったことに気が付いた。

——縁を切られるったって、羽飛。

扉をもう一度眺めやった。

「ねえねえ、何話してたのよ。羽飛とさ」

「なんでもないよ」

席につくやいなや隣りでせつつくこずえをあしらい、もう一度前がわ、後ろ側の扉に目を走らせ、あきらめた。来てもこなくても、どっちにせよ。

——俺はどうすればいいんだろう。

美里が入ってきたのは後ろ側の扉からだった。上総の席の隣りを行き過ぎる際に、一言、
「昨日は、ありがと」

そっけない礼を告げた後、さっさと自分の席に付いた。

見るからにご機嫌はよくなかった。

「あのさ、清坂氏」

「あ、もういいから」

目を合わせずに上総の言葉を打ち切った。二の句が継げない上総を一切無視し、教科書の準備をし始めた。貴史に向かって軽く手を上げてなにやらひそひそ話をしている様子だが、当然声は聞こえない。

「あんたねえ、本当に男としてやることしなくちゃだめよ。立村、あんたさあ、美里と羽飛くっつけてどうするのよ。ほらほら、浮気されてるかもよ」

「別に、それはそれで」

するするっと言葉が流れた。

「俺は羽飛と清坂氏が付き合うようになったとしても、そのままでもいられると思うけどな」

決して深い意味はなかった。

少なくとも上総はそういうつもりで言った。

「立村、ちょっとこっち向きな」

平らな声で呼ぶこずえ。振り向いたとたん、筒のようなものが目に入り、避ける間もなく頬をはたかれた。地図帳を丸めて制裁を加えたつもりらしい。本の角が頬を擦った。

「なんだよ、冗談やるにも程があるよな」

「お黙り。お姉さんの言うことをよく聞きな」

片方の耳が少しハウリングしている。上総は頬をさすりながらぎっとこずえをにらみつけた。当然の権利だ。

「古川さん、なぜそういう暴力的なことをするんだよ」

「正当な意味での体罰は必要ってことよ。あんた、自分が何を言ってるかよくわかってないんじゃないの。まずあんた、誰に答えた？」

「そりゃあ、古川さんに」

「私が誰に熱上げてるかよく知ってるよね」

「ごめん、忘れてた」

「それはいいよ。どうせ脈ないって思ってるだろうしね。それから、美里とあんたはどういう関係？」

「関係って、まあ、一応」

「彼氏彼女ってことは、了解あればキスもできるしエッチもできるってことだよな」

過激な朝の漫才。この辺りはポーカーフェイスで通すことにした。

「立村、あんたそういうことを自分の大切な相手が他の男とそういうことしているって想像できる？ 羽飛にされたらどうするか想像したことある？」

「だから別に、友だちなんだから」

言い終わる前にもう一発肩を殴られた。避けられない。

「あんたの言ってること、美里のことなんてどうでもいいって意味に取られたってしょうがないよ。あんた、英語は天才的だけど、日本語の素養全然なってないよね。少し反省しな。もし立村、あんたがおんなじこと言われたらどうするのさ。美里に、私とあんたがくっついても付き合いできるって言われたら」

少し考えて、上総は答えることにした。

「そうしたら古川さんが逃げるだろ。でも、仮にそうなったとしても、四人でしゃべることには変わらないんじゃないかな」

全く何も考えてないのに、なぜ目が吊り上がるのだろうか。こずえが貴史にほの字だというのは前から知っていることだ。できれば二人がうまく行ってほしいと思っている。ひそかに応援してやることに決めている。

美里と貴史にやきもち妬いているならば話はわかる。

——古川さん、なんで憤ってるんだろ。

上総にはどうしてもわからなかった。

「あんた、どうして友だちってことにこだわるんだろうね。ったく、ガキなんだから」

「悪かったな」

話を打ち切りもう一度、貴史と美里の顔色をそっとのぞいてみた。こずえとのやりあいを盗み

聞きそた様子はなかった。もしかしたら傷つけてしまう言葉だったのかもしれない。上総としてはただ。

——ふたりとも、俺にとっては大切な友だちだからそう言っただけなのにさ。

思えば思うほど、ずれていく言葉の地軸。元に戻したくて必死に突っ立てているのに。

授業が一通り終わるまで、上総はほとんど貴史と会話を交わさなかった。不自然な無視ではない。出席番号順に並ぶ授業がたまたまなかったことと、南雲とまたいつものように音楽の話題を交わしたり、委員会の最新情報をまじえたり、盛り上がっていたから、ただそれだけだった。

帰りの会、締め言葉の最後に、担任菱本先生は、貴史と美里を指差した。

「今日は居残りしろよ。羽飛、清坂。終わったら生徒指導室に來い」

真面目な顔をしているけれども唇からは笑みがあふれんばかりだ。決して鉄拳制裁を加えようとはしていないらしい。

ふたり、肩をすくめ、目配せしてなにやら合図しているらしい。

上総は終礼が終わるとちらりと背中に視線を走らせた後、大急ぎで教室を出た。

——昨日のことで絞られるのかな。

——次は俺が呼び出されるかもな。その時はその時だ。

外は土砂降りだった。廊下に少し、傘から落ちた雨粒が染み付き床を濃い色に染めていた。

2 羽飛貴史としてはここで押さえておかねばならないと思い

「いい？ 貴史、部屋に入ったらなにはともあれすぐ、ごめんなさいってするのよ。そうすればあとはこっちのペースなんだから」

「美里もずいぶん、計算高い性格になったよな」

帰りの会が終り、立村が脱兎のごとく教室を飛び出していったのを見届けて、貴史は美里に返事をした。

「何考えてるんだろうな、しかしあいつも」

「知らない、そんなの知ったことじゃないって。もう」

美里の演技も相当なものだと貴史はうなっていた。前の日に授けた「男心をかく乱させるためのテクニック」を、美里はすっかり身に付けている。女って、一時間で変わるもんだ。つくづく感心しつつも、思う。

——いざという時は俺も、気をつけられてことだよな。美里と立村で、俺の将来の勉強をするってわけかよ、なんだかなあ。

窓ガラスを叩いている雨の音。この中を走って帰ったとは思えない。立村の姿を探したけれどいなかった。きっと、三年A組の本条先輩にぐちりに行ったに違いない。美里に嫌われたんでないかと真剣に相談しに行ったに違いない。

——俺には話さないことでもな、本条先輩にだけはホモみたいにくっついてるからなあ。

男相手に嫉妬するなんてもったいないことはしない。それが貴史の主義だった。しばらくは放っておくつもりだった。

美里がかばんに教科書類をしまいこむのを待ち教室を出た。いまさらひゅうひゅう言う奴はいないけれども、なんとなく細い視線がからみつく。振り返ると、B4版のスケッチブックを開いて他の連中としゃべっている南雲から発せられていた。ずいぶん、きざったらしいまなざしだ。髪も裾をぎざぎざにそろえ、前髪の付け根を軽く持ち上げたすマイルだ。こっちを見ているだけだ。

——ったく、何か文句あるのかよ。

見られているだけでむかつく。時間があればいちゃもんつけてもいいが今日のところはがまんしてやろう。貴史は音を思いっきり立てて扉を閉めた。

「貴史あんた、ちょっとでかい音立てすぎだよ。みんな白い目で見てたよ」

「いいじゃねえか。どうせ」

生徒指導室は三階の視聴覚教室隣りに配置されていた。放課後に問題のある生徒を呼び出すための場所だから、あまり人気のないところがよいという配慮からなされたものだという。実際は遅刻の多い奴が説教されたり、公立高校受験などで相談する人が先生に呼び出されたりとか、そういう使われ方が多いらしい。

「貴史、生徒指導室に呼ばれたことあったっけ」

「なんども。違反してる格好だとか、髪にポマードつけるのやめろとか」

「それって趣味の問題よね。校則がどうのこうのっていう以前にね」

軽口を叩きながら人気のない生徒指導室の前に立った。

「あんた、入れば？」

「わあった。じゃあノックは美里、お前がしろ」

人差し指を鉤型にして、奥ゆかしく美里が扉を叩いた。

「どうぞ」

菱本先生の声だった。

「じゃあ、行くわよ。いっせえの一で！」

結局美里が扉を開き、ふたりで合唱した。

「先生、昨日はごめんなさい！」

先手必勝。あっけに取られているのか菱本先生はうすく唇を開いたままだった。とにかく先に謝っておいて、深い追求を避けるようにしよう。美里と前日から本日にかけて煮詰めておいた計略だった。

「全くお前らふたり、いきなりエスケープするから心配してたんだぞ。ほら、座れ」

革張りのソファーにふたり並んで座った。真正面からは樹齢百年以上は経っているであろう銀杏の木がカーテンから見え隠れしていた。気付かなかったけれども、ずいぶん葉が黄色く染まっている。

菱本先生がげんこつで頭を撫でた。痛くない。手加減しているところみると、ご機嫌はそれほど悪くなさそうだ。美里と目配せしつつ頷いた。

「じゃあまず罰の宿題だ。国語、英語、数学、社会。このプリントを明日までぜんぶやって来いよ。昨日の授業分、ずるけたんだからそのくらいはやれよ」

立村がコピーしてくれたノートのことを思い出した。

「すみません。けど、全部やるんですか？」

すっかり気を抜いた様子の美里が、渡されたプリント類をめくり、うんざりした顔を見せた。そりゃあ貴史だってあきあきする。

「出来ねえよ、先生。反省してるんだけどなあ」

「ばか者、一日休んだら授業についていくのに骨だと思ったから、俺が他の先生に頼んで作ってもらったんだぞ。感謝しろ」

これ以上つつこんでも意味なし。判断して貴史はかばんにしまいこむことにした。美里も真似をしていた。

「それはともかく、羽飛、清坂。ここだけの話、いきなり学校を抜け出したりするのは、それなりに事情があったんだろ？ 話せることだったら話してみろ」

「人生いろいろあるもんで」

茶化してごまかすつもりでいた。美里も大きく頷いた。

「いじめとかいやがらせとか、かつあげとかじゃないから安心してください。まあただなんとなく、って感じ」

「なあにふたりでおちゃらけてるんだ。あのな、清坂。ここだけの話、立村と何かあったんだろ？」

——知らん振りしろ、美里。

貴史の方を見て、物言いたげに「どうする？」という視線を送るのはやめてほしかった。ばればれじゃないか。

「先生、なんで立村のことなんて出るんだ？ 誰かそんなこと吹き込んだのか？」

ため口を叩いても菱本先生は怒らなかった。嬉しいのだ、きっと。

「朝、クラスの連中から聞いたぞ。みんな心配していたんだ。立村を含めた三人組で口げんかしていて、清坂が激怒して飛び出して行って、羽飛が慌てて追いかけて行ってと」

「で、立村が取り残されてってわけかよ」

ぼろっと口からこぼれてしまった。いかんと思ったが遅かった。やっぱり菱本先生は大人である。にやっと頬の筋肉を持ち上げた。

「無断欠席はまあ誉められたことじゃないが、まあ、騎士が姫を守るために飛び出したということで、そうだな。お前たちの家に報告することだけは止めておこうか」

「どうせ一学期の出席日数、通信簿に書かれればばれるけど」

よけいなことを言う美里。どうやら美里も完全に菱本先生の手落ちたらしい。立村のように大騒ぎ起こすよりも、適当に妥協しておくのもひとつの方法だ。

——どうせ、関係ないもんな。菱本さんとはな。

貴史も部屋の中ではへらへらすることに決めた。

菱本先生は両手を組んで二人の視線にあわせるようかがみこんだ。

「羽飛。ここだけの話、立村とはあの後、うまくやってるのか」

美里に尋ねないところがやはり、教師だ。貴史にとって立村は「親友」だが、美里にとっては「恋人」だ。中学生の恋愛なんておおっぴらに認めたくないのだろう。「友情」で通すしかないだろう。

「別に、なんもないけど」

「宿泊研修の時のことを、まだ引きずったりしてないか。あいつは」

宿泊研修三日目後遺症がかなり残っているらしい。貴史はつんと鼻を天井に向け、ちょっとだけ考えた。隣の美里がぎゅっと口を引き締めている。聞かれても変なこと答えるもんか、と言いたげだった。

「先生、ショックだったよなあ。気持ちわかるよ」

「そうか、わかるか。羽飛」

苦笑と一緒に小さく頷き、菱本先生は立ち上がった。後ろの方に缶ジュースを用意してくれていたらしい。三本、ガラステーブルに置いた。だいぶぬるまっていた。

「内緒だぞ」

「ラッキーかも！ ありがとうございます！」

美里も用心していたようだが、食べ物飲み物には弱い。永年美里と行動を共にしてきた貴史には、油断マークが点滅しているのがよくわかった。美里を手なづけるにはケーキがあれば一発だ。あまったるいオレンジジュースをすすった。ひじで小さく美里を小突いた。知らん振りしている。

宿泊研修三日目帰りのバス内で、立村がいきなり窓からものを落としたと騒ぎ出し、無理やりバスを止めさせ降りたはいい。しかし進行方向とは反対側にいきなり走り出し、バスの運転手は計画どおりとばかりに美術館へゆっくりと進んだ。当然、二年D組連中および菱本先生はしばし懨然然然。美里も当然、泣かんばかりだった。

貴史も思わず、

「あの大馬鹿野郎！」

と絶叫したのを覚えている。

意外と落ち着いていたのが立村の相手をしていた古川こずえで、

「やっぱりねえ、なんかたくらんでいると思ったけどね」

わざとらしいため息を吐いてみせ、美里をさらに激昂させた。

「悪いけどさ、さっき立村、キーホルダーを落としたふりしてたけど、人差し指にひっかかったままだったよ。先生、気付かなかったの？」

かわいそうだったのは菱本先生だ。さすがに貴史もこれは同情してしかるべしだと思った。頭を抱え込み、運転手に激しく抗議し、

「運転手さん、教師にとって、自分の受け持ちの子どもは、ほんとの子どもみたいなもんですよ

。それを、なぜ、そういうことをするんですか！」

見た見た。充血していた瞳を。菱本先生は熱血漢でかつ、真っ正面から受け止めてやろうと必死な男だと、貴史は認識していた。男としていい根性はしている。やり方があざといと思わなくもないけれど、貴史は嫌いなタイプの男ではなかった。少なくとも南雲のようにいつもへらへらして、女にだらしなくて、自分の見た目ばかり気遣っている奴よりははるかにましだと思っていた。

——しかし、古川もずいぶん冷静だよなあ。あいつも見た目よりかなりばりばりなのかもなあ。単なる下ネタ女王じゃねえってわけか。

口には出さない。気があると誤解されたらもっと面倒なことになる。だから言わない。貴史はこの一件で古川こずえの頭脳明晰に一目置くようになった。さすが、美里と対で付き合える女子だ。

「先生、俺さ」

美里がジュースをすすりながら貴史に顔を向けた。無視して続けた。

「バスの中ではさすがに言えねえなあとは思ってたんだけどさあ。ここだけの話」

「ここだけの話、か。まあいいだろう。言えよなんでも」

心を開いた振りをするだけで、乗ってきてくれる菱本先生だ。

このくらい立村だってやればいいんだと、貴史は思う。

ぬるくなったオレンジジュースを頬に擦り付けるようにして飲み、貴史はぐいと身を乗り出した。

「先生、立村のこと、男として嫌いだろ」

凶星を差してやった。たぶんそうだろうと前から思っていたけれど、さすがに教師だから言えないだろう。そんなこと。

「おいおい、それは違うぞ。担任が受け持ちの生徒嫌ってどうするんだ。ばかだなあ。そう見えるのか。羽飛には」

菱本先生はにやっと笑って美里に話し掛けた。貴史に言葉は返しているが、聞かせたいのは美里の方だってことだ。分かりやすい態度である。貴史はさらに続けた。

「言い方代えろとさ、先生の友だちとして付き合う場合、ああいう奴、苦手だろ」

「羽飛にはまいったなあ。まあなあ、たぶんああいうタイプで遊ぶ友だちはいないなあ」

玉虫色のお答えである。もちろん視線は美里を向いたままだ。不気味がっている美里の気持ちはわかる。でももっとつつこまないと話が進まない。

「だろ。俺も先生の気持ちわかるよ。あの宿泊研修の時、すっげえ俺も頭にきたもんな。なんで誰にも何にも言わないで勝手にやっちゃうんだってさ。今だから言えるけど、一発ぶん殴ってやろうって本気で思ってたんだ」

「ほう、立村をか？」

「先生だってそうだろ？」

菱本先生は軽く握りこぶしをつくって、軽く揺らしてみせた。

「でも羽飛が殴ったら、立村ふっとんでしまうんじゃないか」

「あいつ、見た目よりも根性ある奴だから、たぶん五分だと思う。先生はたぶん知らねえと思うけどさ、立村は見た目よりすげえ喧嘩強いと思うんだ。だから俺もよっぽどのことがないと手を出したくないんだ。だから、まあがまんしたってわけなんだ、けどさ」

言葉を切って菱本先生の出かたを待った。同時に美里に伝わっているかどうかを確かめた。軽く美里の足を踏んでみた。黙ってろ、の合図だ。

「そうか、お前立村のことを結構買っているんだなあ」

だんだんひっかかってきた。もう一度美里の足を踏んづけて、こくこく頷いた。

「そうだよ。先生さ、なんで立村が評議としてずっとみんなから評価されてるか謎でなんないだろ。そういう顔、いつもしてるもんなあ。あいつも見栄っ張りだから表面ばかりいいようにしてごまかしてるけど、本当はずっと頭も切れる奴だってことまで隠してるんだ。俺にはわかるんだ。な、美里もわかるだろ」

じょじょに美里の顔が赤らんできた。決して部屋の中が暑いからではない。

「友だちとして、立村と会話が続くのか？」

「いや、それがさ」

ここでひとつ、爆弾を投げてみよう。貴史は美里をちらっと見やった。とにかく、美里に口出しをしてほしくない。瞬間沸騰で思いついた湯気のような案だった。かき回されたら消えてしまいそうだった。

「ご存知の通り、あいつってしゃべらねえよ。ほんっと、俺とか美里とか、あと古川とかがさんざんこけにして遊んでいるけどさ。でも、なんってのかなあ、立村とふたりでいろいろネタかましてると、俺の方がすうっと気持ちよくなるんだ。優ちゃんのレコードをネバーエンディングで聴いているのと同じような感じで」

ぶぶっと噴き出す声。美里だ。あとで蹴りだ。本当のことを言ってるだけだ。

「お前、そういう友だちってもっといると思ってたけどなあ」

やっところらに向けてくれた菱本先生。ぐっと目を見つめて五回、細かく頷きを繰り返した
「いねえよ。俺は友だちを選ぶんだ。だけどさ、先生。本当のところ俺があいつにどう思われてるかはわからねえけどな。いろいろ考えることあってさあ。例の宿泊研修以来」

咽が渴いてきた。口よりもまず身体の中の方が警告サインを出しているらしい。別に嘘を言っているわけではないけれど、貴史らしくないことしているという意識はあるらしい。

「ああ、そうだな。羽飛、理由は説明しただろう」

「一応、先生から聞いたことで見当はついた。バスの中でも古川が謎解きやってくれたからな。けどさ、あいつ俺だけじゃなくて、ハニーの美里にすらほんとのこと言ってねえんだぜ」

「貴史！」

とうとう美里が足をぐりぐりつぶしにかかった。美里の本気は怖い。帰りは距離おいて帰ろうと決めた。

「ハニーときたか、羽飛、お前おもしろいなあ」

笑いこけている菱本先生。当然、ここが笑いどころ、狙いである。貴史の読みは当たっている

。
「だろだろ！ おい美里、事実をそのまま告げただけだ。足離せ」

「あとで覚えてなさいよ！」

大人が目の前にいるのは、うざったいことがほとんどだが今はなかなか助かる。特に担任とは

。
「だから俺が言いたいのはさ、先生」

最後の締めだ。ここぞと力を入れた。へそのところに根性こめて、ふんばった。

「昨日俺と美里が学校ふけたのはまずかったと思う。その点はおもいっきし反省してる。ちゃんとあのプリントやるからさ。でも、これから俺が立村と男と男の勝負をしたいと思ってることだけはわかってほしいんだ。あいつ、ずっと俺からも逃げてるような気がするんだ。だから徹底してあいつと決着をつけたいんだ。いい奴だってわかってるからさ、なおさらなんだ。曖昧なところはなくしたいんだ。だから、そのことを昨日、美里と相談したくて大学の図書館で話してた。嘘じゃねえよ。大学の白いトレーナー着た人に聞いてもらったら絶対わかるって。とにかく、俺は」

とどめの一言をぶちかました。

「先生、男同士の頼みだ、俺と立村との果し合いには一切、口はさまないでほしいんだ。菱本先生だからわかってくれると思って、だからさ」

美里は思いっきり腹抱えてわらっていることだろう。無言で貴史の方を見つめてはいるけれども、口の脇に強いえくぼができています。菱本先生がいなかったら爆笑の渦に飲まれていることだろう。

菱本先生も難しい顔をして黙りこくった。五秒、沈黙が続いた。のるかそるか。

「羽飛、お前、男だな」

ぐいと両手を握り締め、右手を差し伸べてくれた。握手しろということだろう。貴史も腕ずもうする時のようにひじをつき、音を立てて握り締めた。

「サンキュー、先生話、わかるよなあ」

「そのかわり、宿題きちんとやれよ。いいか。清坂もだぞ」

答えず美里は黒目を右、左と動かし、ぐぐっと笑った。

——これで、よけいな奴の手出しはないぞ。美里。

美里には帰り道、口に出して説明すれば万全だ。貴史はにやつきながら握手から腕相撲に態勢を変えた菱本先生へ、ひそかに手を合わせた。大うそつき、羽飛貴史の罪悪感からだった。

——これでいきなり、菱本先生が、ホームルーム中に「立村と清坂と羽飛の間に起こった不和问题」とかいうのをネタにしないですむぜ。放っておいてくれるってことだからな。男と男の約束ってことで、俺と立村との問題には、触れないでくれるって約束だからな。言い出しっぺは美里じゃなくて、俺だってことだからな。

——あとは、美里、お前の演技次第だ。評議委員会で鍛えた演技力でとことんあいつをじらし

てやれ。

3 清坂美里は自分の演技が逆効果なのではと思い

——貴史の言うことってどこまで本当なんだろう。男心？ そんなもの知らないよ。あれでもし立村さんに冷たくされたら、責任取ってくれるつもりなのかな。なわけないよね、貴史は、私が気のない振りして反応なかったらあきらめろって言ってたもんね。もう、なんかわかんない。もう。

四科目の宿題で徹夜するはめになった美里は、ベットで寝ている妹を起こさないように仕切りカーテンをかけた。灯をもらさないようにするための手段だった。鍵つきの引き出しから、一年時の生徒手帳を取り出した。ひとりっきりの時にだけ、こっそり見つめるあの人の姿だった。

一年冬休みの評議委員会ビデオ演劇「忠臣蔵」完成の記念写真だった。全員で写した写真は誰でも見られるアルバムに貼ったけれども、たまたま水色の着物にはかまを纏った立村さんと、太い縞の入った和服姿の美里のふたりで撮ったものだけは、誰にも見せないように隠しておいた。まだ美里の一方的な片想いだった頃だ。休み中会えない時はいつも、話し掛けたりしていた。もちろん誰にも気付かれないように。

——けどさ、言ってたよ。立村くん。

「俺は羽飛と清坂氏が付き合うようになったとしても、そのままいられると思うけどな」

聞こえていないと思っていたのだろう。いつものようにこずえと夫婦漫才やっているのを、美里は聞き耳をたてていた。不思議なことだけど、立村くんの声だけはどんなに低くても、高性能マイクで拾上げることができる耳。美里も聞きたくないことまで耳で拾ってしまった。

——私と貴史とが付き合うようになったとしても、平気だってわけ？

昨日、立村くんが机の中に入れてくれた授業ノートのコピーを取り出した。なんで用意してくれたのかがおおむね見当ついた。しょっちゅう風邪を引いて学校を休んでいる立村くんのことだ。休み明けは地獄の自習課題に追われるであろうことが想像ついていたに違いない。味方は、友だちの取ってくれたノートくらいだろう。こんなのいらぬ、と破り捨てないでよかった。貴史もきっと同じこと考えているに違いない。ほとんどノートのおかげで、宿題は無事片付きそうだった。

——私のこと、どう思ってるんだろう。立村くん。

最後に数学の検算をした後、かばんにしまいこんだ。

なんで貴史がいきなり、生徒指導室で立村くんに対して思っていること、計画などをまくしたてたのか、途中で気が付いた。貴史らしい。要はあまり、大人に口出しをしてほしくないという

ことだろう。美里にとっても決していやな大人ではない菱本先生だけど、でも、教師の顔して三人を仲直りさせようとするのだけはやめてほしかった。自分で計画したことは、大人に割り込んできてほしくない。当然のことだ。

——男同士の仁義を重んじる菱本先生だもんね。やっぱり単純よ。

——立村くんだってそういう手を使えばよかったのよ。あの時も。

また思い返す宿泊研修三日目のこと。机の上には、紫に桃色の花が描かれた宝石箱がのっかっていた。宝石はないけれど、緑地に黄色い格子の描かれたヘアークセサリーをしまいこんでいた。

生まれて初めてのおそろいだった。

立村くんには同じ色のキーホルダーを買った。まさか、あのキーホルダーが次の日の事件を起こす発端になるとは思っても見なかったけれど。バス窓の外に落としてしまい、拾いに行かせてくれと泣きそうな顔をして菱本先生に頭を下げ、よりによって反対方向に向かって走り出したのを見た時には、頭の中が真っ白になった。周りの子たち、貴史、菱本先生がわめきちらしバスの中は騒然としていた。美里も本当だったら女子評議として、毅然とした態度を取るべきだったと思った。結局、謎を解いてくれたのは、立村くんと三日目、ずっとしゃべっていた古川こずえだった。

——こずえはいいよ。頭いいもん。エッチなことばかり話してる子に見えるけど、言いたいことはすっぱり答えて何があっても堂々としていて、いいことも悪いこともきちっと、言えるんだもん。どんなに仲のいい子でも、いいことはいい、悪いことは悪いつてはつきり言っちゃう子だもん。立村くんもだから、こずえとはよく話すんだよね。でも。

決してこずえにやきもちを妬いたわけではない。最初からこずえは立村くんのことを恋愛の範疇から除外していると断言している。本人を目の前にしてだ。むしろ貴史一筋のあの態度に、親友として心苦しい思いすらしていた。だって貴史は「鈴蘭優命」を公言してはばからないのだから。昨日のことを思い出してもそうだが、貴史は「しつこくされると逃げ出したくなる」タイプの男だというのが判明した。こずえの攻撃は、貴史に関して言えば逆効果なんだと、つくづく思った。

——でも、こずえがあんなにあっさり立村くんのことを見ていたのに、私、付き合ってるのに。

水色の着物にはかま姿の立村くんはりすのような瞳を向けていた。

——立村くん、はやく降参してよ。お願いだから。

宿泊研修三日目バスの中、こずえの言い放った答えとは以下の通りだった。

——つまり、立村としては二学期前に退学するA組の女子と狩野先生に、私たちD組のお元気集団をご対面させたくなかったのよ。昨日の話聞いてたらよくわかるよ。それに次。運転手さんさっき立村と話してたよね。ちらっと窓から見てたけど、なんかあいつ、泣きそうな顔して戻ってきてたよ。その時になにかあったのかなあ。さらに続けるね。キーホルダーを落としたとか言ってたけど、私見てたよ。立村の奴、人差し指にキーホルダーを引っ掛けてしばらく手を外

に出したあと、すぐ引っ込めてポケットにもどしてたもん。たぶんあの時にキーホルダーを外したんじゃないかと、思うんだ。美里からもらったものを落とすほどあいつも根性ないよ。なんか考えているんだろうなあと思ったから、あいつの一芝居に乗ってやったけど、先生も羽飛も、美里もどうして気付かなかったの？

こずえだって共犯じゃないか、と後ろ指差したくなる。菱本先生に、
「だったらどうしてそういわなかったんだ！」

と怒鳴られた時もこずえは、
——だって先生がこんなことを見抜けないわけないと思ったんだもん。全く。立村って子、思いつめると何しでかすかわからないって、うちのクラスの連中はみんな知ってるもんね。だからさあ、先生。今回はあいつの顔を立ててやろうよ。無理にA組の人たちと交わらなくたっていいじゃない。世の中にはね、なかなか理解できない感覚を理解しちゃう奴がいるってことよ。うちの弟みたいにね。

こずえには二歳下の弟がいると聞いていた。小学校六年生。口癖のように言うのは、
「立村とほんっとに性格似てるのよ。だから美里、恋のライバル視しないでいいからね。近親相姦はやだからね」

どうして立村くんの気持ちを、こずえのように受け止められなかったんだろう。
全く動けなかった。バスが静まって落ち着くまで、美里は何も言えずうつむいていた。
もどってきた立村くんに対して、いつも通りに振舞おうと決めた、それしかできなかった。

——立村くん。私、こずえみたいに細かいとこまで見てられないんだよ。どうしても言いたいことがあったら言ってもらわないとわかんないんだもん。きっと立村くんのことだから、私になんかわかんないって決め付けているんだろうね。わかってる。そのくらい。私に何にもあの時のことを話してくれないのはそういうことなんだって、気付いてる。でも立村くんはやさしいから、それ言ったら私が傷つくんだと思って、隠してるんだよね。嘘、下手だよ。立村くん。

——けど、嫌いになんて絶対にならないんだよ。貴史も、私も。

——泣き虫だったって、いじめられっ子だったって、九九が言えなくたって、立村くんのことを嫌いになんて絶対にならないって、どうしたらわかってくれるの。

貴史の授けてくれた男心操縦法。

「気のない振りしてじらしてやれ。そうすれば男はむしように女を追いかけたくなるもんだ」
別名、アイドル鈴蘭優にめろめろの貴史の図。

一日試してみた。小学校時代の男友だちとデートの振りでもしようかと思っていた。

でも、一日で負けそうだった。どうしても耳がよけいな言葉を拾ってしまう。たぶん立村くんは、深い意味なく使っているのだろうけれども、自分にとっては剣のような言葉ばかりを。

——ほんとに私と、付き合っていて楽しいの？

——こずえみたいにすべてを見抜いてくれる相手でないといやなわけ？

そして、もうひとつの質問をしたかった。詩子ちゃんからもらった手紙を、下の引き出しから取り出した。小さく、隅っこに綴られた文字だった。

——時辻さんという人、青大附属にいますか？

——今度会った時、教えてください。

美里の勘だと、おそらく「時辻」イコール「立村」である可能性が大だ。

まず、青大附中においてひとりも「時辻」という珍しい苗字の人はいないということ。

次に、日本舞踊関係の人もあまりいないはずだということ。

最後に、立村くんのお母さんは離婚しているので旧姓の可能性が高いということ。美里はまだ、立村くんのお母さんがどういう苗字を使っているのか教えてもらっていないけれども、だ。

今日の状況からして、それを確認するのは困難だ。たぶん詩子ちゃんと立村くんは顔見知りの可能性が膨らんできているけれども、向こうが隠したがつている以上追求するのは難しいだろう。質問してなんになるという気もする。

美里はただ、自分から本当のことを言ってほしかっただけだった。

行動で懸命に美里たちへ訴えようとするんでなくて、直接、目と目を見て、口で話してほしかった。それだけだった。

——それがそんなに、ひどいことなの？ 立村くん。

——私、今週の日曜日、詩子ちゃんに会うよ。会って、「時辻」さんが立村くんなのかどうか確かめちゃうよ。詩子ちゃんから、立村くんの知られたくないこと、全部聞くかもしれないんだよ。

——だってこうしないといつまでたっても立村くん、私とさしで話、してくれないんだもん。立村くんが悪いんだよ。こんなに、こんなに。

第四章

1 立村上総が受け入れられるひとりの言葉

時間の問題だろう。美里から「もう付き合いやめようよ」と言われるのは。

——それはしかたないよ。俺が当然のことをしてきたんだから。

それ以上に友だちとしても「付き合い」すら絶たれるかもしれない。上総にとってはそちらの方が眠れぬ理由だった。

次の日、また次の日、貴史が上総に経過報告をしてくる。

「お前ももう少し反省しろよな。だから言ってるだろ。美里があれだけむくれているのはお前のせいだって。一言言えればいいんだよ。俺が悪かった。もう一度やり直そうとかなあ。昨日も美里言ってたけどな、小学校の頃の仲間でサッカー一部の奴がいてさ、そいつと土曜日に会おうかとかとか。まあそいつも俺のダチだから、別に目くじら立てることはねえけどさ。でも、少しは心配しないのかよ」

「いや、放課後のことまでしつこく聞くのは、俺としては失礼だと思うから」

「ふうん、じゃあ俺の知ったことじゃねえな」

鼻の穴を膨らませ、貴史は顔色変えず背中を向けた。上総ももっと何か、言うべきことが残っているような気がするのだけれども、言葉として出てこなかった。そのうちに隣の席へ南雲やこずえが来たりしてなあなあになる。

美里本人はちらっと目を上総に走らせ、

「おはよっ！」

と短く声をかけるだけだ。「友情」らしきものはかろうじて残っているのだろう。しかし、あいかわらず会話は無い。評議委員会の行事も九月中は大きいのが特別ないし、クラスの男女が悩む問題もとりわけてない。十月以降になると、学校祭を始め、クラス合唱コンクール、十一月に予定している二年全校集会の企画立てなどいろいろやることもあるのだが。

——できれば、それまでには仲直りしたいとこなんだよな。いいよ、「付き合い」相手じゃないってことだったらそれだってさ。けど、しゃべれなくなったりするのだけは、なんとかしたいよな。

土曜日、一気に冷えが回った空気を吸い込み、上総は教室を出た。いつもだったら本条先輩のいる三年A組に駆け込み、

「先輩、卓球やりに行きませんか？」

と声をかけるのが常だった。一学期まではいつもそうしてきた。卓球というのは口実で、本条先輩の側で話を聞いたりかき回したりするのが楽しいだけだったけれども。大抵の場合、

「またお前かよ。まあいいか。ほら行くぞ」

と、家来の犬を引っ張るごとく連れて行かれた。

でも、あえて二学期に入ってから、上総は本条先輩から距離を置くようにしていた。やはり三年生なのだ。クラス行事だって忙しいだろう。ふたりの彼女に関してだっていろいろ手間がかかるだろう。何よりも本条先輩は評議委員長だ。生徒会、教師間、その他もろもろの関係事項で大変だろう。一種の部活として機能している評議委員会だけれども、細かい用事はかなりあるらしいのだから。

図書館に本を返した後、上総は大学のカフェテリアに向かった。

土曜日の午後、給食の出ない日はうちで食事をするのも面倒なので、いつもこうして食べていた。三百円の焼き魚定食を注文し、洗い場の真っ正面席に座った。遠く窓際の方には、ノートを一冊置いた状態にして大学生たちがおしゃべりに興じていた。大学には「サークル」と呼ばれる非公認部活動のようなものがあり、溜まり場としてカフェテリアの机を占拠しているという話を、聞いたことがあった。

「りっちゃん」

さっそくご飯をかきこもうとした矢先、目の前ににゅっとラーメンを盆に載せて現われた。南雲が、襟元のボタンをひとつ外したまますとんと、テーブルに置いた。一気に漂う塩ラーメンの匂い。

「お、和食ですな」

「うちで作るのが面倒なものはこうやって食べるんだ」

上総の顔を様子伺いしながらも、南雲は変わらない笑顔で答えた。

「いつもここで食べるのか？ 土曜の午後なんかは」

「いや、本条先輩がいないから」

いつもだと南雲も、奈良岡彰子にべったりくっついて帰るのが常なのだが、何かあったのかもしれない。とりあえずは聞かずにおいた。南雲の方から勝手にしゃべってくれた。

「ふうん。俺もさ、今日、彰子さんが別の奴と帰ることになったから、空いてたんだ」

「別の奴って、おい、なぐちゃん」

ずるっとすすった後、南雲は心配ご無用といった風に口をほころばせた。

「よんどころない事情あってさ。相手も信頼できる奴だから、まず危険はないかなと思ったんだ」

その辺の事情はよくわからないが、深く追求するのもまずいと思い、上総は焼き魚をゆっくりとほぐし始めた。まずは腹ごしらえをしたかった。育ち盛りの十四才野郎がふたり揃ったら、まずは食うことが先決だ。時々、委員会関係の話を持ち出したり、お互いの知り合いである本条先輩の噂話などもしたりしてしばらくは時間をつぶしていた。

「ところで、りっちゃんに、渡したいものがあるんだ」

食べ終えた食器類を皿洗いの流し場に置いた後、お茶をそれぞれ用意して席に戻った。熱いお茶がうっとおしくない。やはり秋だった。

「何だよ、いきなり」

南雲はかばんから茶色い紙袋を取り出した。柄なしのクラフト封筒だった。

「教室で渡すのはやっぱり、次期規律委員長としてまずいだろうと思ってさ。ほら、すぐ見ろよ」

言う意味がわからず、まずは受け取った。封を開けた後のある袋。さっと抜き出してみたが、瞬時に袋へ戻した。もう一度、覗き込み、他人に表紙が見えないようにもう一度引っ張り出した。

「なぐちゃん、これって、もしかして」

「この前古本屋でりっちゃんの言っていた写真集があったからさ、キープしておいたんだ。ほら、宿泊研修の時言ってただろ。図書券で買うつもりだったけれども、裸の女の子が縄で縛られていたから買わなかったって」

持っているだけで指先に血がたまりそうだ。かすかに震えているのが上総にはわかった。いけないとわかっていても、表紙の写真から目が離せない。

「あ、な、なぐちゃん、ありがとう。いくらくらいした？ 払うよちゃんと」

「じゃあ自動販売機で一本コーラおごってくれるかな。ほんとそのくらいの値段だったよ。俺も中身ちらっと見たけど、ぜんぜんいやらしくなかったよ。まあ実用本にはなりずらかったんだろうなあ」

かなり動揺していた。宿泊研修二日目、熱を出してホテルで寝込んでいた上総を、南雲がひとり残って馬鹿話に付き合ってくれた。その時たまたま、思春期の男子には必需品と言われる「女性グラビア写真集」の話題となり、

「勇気を振り絞って本屋に行き、自分好みのモデルさんの写真集を買おうとしたが、縄やらロープやらでしばられている写真の表紙を見て怖気づき逃げ出した」ことを告白した。南雲にしか話していない。南雲もばらしていないらしく、その時に「手に入れられたら押さえておく」旨約束してくれた。とっくの昔に忘れたことだと思っていたのだが。

「けど、よく見つけられたなあ」

「モデルさんの名前だけ記憶してたから。それとロープ」

「よく買えたよな。俺なら絶対無理だ」

「だってさ、古本屋だぜ。見たらわかるよ。あんまりスケベな写真じゃなかったしさ。けど、ちょっと意外だったなあ」

顔色がくるくる変わっているのだろう。面白そうに南雲は上総の顔を見てにやにやしなながら、付け加えた。

「清坂さんと似てないよな、あのお姉さん」

ぼきりと気持ちの芯が折れたような気がした。封筒を持った手がだんだん冷たくなる。言葉が出てこない。しょせん夜の楽しみ用に使用するものなのだから、出すところ出してくれれば関係ない、とでも言えればいいだろうか。わからなくて思わず唇をかみ締めた。

「関係ないだろ」

「まあ、そうだよな。ごめん」

南雲はこれ以上追求しなかった。ありがたかった。上総の的にぴたっとささったことが気付かれたのかもしれない。そういう時、決して突き立てる言葉を重ねないのが南雲流だった。

「昨日の放課後さ、本条先輩に会ったんだ」

話をいきなり変えてきた。封筒をかばんにおさめた後で、上総の方からは何も言っていなかった。

「図書館で妙に真面目な顔して勉強していたから、ちょっと邪魔してやろうと思ってさあ。りっちゃんもいるかなと思ったけど、帰ったんだよな」

あの教室にいるのが苦痛だったのと、本条先輩に声をかけるのもためらわれたからだった。上総は頷いた。言葉はやはり出なかった。

「で、ちょっとだけ話してたんだけどさあ、本条先輩、りっちゃんどうしてるって聞いてきてそれで」

「なんか言ったのか？」

南雲は言葉を切った。たぶん話をしたのだろう。雰囲気分かる。それも、あまりめでたくないことをいろいろと、だろう。この二週間、上総がどういう感情を持ってクラスで過ごしているか、たぶん南雲は感じてくれているはずだ。あえて音楽ネタばかり振っているけれども、もしかしたら南雲も、あのことを心のどこかにひっかけているのかもしれない。思わず身構えた。

「うん、言った。嘘言わねえよ。俺の思ってること全部話した」

「まさか、こういう写真集ほしがってるなんて言わなかっただろうな」

冗談に振り替えたくて、ちゃかした。

「元気ないみたいだとか、疲れているみたいだとか、あとそうだな、でもやっぱりりっちゃん、あんたに原因あるよ、とか。ちょっとだけ悪口も」

あっけらかんとした顔で話している南雲。悪口と言い切ってしまうところが、大嘘だ。つい口がほころんだ。

「なんだよ、本条先輩に今度会った時、思いっきり殴られそうだな」

「帰ったら電話よこせて伝えてくれって言われたんだ。で、聞きたい？ 俺の話したりっちゃんへの悪口」

「悪口ってこっそり言うもんだろ」

「それは陰口。ねちねちしたこと嫌いだから今のうちにばらそうって思ってたんだ」

どう考えても「悪口」を言おうとする口調ではない。にこにこしたまま、南雲は軽く続けた。「りっちゃん、やっぱり付き合ってる相手に別の男と付き合っているというのは、殴られて当然だぞ。俺が清坂さんの立場だったら、絶対にぼこぼこにしてると思うなあ」

昨日こずえに、丸めた教科書で制裁された時の会話を、どうやら南雲も聞きつけていたらしい。

——俺は別に、清坂氏と羽飛が付き合ったとしても、今までどおりでいられると思うけどな。思い出すところみあげてきそうになる。

こずえが怒るのも、南雲に「悪口」として忠告されるのもわからない。

そんな自分が一番いやだった。

「お前も、やはりそう思うか」

「りっちゃんは思っていないのか」

うつむき加減で茶碗の中に目を落とした。ほんの少し、茶葉が細かく溜まっている。

「やっぱり変だよな、俺の感じ方は」

「たぶんりっちゃんのことだから別の意味で言ったんだろうって俺は思ってる。感じ方おかしいだなんて言わないって。俺はりっちゃんの味方のつもりだけどただ」

両手をテーブルの上に乗せ、茶碗の底をちくちくつつきながら南雲はきっぱり言い放った。

「付き合っている本人のいる教室で言うことじゃないよな。その点は反省しろよ」

すんと落ちた。納まりよく頷いた。

「なぐちゃんの言う通りだ。俺が馬鹿だった」

反省ついでに、写真集代替わりのコーラを持ってもう一度上総は戻ってきた。表情は全く変わらない南雲の様子。「悪口」をはっきり面と向かって言われたけれども、腹も立たずに素直に受け取れたのが不思議だった。

——心の中で隠しておけばよかったんだ。本当に俺って馬鹿だ。

隣りで「サンキュー」と受け取る南雲の顔を見て、おそろおそろ上総はわびを入れた。

「ごめん、俺がやっぱり」

「俺に謝ることじゃないし、第一謝る必要ねえよ。清坂さん以外にはさ」

「こういうことばかりやらかしているから、嫌われるんだよな」

たらたらにやにやしていた南雲の眼が一瞬、きりっと引き締まった。

「嫌われるって、何をさ」

「いや、いろいろと」

気付かれているにしても、貴史と美里との間の溝を口にはしたくなかった。一言でも認めてしまえば、亀裂が完全なものとして受け取られてしまいそうだった。まだ表向きは何事もなく、さりげなく過ごしているはずなのだ。上総としては、自分からこれ以上物を壊したくなかった。

南雲が咽元を動かすようにコーラを飲んだ。ふわっとため息をついた。

「本条先輩と話、しててさ、俺も思ったんだけどな。りっちゃんの好みのタイプと清坂さんってかなりずれてるんじゃないか？ いや、あの写真集ぱらぱらっと見てて俺も思っただけだからただの勘だけど」

「それは憶測ってもんだよ、なぐちゃん」

たしなめた。胸のもやもやがかえって膨らみそうだった。

「お前だってそうだろう？ この前見せてもらったグラビア写真集に奈良岡さんみたいなタイプ、いないだろ？ それと一緒にだよ」

「ああ、代わりになる人いないもん。俺にとってはなあ」

分かりやすい奴だ。南雲が恋人の奈良岡彰子について語る時、切れ味のあるアイドル顔が見事に崩れる。人気ロックグループ「パール・シティー」のボーカルに似ていると、女子が騒ぐのも

さもありなん、の顔がだ。和む。

「一つだけ確認していいか？ りっちゃん」

「黙秘権だってあるんだからな」

愛しい人への思いを顔に保たせたまま、南雲は鼻の下をこすり、

「付き合いかけたのは、清坂さんの方からだろう？ 向こうの方から言われたんだろ？ りっちゃんは、それで受けただけだろ？」

嘘は許さない、これだけは。そんな声がきこえたような気がした。

「本条先輩から聞いたのか」

沈黙、コーラの缶を握り締めた後、南雲は口元をほころばせた。

「やっぱし、そっか」

おどおどしたまなざしに見えたのかもしれない。軽く首を振って南雲が上総に促した。

「りっちゃんこれから卓球場行かないか？」

クラスの連中には一応、付き合いかけたのが自分の方だということで話をした。美里から告白されて、それでなんとなくそうってしまったというのが真相だけど、知っているのは自分たちふたりと、羽飛、あとは見抜いてしまった本条先輩くらいだ。南雲にもそのことは話していない。

——まさかいいないよな。こちらが流されたなんてさ。

美里に付き合いをかけられて、一週間後にクラス中に公表した。あの時の美里が見せたはにかみ振り。あれを見てから上総は、美里のことを大切に思おう、他の女子たちよりもきちんとひいきして扱おう、そう決意した。ばかばかしいくらい真剣に、そう思った。それまでは可愛がっていた後輩の杉本梨南からも意識的に距離を取るようにしたし、何か自分の中で何かが起こった時はかならず、美里から話すようにしていたつもりだった。美里に話さないということは、他の女子連中にも打ち明けないこと。こんなに自分のことを心配してくれている相手を、傷つけてはいけない。そう思っていた。

——でも、みんな裏目に出てるんだよな。

上総にとってはそれがわからなかった。どうしても打ち明けてほしくないことだってある。誰にも言いたくないことだってある。美里には言うべきではないと判断して、心に隠したこともある。

——大切な相手なんだ。

——俺が学校で孤立しそうになっても、味方でいてくれた人だ。

——こんな出来の悪い頭を持って、数学の計算もろくにできなくて、人の顔色ばかりうかがっていておどおどしているこんな奴を、嫌わないでくれているんだ。好かれるなんて、奇跡なんだ。

南雲にはまだ言えない。金輪際口にしてはいけない言葉だと教えられた本心。上総はひそかに繰り返した。

——俺は清坂氏に好きになってもらえるようなレベルの人間じゃないんだから。わかってる。

ふさわしいのは羽飛みたいな奴なんだって。

2 羽飛貴史がぶつけられたひとりの言葉

なんと立村をつついても、曖昧な態度しか示さないのに、貴史はだんだんうんざりしていた。菱本先生も一切手出しをしないと誓ってくれた。美里の「気のない」演技もだいぶ巧くなってきている。立村もかなり動揺しているらしく、授業中も上の空らしい。うなだれていた。

——言えよ、言っちゃえよ。まったく、気になって仕方ない顔してるくせにさ。ばかじゃねえの。お前。

テレパシーで連絡を取れたらいいのだが、そうはいかない。

たかが友だちの恋愛沙汰になんで自分がここまで気をもまねばならないのか。

全くもって腹が立ってしかたない。

しかも立村は相変わらず、貴史に対しては歯にももの挟まったようないい方をして、最後には避けようとしている。たまたま音楽の授業中隣り合ったのだが、相変わらず視線を合わせようとしない。

——こっちだってお前に合わせて言いたいこと言わないでがまんしてるんだ。少しは気を使えよ。変なところばかり神経質にならねえでさ。

結局、南雲と古川こずえとしゃべっているだけだった。帰りの会が終わるや否や、すたこらさっさと教室を出て行ってしまった。逃げ足の速い奴だ。立村の性格を考えるとそりゃあそうするとは思うのだが、気持ちいいものではない。

「じゃあ、貴史。今日、会ってくるから」

わざと聞こえるように声を出して、美里も教室を出て行った。前もって昨日、美里が会うのは藤野詩子だと教えてもらっていた。でも言わないで、誰かさんとデートするらしいという噂をまいてやろうと決めていた。しかしながら、落ち込んでいるとはいえ行動をしようとはしない。

——だめだったら、あきらめろって言っちゃったもんなあ。

——もっと派手な噂流さねえとだめかよ。

なんで自分が懸命になっているのかが、腑に落ちない。もちろん美里も立村も友だちだ。ずっと友だちでいたい相手だ。だから、こうしているのだ。なのに全く気付きやしない。あの昼行灯は。

腹がすいたのでどこかで食べていくか、それとも家に帰るかしようと思った。部活を始めると回りからはやいやい言われているけれども、そんな気はさらさらしない。体育系の上下関係がどうも好きになれないし、委員会関係も似たようなところがあるらしい。一匹狼で行動する方が貴史の好みではある。

——久しぶりに、他の奴にでも会いに行くか。

小学校時代の友だち連中を数人数え、やっぱり家に帰ることに決めた。なかなか帰りの時間帯が合わなくて遊べなかった奴らだが、たまには思いっきりやりたい放題したっていい。どうせいつもつるんでいる美里も立村もいないのだから。

ネクタイをほどいてかばんにつっこんだとたん、扉が開いた。

——見たくねえ奴が来るのかよ。

南雲秋世の姿だった。すでに襟のボタンを外して、ふくらんだかばんをぶら下げている。

「あれま、羽飛だけか」

「立村はいねえよ」

南雲がどういうことを考えているのか、貴史には理解できないし知りたいとも思わない。もともと初対面の時から、「こいつ相性あわねえ」と思っていただけに、できればつらっと知らん顔を通したい相手だった。何度か喧嘩沙汰になりそうだったが、立村の仲裁でいつもお流れになる。もっとも立村だって一年の頃は南雲とそれほど深い付き合いをしていなかったはずだ。二年に入りクラスの班編成が変わり、それからだ。異様なほどふたりがひつつくようになったのは。もともと立村は、気に入った相手とべったり行動する傾向がある。貴史とも一年時はそうだったし、本条先輩との関係もしかりだ。現在は南雲がお気に入りなんだろう。今のように貴史や美里と離れた状態だと、磁力は強烈だ。S極とN極がくっつきあっている、そんな感じだった。

「さっき、大学の方に行ったのは見たけどさ、まあいいや」

ありがたいも、さよならも、おつかれも言わない。南雲は自分の机から茶色い封筒を取り出し、かばんの中に入れた。忘れ物なんだろうか。無視して貴史も教室を一步先に出ようとした。もちろん、

「おつかれ」

と言いつつつもりでだった。

「そう逃げるなよ、羽飛」

気の抜けた声で、南雲が引きとめた。無事にかばんには荷物を詰め込んだらしく、ぱんぱんになっていた。

「用かよ」

「ちょっとだけ、規律委員として聞きたいんだがな」

——こいつが規律の顔してるってかよ。

南雲が次期規律委員長に就任するという噂はすでにみなご存知だった。服装もラフで髪型も毎日一時間ちかくかけてセットしてくるといふ、見た目重視の委員会なんだろう。こういう奴でも規律委員長になれるのだ、立村が次期評議委員長になるのも頷ける。

「はいはいなんでがすか」

喧嘩を売るのも大人気ない。おちょくる口調で答えた。

「この二週間くらい、妙に立村のこと、いじめちゃおりませんか、羽飛くん」

——こいつ、「くん」付けで呼びやがった！

「なんだと、おい、なに言いがかりつけるんだ！」

瞬間沸騰した頭を冷やす気なんてさらさらなし。貴史は音を立てて扉を締めた。もちろん決着を付ける気はおおいにある。妙に落ち着いている南雲は前髪を横になびかせるようにして、上目遣いで見た。この顔、この態度、ぶんなぐってやりたくなる。

——俺が立村を「いじめた」だと？

「おい、人を勝手に侮辱するのはやめろよな」

当然怒っていいと思った。南雲の顔は冷静だ。ズボンのポケットに手を突っ込んだまま、右足のかかとをつけてつま先を左右させた。

「それともなにか？ 何か俺に文句があるっていうのかよ」

「俺はただ、規律委員として言ってるだけなんだがな」

ふざけ口調ではない。細い本気の糸が見える。テグス糸のようだ。ぴんと張っているのは貴史にもわかる。ただ、伝わる言葉、伝える言葉は本物のえさではない。きれいな飾りのえさだ。

「じゃあ俺がいつどこで、立村をいじめたっていうんだ？ 証拠もねえのによく言うぜ」

「さっき、なんやら嫌味なこと言ってたよなあ。俺、悪いが隣りで全部聞かせてもらったんだけどさ。聞こえるように言うからはっきりわかっちゃうんだよなあ」

にやっと笑って後、ゆっくりと足を向けてきた。近づいてきた。動くなといわんばかりにだ。

——てめえに止められたくなんかねえよ。

「ふうん、そうか、友だち同士で馬鹿ネタかましていることが、そんないじめなのかよ。だったら俺はなあんもあいつに言えねえってことだよな」

「今回だけじゃない。二学期に入ってから、規律委員の俺の眼には非常に、羽飛くん、君の態度がうざったくうつるんですわな。友だち、としてではないでっせ。あくまでもクラスの規律委員としてですわね」

しつこいくらい「規律委員」を繰り返す南雲。ろくに仕事もしてないくせによく言うもんだ。貴史は無視した。帰ろうと思った。ほんとだったら一発蹴りを入れるか殴るかしたいが、どうも腹がすいているとそういう気もなえる。それに南雲の腕力がどのくらいなものか、まだ把握していない。

南雲の言葉は続いた。

「今年の規律委員会は、クラスでの嫌がらせやいじめをなくそうという運動を行っているところなんでね。二年はそれほどでないけれども、一年の男女がすげえ状態だっていうのは、お前も立村から聞いてるだろ」

「それが関係あるのかよ。ああ、知ってるぜ。当然な」

「問題が起こった場合、まずクラスの規律委員か評議委員あたりが先生に申し出て、先生立会いの下、つるし上げの学級会を行うのが建前だ。まあ、俺だってそんなのは当てにしてなんてないけどな。いじめた相手を目の前にして、だあれが正当な行為をしたって言い張るかってな。だから、裏で規律の人間が仕切るってわけだ。そうだな、評議委員をいじめてるのが、表向き親友面している奴っていう、ややこやしいバージョンであつてもだ」

この態度、反り返った背中、なめきった顔。

見ているだけでぶっ殺したくなる。

——やるしかないか。

貴史は襟元のネクタイを掴もうと、手を伸ばした。触れる寸前で南雲が身をかわす。

「悪いけど、今日はやりあう時間ないんでね。まあ、少しだけ考えてもらって反省するなりなん

なりしてもらえればいいってことさ。一応、前もって注意はしたし。俺もあまりことを荒立てたくないしな。じゃあ」

「待てよ、逃げるのかよ。第一俺のどこが立村をいじめたように見えるのかよ。言ってみろ。言いがかりつける根性あるんだったら」

言いかけた貴史を遮り、最後に南雲はにやっと笑った。

「いじめっていうのはな、羽飛」

ドアを開き、片足を廊下側に出したまま、貴史を見据えた。

「やられた本人の感じ方で決まるんだよな。羽飛くん」

——だあれが規律委員なんだ、てめえ。

「おい、南雲、逃げるなよ」

追いかけて首根っこを捕まえてやろうとした。しかし、奴も足が速い。がたと階段を駆け下りていく足音だけが残り、貴史は廊下で立ち尽くすしかなかった。

——俺が立村にいろいろ言ってやってるのは、美里とうまくいくようにしてるからじゃねえかよ。

——あのままじゃあ美里だって、あいつに愛想つかずに決まってるだろ。

——そりゃああいつの性格知らないわけじゃねえから、こっちが押してやらないと動かないってさ。

南雲からしたら全部、言い訳なのだろう。

美里がどんなに毎日悩んでいるのかを貴史は手に取るように感じている。

今日だって、立村の表情を気付かれぬように伺っていた。奴は気付いていないだろうが。お互い目の合わないところで不安そうに視線を向けているのを、貴史は後ろの席からみな観察していた。

なにも、南雲のように外から眺めている奴から言いがかりをつけられる覚えなどない。

第一、なぜ「いじめ」だとか「規律委員会にかける」などと言われなければならないのだろう。

そりゃあ南雲は立村と二年に入ってから妙に仲が良い。音楽の話とか、委員会の話とか、貴史には入ることのできない話題で盛り上がっている。そんな軽い話題ばかりを交わしているだけのくせに、いきなり立村の親友面するっていうのがまず解せない。貴史は入学当時から立村との付き合いがあるし、美里との間を取り持ってやった義理もある。さらに言うならば、立村が小学校時代やらかしてきた事件について、かなりの部分を把握している。昼行灯の見た目よりも怖い奴という認識はそこから生まれている。

表向きは紳士然としておとなしそうに見えるけれども、いざとなったら手段を選ばない。たとえ自分の立場が悪化しそうになっても、敵をとことん叩きのめす。たとえ大人であっても、学校の番長格であっても。クラスの評議委員として優等生面していながら男子連中から圧倒的支持を得ているのは、そこらへんのバランスが加味しているのだと思う。

——だから俺は、あいつを評議に推薦してやったんだって。

——だから美里を。

ふりかえり背中から伸びる影を見た。長い影。

3 清坂美里の認めたくない言葉と本音

どうせ立村くんとはしばらく口を利かないことに決めている。貴史と打ち合わせた通り、「じゃあお先に！」

と声だけかけて教室を出た。不安そうにこくっと頷く姿が、目に焼きついた。——怒りなさいよ、こんな馬鹿にされてるんだから。

——私だったら、思いっきりひっぱたいてるよ。あんたにもしこういうことされてたら。つぶやいてみる。最初は心の中で、最後は自分の唇で。

「どうして何にも言わないのよ！」

通り過ぎた一年の男子がくるっと振り向いてげんそうな顔を見た。知らない子だった。

「あ、ごめん、なんでもないです」

妙な言い訳をしてしまい慌ててしまった。誰かに見られてないかを確認し、二年D組の窓を眺めた。外を見てくれないだろうか。期待はあった。でもガラスが反射して光るのしか確認できなかった。

——あれ？ 彰子ちゃん？

別に彰子ちゃんの姿を見つけたからではない。遠めでもわかる彰子ちゃんの姿形は、通称姫だるま。いつもだったら髪をシャギーにまとめた、いかにも「パールシティー」のボーカル似た彼氏が一緒のはずだった。自転車を止めて語らっているのは、彰子ちゃんよりも背が低くてスポーツ刈りした男の子。年下かもしれない。学生服だが、腕と裾とポケットに白線が入っている。珍しいガクランだ。

——あれ？ 彰子ちゃん、今日南雲くんと一緒じゃないんだ。知らない男子だ。なんであんな派手な自転車に乗ってるの？ わあ、まさか彰子ちゃん浮気してるのかなあ。南雲くん怒るかもよ。

他の青大附属生たちも、ひそひそとささやき、自転車を指差している。そりゃあわかる。金銀まだらに、おそらくスプレーで塗り分けた自転車を脇に置いているのだから。たぶん「南雲くんと彰子ちゃんは熱く付き合っている」という既成事実を、多くの青大附属生は知っていることだろう。美里だけの驚きではないだろう。もし側にこずえがいたら、「ねえ、どうする？」と相談するんだが、いかんせんこずえは先生に呼び出されて職員室に行ってしまった。残念だ。

「美里ちゃん、ばいばーい」

迷っているうちに、彰子ちゃんの方から笑顔で手を振られた。

「あ、あの、彰子ちゃん？」

——知られてかまわないってこと？

相手の男の子は口をへの字に曲げて、青大附属の生徒たちをにらみつけている。少々目線が怖

いので早々に退散した。実は彰子ちゃん、噂に聞いた通り一部の男子にもてなめなかもしれない。

この日は昼ご飯なしでいいと、親に伝えておいた。外食はおこずかいがもったいないからするんじゃない、といわれるけれども今日だけは別だった。

「せっかく詩子ちゃんと会うんだから、何か美味しいもの食べてらっしゃい」

なにげに「今度詩子ちゃんに会おうかな」と親に話したところ、美里の準備が整わないうちに連絡を取られてしまった。どうやら母は詩子ちゃんのお母さんと相談しあっていたらしい。今まで気付かなかった自分が馬鹿だと思つづく思った。詩子ちゃんのお母さんも、なんとなく美里との間が巧くいっていないことを気付いていたらしい。親のとりもちというのがどうもうさんくさい。

——詩子ちゃん、どう思ってるのかなあ。

——もう一年半も経ったことだもんね。

学校にいる時は、立村くんのことばかりで頭が一杯だった。街に出て、青湊駅の改札口での待ち合わせをするということになったわけで、どこに行くとも決めていない。後ろでぱさりと音がした。白い木皮の街路樹から、枯れた葉が勢い良く落ちた音だった。

——とにかく、会ってからよね。五日の日、観にいくよってこと話して、元気だったって声かけて、それから。

駅に繋がる横断歩道を渡りながら、美里は肩に力を入れた。緊張しているってことだ。会うのは詩子ちゃんなのに。

——時辻さんが、立村くんかを確かめようっと。

駅沿いに止まっているタクシーの前を横切り、怒られながら入った。さっそく人を探し、背の高いほっそりした少女を見つけた。全く変わっていなかった。膝丈のプリーツスカートに笹色のブラウス、白くちょっと眺めのカーディガン姿。ポニーテールに結い上げた詩子ちゃんが、改札前の柱に背もたれして立っていた。

「詩子ちゃん」

声をかけた後、美里は思わず深く頭を下げた。

「美里……」

笑みはない。正面に顔が向いた時、二年前と変わらない凛々しい少女剣士のような表情が読み取れた。可愛いんじゃない、りりしい、そう美里は思った。

「チケット、ありがとう。五日、私行くから」

微笑まない代わりに詩子ちゃんは皮のポシェットから、封筒を取り出した。

「隣りのホテルで食べられる無料の食事券、お母さんからもらってきたの」

——ホテル、いいの？ そんなすごいところで。

意表をつく展開にひいたものの、美里はそれに従った。かなりおなかがすいていたのもあったけれども。詩子ちゃんは歩いていく途中一言も発しなかった。ただ、肩越しにちらっと美里を見るだけだった。言葉の想像がつかない。美里は身を竦めた。

青潟サイレントシティホテル一階の喫茶「フェルマータ」に入った。いかにも中学生かつ制服姿の美里と、やっぱり中学生の私服姿の詩子ちゃんとは、客層が全く合わないようだった。ウェイトレスさんはそんなこと全然顔に出さなかったけれども、周りのお客さんたちはじろじろ眺めてはひそひそ話をする。年齢的には美里のおばあちゃんくらいの人が多かった。息苦しい。

「詩子ちゃん、こういうところ、来るの？」

「この前連れてこられたの」

そっけなく答えが帰って来た。

「ふうん、なんかお金持ちの人がたくさんいるって感じだね」

「私、わかんないから」

顔を合わせて、サンドイッチセットとプリンが届いた後も、まだ会話は続かないままだった。おちょぼ口で上品に口へ運ぶ詩子ちゃんのしぐさはきっちりしていた。たぶん日舞の影響なんだろう。なんとなく立村くんのことを思い出し、「時辻さん」の名前を思い出した。

「踊り、いつから始めたの」

「中学に入ってから。お母さんに連れて行かれたんだ」

「じゃあ一年半なんだ。けど、すごいよね。もう大きい舞台に立つんだもの」

「ちっとも、すごくなんてない」

不機嫌そうだが、やはり詩子ちゃんはしぐさひとつひとつ切れがある。こういうところに男子たちは熱を上げていたのだろう。熱狂的なファンがいたことを思い出した。

「『玉兔』だったっけ？ どんな着物着るの？」

「きれいな着物なんかじゃない」

ぽそりとつぶやいた。オレンジジュースのストローをくいと曲げて、コースターを見つめていた。

「私も、あまり日本舞踊のこと知らないんだけど、一学期にね、詩子ちゃんの写真が映っているチラシをたまたま見たんだ。黄色い着物着て、先生だったっけ？一緒にポーズとってて、びっくりしたよ。ものすごく可愛かったんだもん」

詩子ちゃんに話題を振っても乗ってこない。美里はありとあらゆるネタをひっぱりだした。あえて小学校時代のことは持ち出さなかった。決して、小学校時代木村という奴が詩子ちゃんに熱を上げていて中学時代もぎりぎりまでアタックを繰り返していたこととか、貴史が相変わらず美里と親友づきあいしているとか、ましてや立村くんという彼氏がいるなんてことはおくびにも出さなかった。ただ話せば話すほど、詩子ちゃんは黙りこくっていく。

——あの手紙だって、詩子ちゃん、私と会った時に聞かせてくださいって言ったじゃない。失礼だよ、そう言う態度。

とうとうしびれを切らせてしまった。

「あのね、詩子ちゃん」

最後の最後にとっておこうと思っていた質問。やっとサンドイッチを平らげたところだというのに、まだ三十分も経っていないのに。

「手紙に書いてたことなんだけど、青大附属の時辻さんって人のこと」

立村くんじゃないの？ と尋ねようとした。

「やっぱりいるの？」

初めて詩子ちゃんが殻を破って身を乗り出した。

「あの、いないんだけど、ただ」

大きな瞳にとんがった唇。火がついた線香花火。不意に何かが美里にも点火した。

「私も調べてみるから、どういう人が教えてよ。もしかしたら三年かもしれないし、一年かもしれないし」

「たぶん、二年生だと思うんだけど」

——二年生？

立村くと仮定して話そうと思ったのだが、堰を切ったように語り出した詩子ちゃん言葉には疑問点ばかりが含まれていた。答えが出なかった。

——ほんとに、立村くんなのかなあ？

「背がものすごく低くて、二年くらいだと思うんだけど。頭がぼおとした感じで全然しゃべらないんだ。でも青大附属の制服着ていて、まじめそうな顔してて。いつも手伝いしに来る人の子どもだって言うたの」

「背が低い？」

立村くんだとすると、あまりぴんとこない。最近貴史が自慢下に「よっしゃあ、立村を抜いたぞ」とはしゃいでいたのを覚えているが、それでもクラスで真ん中くらいだ。

「顔はどんな感じ？」

「女の子みたいな感じだけど、すごく子どもっぽいの」

——子どもっぽい？

もちろん露骨に男っぽい顔立ちではないけれども、子どもっぽいというのがどうもひっかかる。詩子ちゃんの男子好みは結局分からずじまいだった。

「話はしたことがあるの？」

「ないけど、けど」

「何かその時辻くんって人とあったの」

「ない。ないけど」

けどを繰り返す詩子ちゃん。もっとはっきりどういうことかを話してほしいのだが、難しいようだった。詩子ちゃんが知りたいのは「時辻くんという男子が青大附属にいるかどうか」ということだろう。

「二年の男子で時辻くん？ 私は聞いたことないなあ。でも背が低いってことは、もしかしたら一年生の可能性もあるよね」

「あるけど、でも二年生だと思う」

「どうしてその人のこと知りたいの？」

「それは」

言葉を区切って、詩子ちゃんはしばらく唇を噛んだ。

「陰で調べたいなにかあるの？」

「ないけど、ただ」

詩子ちゃんの言葉が途切れ、ぽつりと続いた。

「しょっちゅう日舞の会で見てるから、どんな奴なのかなって思っただけよ」

結局美里は「時辻くんって、立村くんの間違いじゃないの？」の一文を飲み込んだままだった。以前の詩子ちゃんだったら一時間話してまだまだ足りない、授業中もおしゃべりに熱中して先生に怒鳴られる、そういうパターンだったのに、今日は四十五分話をひねり出すのに苦しんだ。

青大附属の学園生活について語ろうとしても、「私、落ちたからわからない」の一言で切られ、詩子ちゃんに彼氏がいるのかどうか聞こうと思っても、「私、そんなの興味ないから」と遮られる。いやがらせのために美里を呼んだのかと邪推したくなる。一番語ってくれた唯一のことが、時辻くんなる少年の話だ。しかも、ときめきみたいなものは皆無。単に「どういう奴か知りたい」それだけらしい。

——まあね、立村くんだって決まったわけじゃないもんね。でも八割はそうだと思うな。

——だって、うちの学年で時辻なんて奴いないもん。

食べるのも飲むのも退屈になった頃、ふたりで店を出た。本当だったらファーストフードとか、アイスクリーム屋とか、そういうところに寄りたかったけれども、なんかそういう気にはなれなかった。

「美里、聞いていい？」

「なあに」

「今、羽飛とは付き合ってるの？」

いつぞや、美里を独占したいあまり、貴史に「美里をひとりじめするのは、お願いだからやめて」と文をよこしたという詩子ちゃんだった。あの頃と同じ感情を持っているとは思えないけれど、本当のことを言うしかなかった。

「ううん、貴史とは相変わらず一番の友だちだよ。付き合ってる人は、別にいるもん」

「羽飛じゃなくて？」

「うん。立村くんっていうんだ」

思い切って、言ってみた。詩子ちゃんの反応を見たかった。動揺させたかった。

「ふうん、羽飛じゃないんだ」

詩子ちゃんは天を見上げて、ふっと唇を尖らせた。横顔には斜に構えたような、すねた表情が浮かんでいた。

「でも、立村くと貴史とは親友同士なんだ。それで私と一緒に三人でよく遊んでる」

「ふうん」

二回、「立村くん」と口にしたにも関わらず、詩子ちゃんはあまり関心を示さなかった。

「五日の日、貴史と一緒に行くから。舞台、がんばってね」

詩子ちゃんは答えず、笑顔も見せず、片手だけひらひらさせた。かつての仲よし同士だった面影はまったく残らない、駅の前での別れだった。

——詩子ちゃんは、やっぱり私を許してないよね。

家に帰る道を自転車引きずりながら歩いた。土曜日なのに歩道にはそれほど人がいなかった。街路樹の葉を見つけては踏みつけた。蛇行しているかもしれなかった。

——あとで、こずえに電話して聞いてもらおうかな。立村くんのこともあるし。

二年前までは、何かがあるとすぐ詩子ちゃんに言いたいことを言っていたのに。今では涙も笑いもすべてこずえの方に向かっている。こずえとだったら今日みたいな話をしても「なあに言ってるの、言いたいこといえばいいじゃないのさ。それにしてもあの昼行灯も美里のこと、気にしてるみたいよ。今度もっと、お姉さまの権限で仕込んでやろうか？ リクエスト、ちょうだいよ」と笑い飛ばしてくれそう。たぶん詩子ちゃんのように「私、そういうの好きじゃないから」と切り捨てるような言い方は、しないだろう。

——どうして小学校時代、私、詩子ちゃんと仲良しだったんだろう？

だいぶ繋がりが途切れてきた小学校時代の女子友だちをひとりひとり思い出した。吹かれて転がる枯葉を追いかけた。

1 立村上総の観た舞台裏

日曜日は母と約束した通り、朝十時に青潟市民会館へ出かけた。前夜も母の手伝いに狩り出され怒鳴り散らされかなり神経磨り減っている状態だが、そんなことを言ってもらえない。

「じゃあ上総、悪いけどここの椅子とテーブルを全部奥にたたんでちょうだい。それからござしいてちょうだい。あとそうね、この辺にある御菓子も全部、籠に分けて入れてちょうだい。ちゃんと均等にするのよ。あとでいろいろ言われるのいやだから」

口早に命令する母を無視しつつ、やることだけはきちんとする。

母を操縦するにはベストの方法だ。

何も考えずまずは長いテーブルの足を折りたたみ、抱えてどんどん積み上げていった。下ざらいそのものはきちんと別の部屋をあつらえて行うのだが、みなが揃って着替えたり準備したりする楽屋代わりの場所を用意しなくてはならない。

「おはようございます。上総くん、いつもありがとう。今日もよろしくね」

会主の先生が笑顔で現われた。まだござをしききっていなかったので慌てて敷き詰める。秋の柄が入った薄茶の和服を纏っていた。

「あら先生、こんな汚いところじゃなくて、ちゃんと和室とってあるんだからそこでどうぞ、ゆっくりなさって。今日は忙しい日なんだから」

「沙名子さんも早いわねえ。本当に助かるわ。そうそう、今日は地方（じかた）さん用の部屋も用意してあるの？」

「もちろんですよ。ちゃんと和室ありますから大丈夫」

よくわからないが、他の関係者たちはいい部屋を用意しているらしい。弟子一同が二十人近く集まることになるという。運動会の父母場所取り大会を思い出してぞっとした。

「母さん、もう一枚ござ、ないの」

どうみてもこれじゃあ足りない。二十人が座りきれるとは思えない。

「十分よ十分、みんな譲り合って座ってもらえばいいんだから。それに他の先生たちも別部屋にするし。上総、あんたよけいなこと考えなくていいのよ」

——どう見たって間に合わないぞ、これじゃ。

そりゃあぎっちりと膝と膝付け合って座るのならば、余裕もあるだろう。でも上総の記憶する限り、楽屋の中では脱いだ和服やら浴衣をたたんだり、お弁当を積み上げたりいろいろと大変なはずだ。人によっては蒔物を置く場所が足りないといって大騒ぎになるかもしれない。何度か母に付き合ってみてきた経験からして、そう思う。これが青大附属の学校祭とか、評議委員会関係の演劇とか、そういう場にいたらためらうことなく文句を言うだろう。でも。

——いろいろあるんだろうな。

ひとりでせわしなくして気が立っている母を眺めながら、上総はたたんだテーブルの陰に、くるくる巻いたままになっているごぎの場所をチェックした。覚えておくに越したことはない。「じゃあ上総くん、申しわけないんだけど、お弁当を下から運んできてもらえないかしら。さっき頼んでおいたのが十一時前に届くはずなのよ」

——ってことは、ちゃんと食事は出るってことか。

愛想なく「わかりました」と答えたけれども胃袋を満たしてくれるのだったら、弁当にだけは笑顔が出る。

前の晩は例の「和楽器と洋楽器のコラポレーションライブステージ」の手伝いだった。といっても決して上総が外に顔を出すことはなかった。単なる切符のもぎりと、いただいた花束を飾り付けたり楽屋に運んだりする程度だ。もっとも数えることが大の苦手である上総にとっては結構面倒くさい仕事でもあり、母には思いっきり怒鳴られた。もちろん怒鳴り返す。酒の出る場所ということで未成年出入り禁止になっていたのは残念だが、上総はちゃんと気付いていた。一年の杉本梨南とその両親、友だちが堂々とやってきていたのを。ちらっと見ただけなので声を交わしはしなかったが。

一階の入り口をきょろきょろしていたら、ダンボールを抱えた男性が現われた。目的のものはこうやってあっさり発見した。受け取りにサインだけして受け取り階段を上がっていった。思ったよりも軽い。サンドイッチ程度のものだろう。少々失望したけれども、女性陣がほとんどということを見るとそれもしかたないことだろう。そんなに食うもんじゃないだろう。

「ありがとう、じゃあ次、みんなに配って行って。地方さんたちに十箱、うちの先生の部屋に五箱、音響さんに二箱、あと残りを他の人に持って行ってよ。そのくらいできるでしょ」

馬鹿にしているものだ。思いっきり「ふざけるなよな」と言い返したいのをこらえつつ、紙箱を取り出した。人数分重ねて舞台の袖に持っていく。みな忙しそうに「ああ、ありがとうございます」程度の声しか聞こえない。一通りお運びさんをした後、手持ちぶたさでぼおっとしているお弟子さんたちにもっていくことにした。上総が会議室を離れている間にいろいろ人は揃ってきたらしい。あまり会ったことのない女性、子ども、がごぎの上で浴衣を広げたり、正座したまましゃべったりしていた。ざっと観た感じ、若い女性が多い。小学生、大学生が中心らしい。お互いあやとり遊びで盛り上がり、気の立った母親に「ほら、早く浴衣に着替えるよ」と叱られていた。

——あの人は来てないのかな。

藤野詩子のことを思い出した。「玉兎事件」のあの少女だった。

まだ、荷物も置いていないらしい。

——まさか、清坂氏と友だちだったとはな。

——へたしたら、当日羽飛、清坂氏と顔合わせてしまうかな。

仕方ないだろう。上総も覚悟を決めていた。

「これで全員揃ったかしら。ちょっとみんな何やってるの！ ほらちびちゃんたちも遊んでちゃだめよ。早く順番が来る前に浴衣に着替えてちょうだい。ほらほら、衣装着てみるんだから。ちゃんと紐も三本持って。それとお母さんたち、ちゃんと衣装さん、鬘さんのお礼、持ってきましたか？ ほらぼち袋用意したの？」

自分の息子だけではない。母のヒステリーはお弟子さんとその家族たちにもぶつけられている。同情すべきものがある。観ていて腹が立つのもわからないことではない。誰も浴衣を着ないで黙ってしゃべっているだけなのだから。上総が弁当を持っていくまで誰も動かなかった様子が全てを物語っている。弁当を運び終え、いただきものの菓子を籠にあけ、ばたばた運んでいる間、ほとんど誰も手伝ってくれなかった。もしこれが評議委員会関係の行事だったら、即座に本条先輩から殴られているだろう。

「あのう、時辻さん、いいですか？」

恐る恐る母を呼び止める声があちらこちらから聞こえた。ふんぞり返ったかっこうで母はひとりひとりから質問を受け付け、高飛車に返答する。もっとやさしい声で話せばいいのに、と思うのだが上総だって母を怒らせたくない。何も言わず黙ってお茶を注いでいた。

「ほら言ったでしょ。この前。ちゃんと帯を用意しておいてちょうだいって。いつ外に出かけるかわからないんだから、伊達締めだけで外うろつかないようにしてって。ホテルと一緒によ。いいホテルでは浴衣で廊下を歩かないようにしてくださいって言うでしょ。前にも言ったのよね」

——別に借りればいいじゃないかよ。

母に言い負かされた犠牲者の数が増えるにしたがって、隣の部屋からは三味線を爪弾く音や琴を爪弾く響きとか、いろいろなものが交じり合って聞こえた。洋楽の匂いが一切しない、純正の和楽器だった。

「あと誰来てないの？ 藤野さん？ まったくあの親子ったら」

頭にわざとらしく手を当てて、大げさにため息をつく母。しかし時間がないらしくさっそく命令をお弟子さんたちに出した。

「とにかくみな、衣装さんが準備出来たらすぐに着替えられるようにして頂戴よ。ほら早く」

後ろのドアが開いた。上総が振り向くと、噂をすればなんとやらの親子連れが腰をかがめている。頭を下げているのだが、あまりにもへりくだった感じだった。やはり荷物を抱えている。上総はすぐにドアを支えてやった。

「ありがとうございます。おはようございます。本日は遅くなりまして申しわけございません」

藤野詩子の母だとすぐにわかった。そして、腰をかがめているのが母親だけで、当の藤野詩子本人が唇を結んだままぺこっと頭を下げていたのも見た。相変わらず、態度が正反対の親子である。

「藤野さん、あなたたちだけじゃないんですから。ほら詩子ちゃんもすぐに着替えて」

返事をしない。母には一瞥を投げただけで座ろうとする。上総はすぐに、最後のサンドイッチパックを二箱取り出して藤野親子に持っていった。これで全員分配りきったことになる。

「ほら、詩子ちゃん、ごめんなさいって言いなさい」

「うるさいってば！」

考えてみれば藤野詩子のご機嫌麗しい時をまだ一度も見たことがないような気がした。上総が持っていった弁当も、結局受け取ったのはお母さんだけだった。ぷいと顔をそむけたままだった。たぶん、顔を見るのも嫌なんだろう。慣れているのですぐに引き下がった。が、「もっと端っこ行きたいんだってば！」

お母さんを相手になにやらまた愚痴っている。藤野親子が落ち着こうとしているところは、ござの真ん中らへんで、お弟子さん同士に挟まれている。角にいる方がほっとするタイプなのかもしれない。隠れていたいのもかもしれない。その辺の気持ちは上総もわかるが、どうしようもない。

「ほら、またわがママ言ってるの？ 詩子ちゃん。もう中学二年なんだから」

「わかりました！」

——完全に藤野さんとうちの母さん、天敵だな。

ごもっともの事件を知っているだけに上総はあらためて感じた。

——母さんもなんでこんな露骨に馬鹿にした言い方するんだろうな。きっと相手がどう思ってるかなんて考えてないよな。この人。

とはいえ、上総の目からすると、浴衣に着替えるためのスペースがかなりきつきつなのも確かだった。風呂敷や和服キャリーバックを開きながら、きちんと長方形にたたんだ白に紺染めの浴衣を出してはいる。が、広げるところまではいかないようだ。ちょっと袖のところをめくっては隣りのお弟子さんとおしゃべりをし、足袋らしき白いものをひっぱりだしては、またしゃべりと時間つぶしをしている。母がいらだつのも無理はない。特に大学生くらいの女性たちはなかなか袋すら開けようとしなかった。

「ちょっとあなたたち、なんでそうもたもたしてるの！」

口籠もるみなさま。上総は退散しようとして外に出ようとした。とたん、

「だってこんな狭いところじゃ着物広げられません！」

必死に押さえようとする母親を無視して、いきなり藤野詩子が金切り声を上げた。おそろおそろ上総は振り向いた。母の様子を見ると、完全に見下した態度でねめつけている。

「詩子ちゃん、遅れてきてその言い方は失礼よ。あやまりなさい。そしてすぐに浴衣に着替えなさい」

「だって着替えたくたってできません！」

いわゆる体育更衣室ののりだったらかまわないのだろうが、この場所は窓からも丸見え、隣同士の肩と肩が触れ合うような小さなござだ。ポニーテールをまだ解かずに詩子が鋭く続けている。

「こんなとこで、できると思っているんですか」

「当たり前でしょう。詩子ちゃん。いいかげんわがママはやめなさい。他の人の迷惑になるでしょう」

「じゃあ私出ません。このまま帰ります」

また始まった、とばかりに母は、詩子のお母さんにうなづいてみせた。すっかりおろついでい

る藤野母は、何度も頭を下げて、片手で詩子のスカートをひっぱっている。もちろん、振り払われているが。

——だから母さん、要はござをしきやあいんだろ、ござを。

上総は母の隣りをわざとぶつかるようにして通り抜け、部屋の隅に立てかけてあるござをひっぱりだした。海苔巻状態だ。ぐいと抱えた。

「これ、使ってもいいんだろ？」

「上総、でもこれ敷くと、場所が狭くなるでしょう」

「少し端と端を重ね合わせれば、通路はできるよ。当日はわからないけどさ、今日はそんなに人こないんだろ？」

母の返事を待たずに、上総はもう一枚のござを蹴飛ばしながら広げていった。くるくると広がっていくのがおもしろかった。サッカー気分でかなりいいかげんな敷き方だが、スピードが一番だ。

母はヒールをこつこつ叩きながらも、ふんと息をついて、

「詩子ちゃん、これならどう？好きなように使いなさい」

藤野詩子ではなく他のお弟子さんたちが安心したように、長方形の浴衣を広げ始めた。大判の風呂敷を広げて、化粧道具や洋服やら、ありとあらゆるものをたくさんばらまいている。口には出さなくとも、そうとう不満が溜まっていたに違いない。広くなったはずのござがあっという間に満員御礼だ。

上総が足先で端を整え、靴を脱いだ場所に戻った時、見たくないものと目が合ってしまうとまどった。藤野詩子が唇をへの字にして、じっと上総をにらみつけていたからだった。怖かった。そのうち、藤野詩子の母が浴衣を取り出してばらりと広げ肩にかけていたが、露骨に振り払い言い合っている声が聞こえた。

「母さん、俺の分の弁当ないんだろ。どうせ」

「え？ あら、ほんとだわ。私ももらってないわよ」

「さっき配ってて気付いたけど、俺も今日一日、何も食わずにやるのはいやだよ」

「上総、あんたなにを言いたいのか」

無理やり母を会議室からひっぱりだし、上総は当然の要求をした。

「まだ時間あるだろ。俺はひとりでカレー屋で食べてくるからその代金」

あっさり、千円丁度せしめることができた。母もめずらしく嫌味を言わずに、ぽつりと、

「一時までに戻ってきてよ。まったく、この調子だと先が思いやられるわ」

上総に対してなのか、それとも藤野詩子に対してなのか、それはわからなかった。たぶん両方だろう。

2 羽飛貴史の実験と計画

美里と藤野詩子との語り合いがどうなったのかは、それほど興味がなかった。貴史が知りたかったのは、はたして「藤野は立村のことを知っているのか」という一点だけだった。女子同士の

いざこざには近づかないのが鉄則だ。貴史は日曜、美里と美術館で待ち合わせることにした。別に部屋に呼び入れても問題はないのだが、双方の親が立村のことを快く思っていないのを知っている以上、ためらいもある。もっとも小遣いはかなり厳しい状況なので、互いにコンビニでパンとジュースを購入して持っていくのは当然のことだった。

「結局どうなんだよ、藤野は立村のこと、知ってたのか？」

「たぶん、だと、思う。けど」

自転車を駐輪場に並べ、晴れた外のベンチに腰掛けた。午前中ということもあり人は思ったよりいない。美術館の催し物も常設展のみなので、それほど集まってこなかったようだった。

美里は髪を下ろしたままで来た。いつもだったらわけのわからん編みこみとかいろいろしているのに、珍しかった。指を絡めて、言葉を選んでいる真っ最中だった。

「私の勤なんだけど、立村くんのことを時辻って苗字の人だと思ってるみたいなんだ」

「時辻って誰だよ？」

初耳だった。

「つまりね、立村くんのお母さん離婚してるじゃない？ だから苗字も変わってるんじゃないかって思うんだ。時辻さんに変ってるかもしれないじゃない？」

「けどあいつは立村って」

「ばかね、貴史。離婚すると苗字が変わるけど、立村くんはお父さんのうちにいるんだから立村姓のままなのよ。でも、お母さんの手伝いで引っ張り出されているからまわりからは時辻上総だと思われてるわけよ」

「ははあ、やっと飲み込めた。けど、あいつの母ちゃんが時辻だって断言できるのかよ」

「出来ないよ。そりゃあ。ただね、今まで立村くんの態度見てて、絶対これはクロだって私は思ったね。とぼけようたって無理無理。もう私もあきれて物も言えないってね」

好きな相手に対してよく言えるものだ。無言で貴史はコーラを飲んだ。

「じゃあ、来週の日曜はへたしたら立村と顔合せできるてことだな」

「どうだか。向こうだって私と詩子ちゃんが知り合いだと知っているはずだから、姿隠すはずよ。立村くんの性格だもの、絶対そうするよ」

——さすが、奴の性格を理解しているよな。こいつも。

「だから、しばらく私も無視することにするから。貴史悪いけど」

「ああ、わかった」

南雲にぶつけられた罵詈雑言がいまだに耳から離れなかった。

土曜日の放課後、なぜ自分は一発奴をぶんぐってやらなかったのだろう。

納得がいかなかった。

こいつがいうことには、どうやら「羽飛貴史は立村上総をいじめている」ように見えるらしい。そこで規律委員たる南雲が「注意」をしたということらしい。なあにが規律委員だ。と貴史は大声で怒鳴ってやりたい。こいつにそんなことを言われる筋合いはない。

何よりもまず、どこをどうすれば「いじめ」になるのだろうか。

「あのなあ美里」

「なによ」

「俺、あいつをいじめてるように見えるかよ。見えねえよな」

美里は少し首を傾げ、ちゅちゅとサイダーをすすった。

「全然。当然のこと言ってるだけでしょ」

「だわな。いったいどこがいじめてるってんだよなあ」

「貴史、あんたそんなこと誰に言われたのさ」

「いや、な」

南雲に言われたんだと愚痴るのは情けないことだと、貴史も自覚していた。

男たるもの、だらだらみじめたらしいところを見せ付けたくない。

「そうそう、それでね、貴史。昨日ね、見ちゃったんだ」

声を潜めて美里がいきなりささやいた。別に誰もいないんだから大声で堂々と言えよ、と貴史は思う。

「はっきり言っちゃまえ、なんだよなんだ」

「あのね、彰子ちゃんがね、昨日の帰り、別の男子と帰ってたんだよ。堂々と！」

奈良岡彰子のことらしい。天敵南雲の恋女房だ。

「ほお、奈良岡もやるなあ、相手は誰だよ」

「知らない奴だった。白いラインがガクランに入ってる制服でね。すごいんだよ、金銀ぎらぎらまだらに光らせた自転車に乗ってるの。なんか、いわゆる不良化の兆しってプリントに出てきそうな感じ」

思いっきり初耳だった。奈良岡彰子といえ、五月の下旬にいきなり南雲から告白をかまされてショックを受けたものの、心よく友情を保つお付き合いを引き受けたというなかなか出来た女子である。ただ、ぽっちゃりを超えてビール瓶タイプの肝っ玉ねーさんという見た目が災いして、なかなか彼氏が出来なかったのもまた事実だろう。貴史も入学式の時に、一目見て「ちょっとこいつとはご遠慮したい」と一瞬思ったことを覚えている。鈴蘭優命の貴史には、ルックスが受け付けなかつただけである。だが、貴史の美学をあっさりとくつがえしてくれる性格のよさに、男子一同みな「奈良岡のねーさん」という暖かい呼びかけをプレゼントしてしまった。恋愛対象にはならないが、しかし、という奴である。

——いやあ、奈良岡もやはりあいつの本性に気付いたんだらうなあ。正しい選択だぜ。

さすがにこれも口に出さない。いくら南雲が憎しといえども、悪口をこぼしたくない。美里の前では特にだ。

いきなり強い風が吹き、美里が小さくしゃみをした。

「寒いのか」

「うん、けどいいよ。でねでね」

貴史はパンの袋を開けた。まずは腹ごしらえをしたかった。

「まさかねえ、南雲くんだったら浮気ってこともあるかもしれないけど、彰子ちゃんに限ってそ

んなことないよね、って思って声かけたら、いつものようににっこり手を振ってくれたの。ふと思ったんだけど、南雲くん知ってるのかな？」

土曜日の放課後ということは、貴史が南雲に言いがかりをつけられた時より後だろう。

——俺にさんざんいちゃもんつけてる間に、最愛の相手はどこぞへ消えてしまったってわけだ。情けねえ。

「知らねえんじゃないか」

立村を探しにどこか行ってしまったことを考えると、結局南雲は奈良岡とは帰らなかっただろう。

美里は左の二の腕を、袖の上からさすりつつ、つぶやいた。

「やっぱりみんな、仲良しに見えてもいろいろあるんだよね。なんだかなあ」

——一番いろいろあるのはお前だろ、美里。

「とにかく、どっか別のところ行くか。俺もまじで寒いぜここ」

「うん、行こう行こう！」

となると、行く先は近所のスーパー、無料休憩所くらいだろう。クラスの連中に見つかってなんやかんや言われるかもしれないが、それはその時だ。誰か…… それこそ貴史と美里がくっついてるらしいと、南雲的思考の奴が立村に言いつけたとしても……、あいつのことだ、何も言い返してこないだろう。本当にほれてるんだったら、意地でも尋ねてくるはずだ。

「美里、早めに決着つけろよ。俺もいかげん汚いじめやっている奴だと思われるのはたまったもんじゃねえ」

「あんた、だからどうしていじめにこだわるのよ。ほんと、貴史、変だよ」

しばらく貴史は美里を相手に、家族のことやら五日のこと、その他いろいろ馬鹿話をかましていた。無理に立村のことを避けなくても、話すことは山のようにあった。立村が結局、和楽器と洋楽器のコラボレーションみたいなライブに貴史と美里を誘ってくれなかったことかも多少不満がないわけではない。美里だって同じだろう。一学期の時に誘われたのは覚えていたが、やはり二学期に入ってお互い疎遠になりつつあってからは、特別に盛り上がりもしなかった。

目に見えないプレパレートのようなもの。

入学式の時、初めて立村と会った時に感じたものだった。当時はまだ、貴史の知らない世界を纏っている、きらきらしたかっこよさに思えたものだった。でも一年半が経ち、立村の打ち解けない部分を知るにつれて、それは防弾ガラスのようなものだったのかもしれないと感じるようになった。

——プレパレートってさ、ピンセットであつかわねえと大変なんだぞ。破れてしまっただけで先生に怒鳴られるんだ。実験の時。でも、立村の場合そんなピンセットで拾えるようなガラスじゃねえよな。

——そういうガラスを破るには、俺だって思いっきり弾丸ぶちかますしかないだろ？

——それが、いじめだっていうのかよ。相手は全然反応しねえのに。

歩いて五分くらいのところにある大型スーパーに向かう間、貴史はもう一度あたりを見渡した

。

とりあえず、立村の姿は見えなかった。それでよし。大丈夫だ。

「美里、よく聞け。これはオフレコだ」

「なによ。どうせ私たちやってること、みんなオフでしょ」

茶化されたけれども、もう一度深呼吸して続けた。

「明日も連休だろ。奴と顔を合わせるのは火曜日だ」

「まあね」

気のない声で答える美里。

「もしあさっての放課後、俺が立村にかなり厳しいやり方をするかもしれないが、いいか、お前、口が裂けても本当のこと言うんじゃないぞ」

「厳しいやり方ってなによなに」

口を尖らせて美里が立ち止まった。道路を一台、ワゴン車が通り過ぎていった。あとは誰もいなかった。決して声を低めはしなかった。堂々とだった。

「俺が思ったよりもあいつは簡単な奴じゃない。一発目を覚まさせてやらねえとどうしようもねえよ。お前が無視してること自体はすげえ、堪えてるんじゃないかと思うけどな。あいつの方から本音はなかなか引っ張り出せねえよ」

「それならしかたないじゃない。結局私はあきらめるってことだから」

「そんなんじゃないぞ。ばあか。美里、あいつがあれだけ落ち込んでるってことは、言い出すきっかけがねえってことだろ？ 度胸ねえから様子をうかがっておどおどしてるだけだ。だったら、俺がきっかけ作ってやろうじゃないか！ まあな、世の中にはこういうことを『いじめ』だと勘違いする奴らがいるからなあ。俺もへたしたら規律委員会につるされるかもしれないが、まあそれはその時だ」

「ちょっと、貴史、やめなよそんな。まさか立村くんを殴る……」

ちっと舌打ちした。さすがにそこまでは考えていない。

「俺が本気だしたらあいつ頭蓋骨ずたずたになっちゃうぞ。それに暴力沙汰は学校の中でやらねえよ」

「けど、あんたまずいよ。そんなことしたらそれこそ停学になっちゃうかもよ」

「お前覚えてるだろ。宿泊研修三日目の時、結局立村は停学もなにも食らわなかっただろ。あれを考えれば俺が一言二言、あいつとやりあったってたいしたことにはならねえよ」

納得させられたのだろうか。美里は黙ってうつむいた。

「俺がそんなへまなんかしねえよ。全く、あいつも世話の焼ける男だぜ」

通りの店を五軒通り過ぎるまで美里は一言も口をきかなかった。まだ捨てていなかったサイダーの缶を、街路樹の側にあるくずかごにほおった。ホールインワン。見事だった。

「ほんと、そうよ。私たちやってることって、ほとんど、立村くんの親代わりよね」

——奴にはわかりやしねえんだ。俺と立村と、美里との繋がりが。

貴史が言いたいのはそれだけだった。所詮恋人と思っている相手に浮気されていることも気付かない規律委員に、きっぱりと言い放ってやりたかった。

——こういうやり方でぶつかってくしか、俺と美里にはできねえんだ。

——こういうやり方でないと、立村は気付かない奴なんだ。そんなこともわからねえのか、南雲。

3 清坂美里の生で見た寸劇

連休は晴れていたのに、なぜか台風到来ということで火曜日は大雨だった。風も強い。かさもきかない。しかたないのでレインコートで出かけた。めったに来たことのない真っ赤なケープ付きのレインコートは、かなり裾が短くなっていたけれども可愛くてお気に入りだった。

——立村くん、今日はバスかなあ。

品山から通うとなると、それしかないだろう。自転車で来る根性があるとは思えない。美里は「青大附中前」のバス停に降り立つ立村くんの姿を探した。やっぱりいなかった。混んでいるだろう。

——貴史、何考えてるんだろう。殴ることはしないって言ってたけど。あいつのことだから生半可なことじゃないよね。

日曜にふたりで話をしたことがまだしこりとして残っていた。

結局貴史の提案を忘れたふりして、ふつうに遊びふつうに食べて帰っただけだった。

来週の日曜は一緒に詩子ちゃんの舞台を観にいこうと約束した程度だった。

——でも、忘れてるか。もう二日も経ったんだもんね。

貴史が考えていることがわからないわけではない。美里も反対の立場だったらきっとそうしただろう。立村くんを問い詰めて本当のことを白状させる。全くもって素直すぎることをやろうとしているに過ぎない。立村くんがいつも、裏に回って巧くいくよう努力しているのとは反対だ。貴史もそうだが、美里だってそっちの方がすっきりする。言いたいことははっきり言って相手の返答を待つ。納得いかなかったら口で返事をもらう。立村くんだって口がないわけではないのだから、それくらいはできるだろう。

——けど、立村くんは、何でも内にしまっちゃうからな。

——立村くんはいやなことがあったら黙って受け止めて、それから後で復讐するってタイプだよ。きっと。ほら、小学校の卒業式で学校の番長格の奴と決闘した話とか、一年の時に加奈子ちゃんに追い詰められて裏ノートこしらえて乗り切ろうとしたりとか。結局立村くんは詰めが甘いから、大成功はしなかったみたいだけど。そうよ、あの人詰めが甘すぎるのよ。ひとりで何でもやろうとするから、結局最後の最後でぼろがでるんじゃないのよ。だから、私と貴史に一言でも言ってくれたら、いくらでも手伝うのにさ。もちろん、嘘じゃないことが前提だよ。「裏ノート」の時みたく、嘘八百連ねてどうたらこうたらっていうんだったら、私は絶対に乗らないか

らね。正々堂々と話をして、それで私たちに手伝ってほしいって言ってくれたら、私、思いっきりがんばっちゃうよ。当たり前じゃない。

ずぼっと水たまりに足を突っ込んでしまった。ショートブーツがぐっしょりぬれた。母には長靴を履いていくように薦められたけれど断固として拒否した。かっこ悪いことはしたくない。でも足の冷たさにほんの少し、後悔した。ちゃんと代えのストッキング持ってきてよかった。

トイレでストッキングを履き替えた後、急いで美里は二年D組に向かおうとした。すれ違いに降りてきたのは三年A組の評議委員かつ委員長、本条先輩だった。

「おはようございまーす！」

「よお、清坂ちゃん。雨にぬれた姿も色っぽいな。奴に惚れ直されるだろ」

「先輩こそ、相変わらず大変なんですね。いろいろと！」

軽くかわして一礼した。

「ところで立村はどうしてる？」

やっぱり聞かれると思っていた。立村くんをなめるように可愛がっている本条先輩のことだから、多少は気付いているだろうと覚悟はしていた。貴史や自分には一言も打ち明けないけれども、本条先輩にだけは洗いざらいしゃべっているらしいというのは、女の直感だ。

感じた以上、ごまかさなくては。

「やあですねえ。そんなの先輩の方がご存知でしょ」

「いや、知らないんだ。ほんとになあ。あの甘ったれが全然、最近俺のところに顔出さなねえからさ」

甘ったれ、とはまさにその通り。通常の状態だったら爆笑してピースしてやるころだろう。本条先輩は頭を掻きながら続けた。

「来週まで評議委員会がないからなあ。別に用がないならしゃあねえけどな。しかし毎日通いつめられていた俺としては、それが全くなくなるとやはり、なんか悪いもの食べたんでないかと心配になるってわけだ。清坂ちゃん、あいつになんかあったら、俺に教えてくれよな」

「なんかあったら、ですね。たぶんないと思いますけど」

色気も恋心も感じさせない言葉を返した。本条先輩はかすかに顔をしかめて笑い、片手を挙げて廊下へ降りていった。

——立村くん、本条先輩のところにも顔出してないの？

——私、てっきり、本条先輩のところでべたべたしてるんだと思ってたのに。

窓から雨のしぶきでガラスが解けているように見えた。水あめ状態。輪郭がぼやけた葉が揺れていた。

美里が二年D組の教室に入ったとたん、貴史の言葉が嘘じゃないことに気付いた。

貴史は嘘をつかない奴だったと、改めて思った。

気付いているのは若干名。掃除箱の前でふたり、じっとにらみ合っている。目に力をこめているのは貴史の方だった。ブレザーを脱ぎ捨て、ネクタイを緩めたまま、片手で立村くんを壁に押

さえつけるようなポーズを取っている。対する立村くんは目を見開いて、ほとんど瞬きせずに貴史の顔を見つめていた。目を合わせるのが苦手な立村くん。なのにこうも大きな目でじっと動かないでいるのは、それだけ貴史の迫力が勝っているからだろう。

美里はそっと近づいていった。声をかけようとしたが、不意に肩に手を置かれた。振り向くと、真面目な顔をしたこずえが立っていた。首を振っていた。

「こずえ、いつから見てたの」

「ついさっきから。始まりから全部ね」

貴史たちの邪魔をしないようにふたり、ちらちら視線を送りながら会話を伺った。

「あのなあ、立村、さっきから言ってるだろ。俺は別に、美里がどうか女子がどうか言ってるわけじゃあねえんだよ。なんでそうもおどおどしてるんだ？俺、お前になにか悪いことしたのかよ。え、言ってみろってんだ。答えられねえのかよ！」

さすが教室の中。声は低い。やっぱり外じゃないのだからしかたないのだろう。立村くんは相変わらず返事も身動きもしなかった。周りの男子たちも一部、気にするしぐさをする様子だが、すぐに別の方を向いていた。なんのことはない、水口くんが奈良岡彰子ちゃんを探して騒いでいるので関心が移っただけだ。

「お前、聞いたかったんだろ？俺と美里があの日、どこで油売ってたか」

「いや、それは話さなければそれでいいと」

か細い声だった。こずえの視線がとうとう貴史の背中に定まった。動かす気配はない。

「お前それが本心かよ。本当は気になって気になってしかたなかったくせにな。俺は前からお前の、そういううじうじしたところが嫌いだったんだ。言いたいことがあったらはっきり言えよな。立村、お前口があるんだろ。聞きたいことあったら聞けばいいだろ。それともなにか？

言ったら何かされるとでも思ってるのかよ」

「そんな、そんなわけないだろ」

力ない言葉だ。こういう男を自分は好きなのだと思うと、情けなくなってきた。あっさり「あんたととは別れるわ」と言い切ってやればいいのに。それができないからこうやって黙って聞いているわけだ。美里はこずえと同じ方向をじっと見据えた。四つの視線に気が付いたのか立村くんは数回、身体を揺らした。動かさないのは貴史の手だった。

「ははあ、お前さ、ずっと言えないことみんな隠しているんだろ。うっかり俺なんかになにか言ったら、裏切られるんでないかとかさ。美里を取るなとか言ったら、かえって百発くらい息の根詰まるだけ殴られるとでも思ってるんでないのか。馬鹿野郎。そんな俺が肝っ玉小さい奴と思っただか」

——貴史、あんた言うのちょっと女々しいよ。

冗談からめてつつこんでやりたい。でも出来ないのは、後ろから見える立村くんの表情が能面のようなからだった。いつも整っているあどけない表情なのに、完全に感情が消えている。怖かった。見たことのない立村くんの顔だった。

「言えよ、言っちゃまえよ。俺はサイクリングロードで決闘して騒ぎを起こしたり、車の中で大法

螺こいてバスの中から抜け出したりしたことねえし、どこかの誰かと違ってちょっとしたことで泣いたりなんてしない。ああ、そうだぜ。俺は全然そういうことしたことねえよ。けどな」

——貴史、それだめだよ、あんた言いすぎだよ。

こずえが手を押さえようとする。でも押さえられない言葉が湧く。

——あんた、そのこと言わないって約束してたのに、自分で約束破ってどうするのよ。ばか。身体が勝手に動いていた。立村くんの肩を押さえている貴史の腕を、美里は両手で惹き下ろした。

「美里、お前黙ってろって言っただろ」

「いいの、あんたが言うことじゃないの。私だって言いたいだけよ」

——これは私と立村くんのことだから。私が黙ってたらいけないの。

立村くんの視線はふらふらとさまよい、最後に美里の顔で止まった。揺れている瞳をじっとにらみつけた。猫の眼だった。おびえたように光っていた。

——この人が私の彼氏なんだ。

あふれ出た。

「立村くん。貴史はね、あんたのためにみんな言ってるのよ。おととい私、貴史と話してたんだから。あんたが全然私と貴史を受け付けようとしなから、みんな頭に来てるんだって。私だけじゃないんだよ。みんなそうなんだよ。私だってずっと口に出かけていたけれども、言わないでがまんしてたんだよ。けどさ、あんた全然何にも言うこと聞いてくれないじゃない。どうしてよ。こんなに私、わかろうとしてるのに、どうして逃げるのよ。貴史と一緒にのこと言うよ。あんた、口持ってるの？」

能面がわずかに揺れたように見えた。

「私知ってるんだよ。立村くん。あんたが小学校の時に本当にいじめられてたってことだって、手におえない泣き虫だったことだって、お母さんが時辻さんって苗字だってことだって。あんたが隠したがっていることはみんな丸見えなんだよ。みんな一年の時から知ってるんだよ」

瞳がゆるんでいる。唇は堅く閉じられたまま。何か反応してと美里は叫びたかった。裏の声で叫んでいた。

「それがわかって私、あんたと付き合いたって言ったんだよ。想像の王子さまじゃない、立村くんと付き合いたって言ったんだよ。なのになんで、信じてくれないのよ。ほんっとに馬鹿じゃないの。もちろん立村くんが人のこと気遣いすぎる性格なのはわかってる。ひとりでいつも背負い込んでしまうのもわかるよ。迷惑かけたくないって思ってるのもわかるよ。けどさ、この前の宿泊研修だってそうじゃない。あんたが一人合点してやってることは、みんな、私と貴史を思いっきり傷つけてるんだって、気付いてないんでしょ」

「そんなことないよ」

首を振る立村くん。能面がずれた。もっとひっぺがしてやりたかった。でも必死に冷静沈着の仮面を被りとおそうとするしぐさに、思わず憤った。隣の貴史がじっと美里を見つめていた。こちらは完全に、怒りの素顔をさらけ出していた。

「じゃあなんで何にもしてくれないの？　もしかして私と貴史がさぼった時にコピーを入れておいたからそれでチャラになると思ってたの？　ばっかみたい。そんなことじゃないよ。口でちゃんと、謝るか怒るかしてくれないと、届くものも届かないよ」

「いや、あれはただ」

遮った。聞けば聞くほど美里は言葉を尖らせてしまった。たぶん言葉のやじりは針だろう。ちくちく突き刺しているだろう。身体の奥からわけのわからない夢見ごこちな感覚が湧き上がってきた。身体がふわっと浮く感じ。言葉が途切れなかった。

「あとさ、お母さんのことをどうして隠すのよ。おとといの日曜、和楽器がどうたらこうたらのライブだったんでしょ。一学期に誘ってくれたの忘れてると思ってた？」

「ごめん、あれも場所の問題で」

「いいよ、わかってるよ。誘えない理由があったんだって想像はつくよ。でも一言くらい、言ってくれたってよかったじゃない。かくかくしかじかこういう理由で誘えなくなったごめんなさいくらい。そうすれば、じゃあ今度誘ってねって笑って終わるのに。立村くんいつも言葉が足りなすぎるよ」

泣きたいのにわめきたいのに、体の奥だけ大笑いしているみたいだった。いっちゃえいっちゃえと声がする。

「あんた、覚えてないでしょ。私と貴史がもし付き合っても平気だって言ったでしょ！」

貴史の顔が完全に炎で燃え上がった風に見えた。ふたたび立村を両肩押さえて揺さぶった。

「ばかやろう！　お前、正気か！　本当にそんなこと言ったのかよ」

「私、ちゃんと聞いたよ。別に悪意があって言ったわけじゃないって、信じてるけど、でも」

けらけらおなかの中で笑っている不思議な生物がいる。目をつぶり顔を伏せる立村くんに決定打を浴びせたい。浴びせちゃえと声がする。口を開きかけた瞬間、

「美里、羽飛、いいかげんにしな」

片腕を握られた。貴史との間にこずえが割って入っていた。ずっと聞いていたのだろう。立村くんの眼がこずえの方をちらっと見た。

「立村、あんたはさっさと席に戻りな。全く、一人顔面蒼白にしててどうすんの。まったくあんたはガキなんだから」

立村くんは我に帰ったように、顔を上げた。美里、貴史をじっと見上げ、もう一度、

「ごめん、本当に俺が悪かった」

いつもの決まり文句をつぶやいて席に戻っていった。黙ってそっぽを向いている貴史。見ると貴史の腕をこずえががちりと掴んでいた。憧れのダーリンにくっついていてという風ではなかった。罪人の手錠、そのものだった。

「羽飛、あんたやってること、言っちゃなんだけどリンチだよ。もしうちの弟が、友だちに似たようなことされてたら、羽飛だって許さないよ」

美里には一言も言わなかった。貴史の言葉は美里とイコールだといつしかこずえも気付いていたのだろう。ちらっと一瞥して、美里に、

「あとで、話すからね」

返事をしない貴史を置いて、さっさところずえは席についた。隣の立村くんにはふたこと三言話し掛けているようだった。南雲くんがにこやかに割り込んでいるようす。でも、立村くんは目を伏せたまま黙って頷くだけだった。他の連中はそれほど関心を持たなかったようすだったのが意外だった。

菱本先生が入ってきて開口一番。

「悪いが、今日な、台風が来るということで四時間目で終りにするぞ。なあに喜んでいるんだ。お前ら。外出歩くんじゃないぞ。ほら、四時間のがまんだがまん」

ガラスが雨に洗われて溶けていくようだった。一切声を出さない立村くん、興奮の名残が顔の汗に残っている貴史。ふと美里は自分の顔がどう立村くんに映っているのだろうかと思った。

第六章

1 立村上総は青空のもとに闇をみる

火曜日。台風の朝。貴史に小突かれ美里に罵られこずえに救われた時、上総は言葉を返す手段を見つけられなかった。

「ごめん、俺が悪かった」

と繰り返すだけだった。四日たった土曜の朝、今ならば冷静に言い返してもよかったのではと思えるけれど。

三日間ずっと同じ言葉を夢の中で繰り返してきた。

——すべて悪いのはわかってる、だから。

——ごめん、本当に、こんなことを考える俺が馬鹿なんだ。だから、だから。

今なら、と上総は唇をかみ締め思う。口に出してみた。人前では言えない言葉だった。

「でも、許せないことは、許せないんだよな」

上総が目を覚ました時、すでにカーテンは開け放たれていた。父が早朝、部屋に入ってきたのだろう。よどんだ空気を入れ替えてくれたのかもしれない。

窓いっぱい広がるのはなめらかな青空だった。秋らしく、玉子の白身を薄く延ばしたような光だった。枕から頭を持ち上げなくてもすうっと見える。

南雲と一緒に、黄葉山のホテルで同じような空を眺めたことを覚えていた。

——もう、一ヶ月たったんだよな。

だいぶ熱は引いた。

実際高熱でうなされたのは火曜の夜からだった。台風の影響もあり、四時間目で早帰り。クラス全員の前での公開吊るし上げ。クラスの連中は当然、詳しい事情を探りたそうな顔をしていた。

上総が評議委員かつ、野郎連中に日常から恩を売りまくっていることもあって、直接「ねえ、結局なんで美里にあそこまで言われるわけ？」

と追求されずにすんだ。クラスのために力を注ぐと見返りが返ってくる、ひとつの例だった。

水曜の朝、父が仕事に行く前、車に乗せられて近所の病院で点滴を三十分打ってもらい、だいぶ体調はよくなった。しかし薬が合わなかったのだろう。一切食べ物が受け付けられない、無理して口に入れると吐き出してしまう、口にできるのは水だけという悲惨な状態に陥った。

さすがに放任主義の父もまずいと思ったのだろう。食事を毎日上総の分だけ作ってくれた。取材の合間にはバイクで戻ってきて様子を見に来てくれた。一人ぼっちでうなされつつも、木曜にはだいぶ落ち着き、コーンスープくらいはおとなしく胃に収められるようになり、金曜にはおかゆを平らげた。だるいけれども、学校に行けないほどの体調ではない。

——いつもだったら、すぐに学校に行くのにな。

天の青空をそのままローラースケートで走りたい気分。一年前だったら。

青大附属に通うことが辛くなることなんてないと思っていた。

——小学校と同じことやってるのかよ。俺って学習能力なさすぎだよな。

四日間風呂に入っていないのでシャワーを浴びたかった。棚の時計だと八時十分。間に合わないけれど、臭いままで出かけたくはない。急いで水浴びだけし、ブレザーに腕を通した。なんとなくするりと入る。身支度をして靴を履こうとした。

父が後ろでげげんそうに上総を見ていた。

「上総、大丈夫なのか」

「わかんない」

意味不明な返事を返した。

「無理するなよ」

なんでチェックのからし色シャツにチノパンという軽い格好なのだろう。父にしては珍しかった。普段は形だけでも背広を手放さない。父と似ている好みだ。

「父さんも、今日はこちらにいるの」

「有給消化さ」

「うん、わかった」

意味が通っていない返事を返した。父の視線が背骨あたりにちくちく刺さった。

午前八時半過ぎ。もうどうやったって学校には間に合わない。

でも行けば遅刻扱いとはいえ出席になるだろう。あまり休み過ぎると後で補習の嵐となる。川べりのサイクリングロードをとると進んだ。途中で漕ぐのがしんどくなり、自転車から降りた。

ガクラン、セーラー服姿の生徒はひとりもいなかった。学校に吸い込まれたのだろう。

すれ違ったのはエプロンをつけた若い女性と、五歳くらいの小さな子どもたちだった。二十人くらいはいただろうか。口をひん曲げた男の子が上総の顔を見上げて、

「顔、こわーい」

とつぶやいた。病み上がりで顔の輪郭が黒いのだろう。毎朝チェックする鏡の中、顔はくぼんでいた。

——幼稚園児におびえられてどうするっていうんだよ。

幼稚園児たちの騒ぎがだんだんまろやかな響きとなり、最後は消えた。

風がくるっと首筋を擦れて通った。漕いでいたせいか、寒気は感じなかった。

上総は自転車を歩道に留めて、そっと土手から降りた。背の高い叢に膝を抱えて座り込んだ。雑草の中にもぐりこんでいると落ち着く。小学校時代の習慣だった。中学に入ってからはずがにしくなったけれども、久々のくせはやはり体になじんだ。

目の前に流れる川は途中どくんどくと波打った後、真っ直ぐ流れていった。空の青を水面に受けているのに、やはり陰が濃く映っていた。

——こんな性格の曲がった俺が悪いんだ。

貴史も美里も誤解しているのだろうと、上総は思う。

上総のことをいつも

「人の顔色ばかり見て気遣いばかりして」

と。

裏を返すと思いやりがありすぎて裏目に出ている、実は憎めない奴だとみな思ってくれているらしい。だから喧嘩してもいつもかばってくれる。古川こずえも同じだった。青大附属の連中はいろいろあっても上総のことをそのまま受け入れてくれている。

とんでもない勘違いだと大声で叫びたかった。

——こんな汚い性格の奴がいるかよ。わかるか、羽飛、お前は知らないだろ？ 俺が小学校の時どれだけ人を見下してきたか。清坂氏、想像つかないだろ、俺が同じことをもし小学校の頃されてきたら、どんなことがあっても復讐していたにちがいないって。

品山小学出身の児童が青大附属中学に合格したのは、四年ぶりだったという。合格者をめぐる地域差別が存在したのか、単に品山からの受験者が少なかったのかさだかではない。

——俺はあいつらと違うんだ。だから、青大附属に行く。

さすがに口には出さなかったけれども、中学受験で勉強している間、思い上がったことばかり考えていたのを上総は覚えていた。二年前の高慢ちきな自分を絞め殺したくなる時だった。

——最低なのは俺だったってことに、どうしてあの時気付かなかったんだろう。

膝を抱えて、顔を押し付けてズボンに涙を染みこませる。手で目をこすりすぎて痒くなってしまう。

——逃げたから追いかけられただけだよな。

目を閉じると、まぶたの奥に蘇るのは壊れた自転車、土手、倒れて動かないかつての敵。

三月、卒業式用のブレザーを着ていた浜野という名の天敵を、上総は自転車の輪でもって思いっきり突き飛ばした。ぎりぎりのラインで輪が残り、自分だけがサイクリングロードにのっかったままだった。

——ふつうの人だったら、こういう時、すぐに手を差し伸べるよな。

——涙流して感動するかもな。友情かもな。

——なのに俺は何をした？

あの日まとっていった黒いマント風のコートが重たかった。決闘する以上は正装してやろうと決めていた。見下ろした時の、おなかからよじのぼってくる湯気のような感情はなんだったのだろう。見捨てて帰るのも、当然だとあの時は思った。勝利を確信して引き上げた。その後浜野が病院に運び込まれ、事の顛末について一切口に出さず、入学早々松葉杖の生活をするはめになったのを知らずにいた。

「こんなに私、わかろうとしてるのに、どうして逃げるのよ」

「わかってて私、あんたと付き合いたいって言ったんだよ」

「口でちゃんと、謝るか怒るかしてくれないと、届くものも届かないよ」

いきなり貴史に

「ちょっとお前来て、話がある」

と掃除箱前に引きずられた時、何かの予感があった。

たぶん、怒鳴られるだろう。殴られるだろうと思っていた。でも、言い訳をしようとは思わなかった。いつかはこうなるんだ、いつかはこういう形で終りになるんだと、あきらめていた。

美里が割り込んできて、

「あんたのやらかしたこと、すべて知っているんだからね！」

と言い切られた時、上総の中で、すべてが砕けた。

もう、この場所にはいられない。この中にはいられない。

どうして泣かなかったのだろう。一年前の自分だったら、がまんできずにしゃくりあげていたに決まっているのに。言い返すことができるだけの自分がいなかったのだろう。

——結局逃げて逃げて、逃げまくって捕まっただけだよな。

——そうなって当然だよな。

ひとしきり涙を出し尽くすまで流した。声は出さない。部屋か、土手か。誰にも見られていない場所でない限り、涙は流せない。

——杉浦さんは正しいよ。俺がまともな神経を持っていたら、ちゃんと浜野たちの「好意」を受け入れて、感謝できたはずなんだ。

いつぞや、浜野の恋人である杉浦加奈子が上総に語った言葉が今でも、耳に残っている。

「それは立村くんをみんなの仲間に入れようとしてしたことなのよ」

加奈子の言葉と美里の言葉が重なっていくような気がした。風のざわめきに耳を夫妻でかばんを抱いた。

——けど、結局俺は、浜野にされたことを「好意」だなんて思えない。俺が悪いのはわかってる。どうしようもない泣き虫だったって、テレビも見ない、普通の漫画も読んだことない、こんな奴を仲間に入れてやろうとしてくれたのに、俺はどうしても感謝、できない。

杉浦加奈子の言葉で、今まで青大附属で築き上げてきた自分の足場が崩れた。D組の人気者ふたりと仲良くしているし、青大附属評議委員として男子たちからの受けもよくなった。すべて、青大附属にふさわしい人間でありたい、貴史、美里と同じレベルの人間なんだと思い込みたかっただけなのかもしれない。偽者が本物とうまく付き合えるわけないのに。

——俺は、浜野たちを憎む権利なんてない。清坂氏、羽飛に怒る権利なんてないよ。そういう価値俺にはないから。ないんだ。

背中汗が引いたのか、冷たく風が頬にぶつかった。背筋が寒くなる。川はひっかかる場所を何度か通って、最後になだらかに流れていった。

背骨にクラクションの音が響いた。

振り返ると見覚えのある濃緑の自家用車がサイクリングロード沿いに止まっていた。

ちょうど今、狙いをつけて留めたという感じだった。

つややかな車。運転席と目が合った。

——父さん。

ずる休み、ばればれだ。時計を覗くとちょうど九時だった。二十分くらい座り込んでいたのかもしれない。泣いていると時間の感覚がゆるくなる。

運転席の父は、うちわで仰いだ風に手を揺らめかせた。来い、との意か。観念するしかない。上総は立ち上がった。頬が熱かった。たぶんおたふく風邪の患者さんみたくはれあがっているに違いない。

「自転車はトランクだ。お前は後ろの席に乗りなさい」

怒らない人だった。小さい頃からそうだった。母には怒鳴られ平手打ちも数限りなくお見舞いされたけれども、父には叱られた記憶がほとんどない。むしろ間に入ってかばってくれるやさしい父だった。

「あのさ、俺は」

父は首を振ってドアを指差した。

笑っているでも、あきれているでもない。母がよく

「上総はお父さん似なのよねえ」

とため息をつく時、こういう表情を自分もしているのだろう。

後ろの席にもぐりこむと、毛布がざっくりとたたまれて詰まっていた。

「寒かったらくるまってなさい」

車酔いしやすい上総の指定席だった。長時間乗る時はいつも、毛布にくるまって横になっていた。言われた通り、かばんを足下に載せてから身体を毛布で包んだ。芋虫状態で横になった。

「言うの忘れたが、昨日、母さんから電話があった」

「え？」

「伝言だ。学校が辛いなら無理していくな。ただ、五日の日は万難排しても市民会館に来い、とのお言葉だ。以上」

——なんだよ、結局俺をこき使いたいのかよ。

母さんの言いそうなことだ。

「もう学校に休みの電話は入れておいたから、家で寝てなさい。もうひとつ」

父がサイドミラーを首かしげて見た。

「昨日の夕方、菱本先生と珈琲を飲んだ」

——あいつとかよ！

吐き気がこみ上げそうになるのを毛布の端をかんでこらえた。

青大附属中学最大の天敵・二年D組担任菱本先生。

「宿泊研修のことを全部聞かせてもらった。上総、質問したいんだが、いいか」

「わかった」

いつか報告されるとは思っていたが、こんな体調不良の時に。ついてない。

上総は首を竦めたまま、車の天井を見上げた。

「上総、お前、どうしてA組の先生の家直接電話をかけなかったんだ？」
た。

A組の、まもなく退学する予定の女子たちがひっそりと別れの晩餐合宿を行っていた。その中に割り込もうとたくらむ菱本先生に抗議するため、上総はあえて強硬手段を取った。貴史が激怒し、美里が涙し、菱本先生が鉄拳を上総に食らわせた、あの事件だった。

とっくの昔に親には連絡が行っているだろうし、一度は退学も覚悟した。菱本先生の配慮で丸く収まったことになっている。少なくとも上総はあれ以来、菱本先生とぶつかり合っていない。

父の言葉はおだやかな調子で耳に流れた。

「お前のしたことは、冷静に考えてリスクが高い。上総、お前のやり方は成功か失敗かすれすれの方法を取って、たまたま成功しただけだ。もっと確実性のある方法を考えるべきだったな」

——父さん、どういうことだよ。

わからなくなり、さらに言葉が見つからない。

「でも、二回目にしては、上出来だ」

——小学校のことも、知ってるのかよ。誰も、なんも、言わなかったのに。

寒気が走った。車がゆれ、ガソリンの匂いが咽につまる。父が細く運転席脇のガラスを開けてくれた。誰にも話したことのなかった決闘事件。あのことも、このことも、すべて父にはお見通しらしかった。

2 羽飛貴史は思わぬ言葉を跳ね返せない

土曜日、古川こずえと南雲秋世の間の席が空いたままなのを、貴史は目の隅に捕らえていた。机の上には来月分の給食献立、学年便り、学級通信、連絡事項、いろいろプリントが積み上げられているが、帰りには必ず引っ込められている。土曜の帰りも古川こずえが全部、机の中にしまいこんでやっているからだろう。誰も授業中のコピーを取って入れてやったりはしない。恋人たる美里が本来は担当するところなのだろうが、あえて何もしないのがあいつの性格だ。

貴史は美里と目配せして、教室を出た。

台風はとっくの昔にぶあつい雲をかっさらって北上して行ってしまった。代わりに汗が出そうな程の暖かさが戻り、ジャケットは脱いだまま体育着バックに詰め込んだままだった。。

美里は廊下で唇を結んだまま貴史を待っていた。かばんを軽く振りながら、

「あんたも呼び出されたんだよね」

「同じく。まったくなあ」

理由は明白だった。なにせ火曜日の朝に立村を吊るし上げたのは、クラス全員が知っている。

なぜ誰も騒ぎ立てなかったのか、なぜ南雲が割って入らなかったのか、貴史にも理解できない空気が流れていたのは知っている。たぶん、立村が何も言い返さなかったからだろう。四時間目までは何事もなく時が流れ、給食のパンと牛乳だけをかばんに詰め込んだ立村が教室を出て行くのを、貴史は黙って見送っていた。南雲にいちゃもんつけられるかと身構えたけれども、あいつも無視したままだった。つまり普段どおりってことだ。

「やっぱり、あのことかな」

「まあな」

「でもさ、貴史。私もあんたも、間違っただこと、言ってないよね」

貴史は美里の瞳を覗き込んだ。どこまで本気なのかわからない。口ではそう言っても、揺れている語尾ひとつで裏返しの気持ちが読み取れる。

「古川にはどやされたんだろ」

「まあね」

短く言葉を切った。廊下では生活委員会の週番連中が反省会を行っている。こそこそ窓際に張り付いて通り抜けた。

「貴史、あのさ」

言葉が途切れ途切れだった。頷いて待った。

「私、いじめてるって思われてるのかな。立村くんに」

何をだよ、と聞くのはやめた。美里の言葉だから、意味がすぐに通るから。わかったことを伝えたくて、上向き加減に頷いた。

「俺も同じことやってるんだ。おあいこだ」

菱本先生はふたりを見つめるなり、手招きした。今日は職員室での尋問らしい。

「腹も空いてるだろ。簡単に聞きたいんだ」

後ろからパイプ椅子を持ち出すよう指示して、座らせた。

「だいたい言いたいことわかってるって。先生」

貴史得意の先制攻撃だ。弱いパンチだけど、勝手に割り込んでほしくない意味をこめて。

菱本先生も言葉を飲み込んで茶色い茶をすすった。

「立村のことだろ。みんな聞いているだろ。他の奴の告げ口かなんかで」

——たぶん、南雲あたりからな。

個人名はあえて出さずにおいた。菱本先生は膝に両手を置いた後、深くため息をついた。

「お前ら、親友だって言ってたもんなあ」

「俺はな。美里は彼女だけど」

瞬時に隣りから強烈なにらみの視線が飛んだ。後で怒られるのは覚悟だ。

「そんなんじゃないです！」

「まあまあ、わかってるわかってる。お前らふたりが、立村のことを心配しているってことはよくわかった。だから今は何も言わないでいるんだぞ。だがな、クラスの連中はそう思っていないのも事実なんだ。その辺を、今日は手短かに聞きたいんだ」

「手短にこだわるよなあ、先生。もしかして今日デートかよ」

「ちゃかすなよ、まったく」

どうやら凶星らしい。独身、二十八歳。男性。彼女のひとりくらいはいるだろう。

菱本先生の後ろで、他の生徒たちがそれぞれうろついていた。貴史と美里が並んでいるのを黙ってみているもの、何話しているか知りたそうな目で眺めているもの。いろいろいる。勝手にしろっていうんだ。悪いことをしているわけではないのだと、貴史はにらみ返した。中に数人、立村と仲のいい連中がいた。耳をそばだてているのかもしれない。

「立村は決してずる休みしているわけではないんだ。火曜からずっとひどい風邪を引いて寝込んでいると、立村のお父さんから連絡があった」

——おめでたい奴だぜ、先生。

美里も同じ感想なのだろう。目配せしてきた。立村の場合、精神的に壊れるとまず、身体に症状が出ることを菱本先生は気付かないのだろう。

「だが、火曜の朝になにか、お互いになにかどんぱちやかしたらしいという報告も入っているんだが、それについては本当なのかな、羽飛、清坂」

真面目だが、鋭く突っ込もうとする様子ではない。

——大丈夫、交わせるぜ。

貴史はあっさり答えた。

「いつかは言わねばなんねえなあって思ってたことがあってさ。けど、まあ、正直なところ言い過ぎたって反省はしてるんだ。先生。やっぱり人生経験十四年っていうのは、いろいろあるんだよなあ」

「だから、人生経験二十九歳の俺に相談しろって言ったんだ。まったく、羽飛もぶきっちゃだな」

あきれたように咽からため息を吐き出して、菱本先生は美里に視線を向けた。

「清坂、お前もそうとう、溜まってたらしいなあ」

美里は答えなかった。そりゃそうだろう。自分の彼氏にあそこまで言いたい放題ぶつけたところを、あらためて省みるっていうのはなかなかできることじゃない。

「先生、美里に言うのは酷だぜ。こいつ、あとで古川にこってりしぼられたらしいからなあ」

舌ににやけた言葉を載せてみた。美里が答えなくてもすむようにしたかった。別にかばったわけじゃない。かえってこいつの言葉で話が泥沼になるのを避けたかっただけだった。

「古川かあ、なるほどなあ」

「立村と古川は血の繋がっていない、あねおとうと、って奴だからさあ」

うまくいった。菱本先生が声を上げて笑い出した。笑いを取れば大抵は大丈夫だ。美里が虫歯の痛みをこらえたような顔でべそかいているのを、ちらちら見ながら貴史は続けた。

「でさ、先生。立村の様子はどうなんだよ。やっぱりああいうことあってから気になってしかたないんだ」

「だいぶよくなっちはいるみたいだぞ。生死の境をさまよっているわけではなさそうだから安心しろ。ただな、羽飛」

立村だったら

「なんかあると菱本先生のように『だがな、立村』って続けるのはやめてほしいよな」と腹立たしげにつぶやく口癖だ。

貴史だったらおとなしく聞き流す。それが一番だ。ふんふんと続けた。

「相手によっては時間がかかるのも忘れるなよ。お前たちが本当に立村のことを心配して言っているのは俺もよくわかる。でなかったら本当のことは言えないよな。親友だからこそ言えることもあると思うんだ。ただ、かならずしも相手がそれを上手に受け止めてくれるとは限らないことも忘れるなよ。もし、まだこじれてしまうようだったら、お前らふたりだけで悩むのはやめろよ。さっきも羽飛が言った通り、人生経験十四年のお前らと、かける2の経験をもつ俺とだったら、まだまだ修羅場の数は違うんだから。ばかにできないぞ、この差はな」

にやっと笑いかけてきた。

——修羅場の数か。先生。悪いけど俺も美里も、その倍修羅場を小学校で経験してるんだけどなあ。

腹がすいて死にそうなのか、それとも彼女が待っているのか、両方なのか。菱本先生はすぐに立ち上がった。

「じゃあ、今日は帰っていいぞ。気をつけて帰るんだぞ」

「貴重なご意見、ありがとうございます！」

結局、美里はほとんど口を利かないままだった。パイプ椅子を貴史の分もたたんで壁に立てかけるのを貴史はちらっと見て、職員室を出た。

「貴史、明日のことなんだけどさ」

ふたりきりだと重い空気が流れる。切り替えたかったのだろう。

「ああ、そうだなあ。結局何を持っていくんだ？ 藤野の喜びそうなものか？」

「うん、ゼリーみたいなするんと飲み込めるお菓子がいいんじゃないかって、お母さんに言われたの」

美里もこの二週間は災難だろう。立村とのいさかいもさることながら、藤野詩子とのあまり楽しくない再会もあったりして、相当神経が疲れているはずだ。

「楽屋、行った方がいいよね」

「そりゃあ、招待してくれてありがとくらいはなあ」

「でも、あまり来てほしくない雰囲気だったんだ」

言葉を濁した。そりゃまあ、そうだろう。美里と藤野との関係を考えるとわからなくもない。

「約束した以上は行かねばなんないだろう」

「でね、貴史」

お互いの言葉の裏を、ようやく形にした。

「立村くん、来るかなあ」

「だよな」

廊下で三年の男子たちと話をしている奴がいた。南雲だった。おそらく規律委員会の関係なのかもしれない。真面目な顔をした連中だった。貴史とはあまりかかわりたくないらしく、ふいっと向こうを向いていた。が、南雲だけがじいっとこちらを見つめ、返事をしろとばかりに視線を投げている。

売られたものは、喧嘩でなくても買うのが羽飛貴史の鉄則だ。

「なんだよ、文句あるのか？」

三年の先輩たちを背に、南雲はつかつかと貴史と美里に近づいてきた。やはり、話したいことでもあったのだろう。貴史が思うに、菱本先生へ告げ口をしたのは南雲ではないかと予想していた。規律委員としての報告義務とでもいうのか。ちゃんと注意をしたのにも関わらず「いじめ」に近い行為をしていると、つるそうと思ったのだろう。奴なら考えられるだろう。

「別に」

美里の方をちらっと見た。視線の意味が読み取れない。美里もきょとんとした目で見返している。女子にとって南雲のようなタイプは、決して不愉快な奴ではないらしい。こういう奴の本性を知って奈良岡も新しい彼氏をこしらえようとしたのだろう。よい傾向だ。

「言いたいことあれば俺に直接言えよ。お前だろ。立村をいじめてるとかなんとかって告げ口した奴は。別にそれはいいぜ。俺が誤解されるようなことを言ったのは確かだからな。でもなあ」

言うべきことはここできっちり片をつけるのも貴史流だ。

それが、といたげに南雲は黙って聞いていた。

「なあなあで付き合い続けているお前なんかとは違うんだ。言いたいことをぶつけ合うことのどこが、いじめだっていうんだ？」

「別に、って言ってるだろ」

何か言いたそうなのに口に出さない冷たい空気。美里も危険を察知したのか、ずっと貴史の側に寄り添ってきた。初めて南雲の表情に緩んだものが流れた。

「俺はただ、いつか来る時がきたんだな、って思っただけだよ」

耳もとに小さくささやき声を残し、去った。美里には聞こえないよう気遣ったようすだった。

「本当にくつつくべきは羽飛とお隣さんであって、りっちゃんではないんだってことだな。親友面してひでえ話だ」

「南雲てめえ！」

——あいつ、ぶん殴ってやる！

逃げ足の速い奴だ。南雲はすぐに三年連中と混じり、背を向けた。これで二回目だ。手を出して一発殴りつきたいと思っても、何も言えない自分が取り残される。美里が側で目をしばたいていた。

「貴史、南雲くん何言ったのよ」

「別に、だけだ」

美里とは帰り道、明日の日舞おさらい会についての待ち合わせについて話しながら帰った。

あえて立村のことも、南雲のことも話さなかった。

——勘違いするのもいいかげんにしろよ。美里と俺とがどういう付き合いなのか、外見でしか見てねえくせに。馬鹿じゃねえの、南雲。

3 清坂美里は信頼できるアドバイスを受け入れられるかもしれない

三日間、真夜中に引き出しを開けて写真を見つめているなんて、きっと立村くんは思ってもいないのだろう。真面目にノートを取って、いつコピーしても大丈夫なようにしているなんて、想像もしていないのだろう。本当に熱を出しているのだったら、ひとりで何を考えているのだろう。

——怒ってよ。文句言ってよ。でないと、わかんないよ。

いつも、泣き言を訴える先はこずえとなる。火曜以降どうもこずえとは話がしづらかった。向こうはそれほど気にしていないようすで、「おはよ、なあにふけた顔してるのよねえ。もしかしてあの日？」とつつこみにくるけれども。いつも通り触れないようにして話をしているが、このままでは落ち着かない。いやだ。思い切ってダイヤルを回した。

「なあによ、もう。言っちゃったことは後悔したって始まらないよ。美里も言いたいことたまっていたんだろうし、それはそれで仕方ないよ。けどね、あれはちょっとまずいと思ったから、私はやめさせたってだけ。美里や羽飛のことを嫌いになったわけじゃないんだからさ。そこんところは忘れないでよね。特に羽飛には」

電話の向こうから聞こえるのはさっぱりした口調。こずえはなんでこんなに落ち着いているのだろう。こずえは毎日エッチねたをかましているだけに見えながら実は鋭い。だから立村くんも毎朝「朝の漫才」に付き合っているのだろう。

「美里、かなり後悔してるんでしょ。言い過ぎたって」

「けど、私間違ったこと言ってないもん！」

電話の近くには誰もいなかった。だから泣きながら言える。

「わかってるよ。あんたが立村に言いたいこと何にも言ってくれなかったってこと気にしてたって。でもね、あいつの性格一年半も付き合えばわかるでしょ。本質的にはガキだって。ガキはね、飽きずに何度も繰り返して言わないとわかってもらえないんだって。うちの弟とほとんど扱い方、同じ」

「私、弟なんていないからわかんないもん。うちの妹だってそんなことしないし」

しばらく美里はしゃくりあげながらしゃべりつづけた。

「貴史だって、あの宿泊研修の時に打ち明けてもらえなかったことが悔しかったって言ってたの。私だってそうだよ。別に彼女だから言わなくちゃいけないなんてないけど、でも、もし私のこと信じてくれてたら言ってくれるもんだよね。信じてないんだよ立村くんは」

「そうだね、美里の言いたいことはわかるよ、けどさ」

こずえが言いよどんだ。

「これは私の想像なんだけどね。立村って美里とか羽飛に対してものすごく、気を遣ってるように見えるんだよ」

「わかってる、こずえに言われなくたって」

「理由なんだけど、言いづらいなあ。これって」

そのくせ言いたがっているんだろう。わかるわかる。こずえの口調にはどこか、

「言わせないと後悔するわよ、さあ、聞く？」

とすごむ匂いが漂っている。

「立村ってさあ、美里と羽飛をセットで好きなんじゃないのかなあ」

飲み物飲んでなくてよかった。嘔いてしまいそうだった。

「ちょっと待ってよ。なんで貴史とセットでって」

「つまりさ、私が思うに」

こずえの言葉は、美里の想像をはるかに超えていた。

「ほら、美里気付いてたと思うけど、美里と羽飛がくっついててもかまわないって立村が言ったこと。あいつの馬鹿さ加減にはあきれ果てるけれども、私も後で考えてみて納得したんだ。あいつうちの六年の弟と精神構造おんなじだから、まだ女子のことを好きだなんて思ったことないんじゃないかって。ところがさ、美里に告白されたじゃない。人の顔色ばかりうかがう立村のことよ、まずどうすると思う？ 断ったら美里と気まずくなるかもしれない。美里と気まずくなったら今度は羽飛ともそうなる可能性大だよ。そうなったら、友だち二人もなくしてしまうわけよ。あいつのことだから悩んだと思うよ。どうしたら美里や羽飛と友だちでいられるかどうか悩みに悩んで、結局付き合うことに決めたんじゃないかな」

「こずえ、どうしてそこまで想像できるの？」

「うちの弟に聞いたから。あいつに、もし自分がそうだったらって、聞いてみたら、そういう答えが出てきたってわけ」

「立村くんとこずえの弟が必ずしもおんなじってことないでしょ！」

こずえは笑っている。自信あるんだろう。弟くんを通した答えに。

「でもさ、かなりの確率で可能性が高いと思うよ。美里のことも嫌いじゃないけど、同じくらい羽飛のことも好きだし、ずっと友だちでいられるんだったら大抵のことはがまんするよ。うちの弟だったらね。私だったら違うけど」

「けどそういうのって、付き合う条件と違うよ」

「好きだってことでないとね、ってことよね。でもしょうがないじゃない。そういう相手が好きなんだからさ。それに立村だってやっとなんか自分が悪いってことに気付いているかもよ。私は断言しちゃうけど、立村が三行半を突きつけることはまずない。月曜に学校に来て、『ごめん、俺が悪かった』って頭を下げるよ。いつものお約束」

もうひとつ、美里は疑問だったことを尋ねた。

「こずえ、どうしてクラスの連中、誰も私たちにつっこみ入れなかったのかな」

「気付かなかったの。あれはね、規律委員様の南雲が男子連中に緘口令だしたのよ。いつものことじゃない。立村が南雲と彰子ちゃんのらぶらぶ騒動の時に指示出したのと同じだって」

「でも、なんか気になるよ。誰も反応しなかったみたいだけど」

「南雲は羽飛と犬猿の仲だからねえ。南雲も悪い奴じゃないんだけど、水と油って奴だからさ。でも立村とは仲良しってというのがなんとも言えないよね」

しばらくこずえと、立村くん、貴史のことについて語りつづけた。本当のことを言えばこずえだって気にはしていたのだろう。いくら貴史が間違っていると思っても、好きな気持ちは変わらないのだから、嫌われてもしかたないと悩んでいたのだろう。

「あ、こずえ、貴史ね、言ってたよ。『古川にそう言われても、しかたねえのかな』って」

「言ってた？」

微妙に喜びの波動が伝わってきた。受話器の声がはじけていた。

「やっぱりね、あいつ、間違いを素直に受け入れない奴じゃないもんね。さすが、私の惚れた男よ」

こずえと二時間しゃべりつづけた後電話を切った。

——もし詩子ちゃんにこういうことを言ってたらどういう返事帰って来たかな。

想像はついた。無条件で美里の言い分を認めてくれただろう。ためらうことなく、

「立村くんと別れなさいよ。美里は間違っていないんだから」

と主張してくれただろう。

詩子ちゃんだったらきっと、美里の味方でいてくれただろう。

——私、立村くんに文句言ってる時、止められなかったもん。立村くんが青ざめてじっと私の顔を見詰めている時、気持ちよすぎたんだよ。私してたことって、そうだよな。

こずえの言葉が正しいと、今の美里は思えた。

「羽飛、あんたやってること、言っちゃなんだけどリンチだよ。もしうちの弟が、友だちに似たようなことされてたら、羽飛だって許さないよ」

あの時はかっとなったけれど、四日経った今は素直に受け入れられる。

——そうだよな、私、立村くんを追い詰めた浜野って奴と同じこと、してたんだよな。

美里は引き出しの写真を取り出し。両手で拝むようにさすった。

1 立村上総の朝から昼まで

来週からくずれらしい天気も、日曜の今日はさっぱりと晴れていた。

「上総、ほら、さっさと乗りなさいよ」

母が朝八時半に迎えに現われた。自分でバスに乗っていくつもりだったのだけど、

「あんたに来る途中で倒れられたら段取りおかしくなっちゃうでしょ。今回だけ特別よ。全く、軟弱なんだから」

「手伝わせるんだったらそのくらいしてくれたっていいだろ。交通費どうせ出ないんだし」

「親に向かって言う言葉なの？ 全くあんたって子は」

大抵母は気が立っている。催し物が控えている日はなおさらだ。茶会の時も、華展の時も、いつも上総がパシリとしてひっぱりだされる時に、機嫌のいい日はまずない。

「どうせ制服で行けばいいだろ」

「そんなわけないでしょうが。持ってないわけじゃないんだから、黒のいいスーツ着ていきなさいよ。まさか、つんつるてんになったわけでもないでしょ。あんた背、伸びてないんだから」

——人の気にしてることをよく言うよな。

言われた通り、晴れの日用の黒いスーツに着替え、ちゃんとネクタイも締めた。そこでもまた母からチェックが入った。

「だから上総、なんで喪服みたいな格好にするのよ。ネクタイは少し遊んでいいのよ。あ、和也くん、この子に合いそうなのはない？ ほら、少し緑が入ったチェックの持っていたでしょ。あれ貸して」

抵抗することなくわざわざ自分から持ってくる父が情けない。目と目が合った。「わが身を思えばさからうな」と言いたいのだろう。過去の経験からして。受け取って自分で締め直した。さすがに母は、「締めてくれる」ことはない。その辺だけははっきりしていた。

「それじゃあ、上総を借りていくわ。また後でね」

父は何も言わずに頷いて、見送ってくれた。

下ろしたてのワイシャツとスーツ、ほんのりと樟腦の匂いが残ったネクタイ。首筋から嗅ぎなれない匂いがよじ登ってくる。すぐに車の窓を開けた。助手席で外を眺めながら上総は母のお言葉を聞き流していた。

「今回は小道具大道具みな、会館の人に任せてるって話だからそれほど心配してないのよ。まあその分お金かかるけどね。とにかくあんたは私の部屋で待機してもらえればいいのよ。衣装とか化粧とか順番を呼びに行ってもらったり、花束届いたら運んだり、楽屋にたどり着けない人がいたら連れて行ってあげたりとかね」

「私の部屋って、母さん専用の部屋あるのかよ」

「当たり前でしょ。せっかくだからって、今回無理を言って」

——横暴極まりないよな。この人は。

たぶん楽屋の案内が中心なのだ、とは見当がついた。何度か手伝いをしているのでその辺のパターンはつかめている。女性の手伝いの方もいるのだろうし、楽屋内でうろちょろするのは、やはり気が引けるということもある。また、母の顔で「ごあいさつ」にいらっしゃる方も想像以上に多いのだろう。

たぶんそのあたりをさばけばいいってことだ。

——ほとんど外に出なくていいってことか。

「ところで上総、あんた風邪良くなったの？」

初めて母は、上総を気遣うような言葉をもらした。

「もう大丈夫。今日のために学校四日間休んだから」

「そうね、今日倒れられたらしゃれにならないわ。学校なんてしょせん、いくらでも代えられるけれど、舞台はそうじゃないからね」

——簡単に変更できるわけないだろう？ この人何考えてるんだ？

少しむかついた。返事をせず、遠めで青く透き通っていく山々を眺めていた。

「これだけは言っとくわ」

信号で車を止めて、マニキュアの光った爪でつんつんと肩をつついてきた。当然無視だ。

「上総、いくらでも学校なんて代えられるのよ。逃げたかったら逃げ出しな。でも、死んだら終りだってことは忘れるんじゃないよ」

「わかってるよ、うるさいな」

自分の両親が友だちの親と異なる学校観を持っているのは小さい頃から知っていた。無理に学校に行かなくてもいい。どうしても耐えられなかったら学校を休んでもいい。ただし勉強は家で続けること。それが条件だった。大抵の家庭では通用しない論理らしく「どんなことがあっても学校に行け！」と怒鳴られるらしい。

——でも、うちの親にそう言われると休みたくなくなるんだよな。よくわからないけど。うちで勉強するよりもそっちの方が楽だとか思ってさ。

「まあ、最悪の場合だけど」

母はアクセルを踏みながらつぶやいた。

「住所登録だけを私のアパートにして、他の公立中学に転校ということもできるから、いざとなったら考えときな」

——品山の学校に行かなくても、いいってことか。

情けないことだけど、すうっと肩から力が抜けた。断固として窓を向いた。今の完全に溶けきった自分の顔を、母にだけは見られたくなかった。青大附中を退学するという最悪の場合でも、本品山中学に編入することだけはないと母は言いたかったらしかった。

青潟市民会館の楽屋口に到着した。すでに人がだいぶ揃っているらしい。車を駐車場につけた後、紙袋を四つ上総に持たせて入って行った。

「おはようございます。本日はどうぞ宜しくお願いいたします。うちの師匠、まだいらしてませんか？」

受け付けの方に尋ねるとまだらしい。母はすばやくスリッパをふたりぶんすのこ脇の籠からひっぱりだした。

「それじゃ、まずは掃除ね。上総、ほうきとちりとり、あとバケツ持ってきて。私はお茶の準備するから」

返事をしたくないので上総も受け付けの人に、掃除用具の場所を尋ねすぐに労働体制に入った。自分を単なる働くマシンとして位置付けると、母に何を言われてもめげずにすむ。めげないふりができる。

畳二十畳くらいの大部屋が出演者の楽屋、四畳半の部屋を四部屋とってあってそこが、会主、および他の先生たち、最後に水組み場隣の小さな部屋がありそこだけが母の場所となるらしい。部屋といえるところではない。ただお茶くみの方がちょっとだけ腰を下ろす場所という感じみたいだった。実際問題、上総と母が身を寄せ合って正座する程度の広さしかない。荷物をざくっと置いて軽く部屋の掃除を行った後、母のいい付け通りに動いた。上総が昨夜のうちに書いておいた出演者案内用張り紙をそれぞれの部屋前に貼り付けること、お茶菓子を籠に分配して部屋に置いておくこと。お弁当到着後の分配についてなどなど。かなり早口で機嫌悪げだが、出す指示そのものはわかりやすい。

——本条先輩並みだな。

比較するのが本条先輩というところだけは、認めてほしいと思う。

しくじって落ち込む暇がないので、楽だった。うっかり空いた時間ができる、忘れたいことを思い出してしまうから。

——羽飛、清坂氏たちくるんだろうな。

——まあいいか。どうせ、俺は楽屋にかんづめだろうし。

——けど、顔を合わせた時は、もう、終わりだろうな。

少しずつ現われる出演者のみなさまたちに、「おはようございます。宜しくお願いします」と一つ覚えの言葉を繰り返す。みな華やいだ着物や、裾にだけ柄の入った着物やら、背中に紋の入った着物やら、まとめて現われた。みな共通しているのは、和装ケースをはじめとして手に荷物がわんさと抱えられていることだろう。ほとんどの場合蒔物だろう。

気になった一人を探した。やはり、一番後から現われた。

「ほら、詩子、あんたがとろとろしてるから！」

「そんなの私のせいじゃないんだもの」

「今日は大変なんだから、機嫌よくしなさいよ」

相変わらず言い合っている親子の声が聞こえた。若草色の地に銀色の模様が裾と胸元に入った和服を纏った少女が、いた。帯は銀色の、遠くから見てもきらきら光る素材のもの。背中に亀が張り付いたような感じで結ばれていた。頭のとっぺんにくるくるとまきつけられ、鹿の子模様のりぼんで覆われていた。口紅だけが真っ赤だった。尖らせているのがもったいない、と上総は思

った。

会主の師匠が現われ、パシリその一たる上総は大部屋に走った。もちろん母の命令だ。

「先生がいっちゃいましたので、みなさん集まってください」

みなまだ、荷物を受け取ったりばたばたしたりと落ち着かない様子だった。ふくさに封筒を包んでみなぞろぞろと出て行く。中には着物を脱ごうとしている人もいた。

上総は完全にその点部外者なので、出演者が集まっている間はおとなしく母の部屋にこもっていた。母の話からすると、あとは言われるとおりにき使われればそれでいいらしいし、お弁当ももらえるらしい。自分の頭で不必要に考えなくてもいい手伝いらしかった。そこんところが評議委員会とは異なる。楽なところだった。

「あとは衣装さん、地方さん、顔師さん、大道具小道具さんたちにお弁当を運んでよ。ほら、今届いたから」

いつものことである。返事をしないで上総は立ち上がった。この辺はもうお手の物だ。人数分をメモした後、赤いじゅうたんの上を走った。頭の中によけいな隙間を作りたくなかった。まだ開演まで時間がある。仕事がたくさんあって、貴史や美里のことを考えなくてもいいようにしてほしいかった。

楽屋の廊下を走っているとだんだん大部屋の人々が入り激しくなっていた。どうやら一斉に浴衣へのお着替えが始まったらしかった。ふつう女子更衣室なんかを覗き込もうもんなら半殺しにされるのは目に見えているけれども、なぜかここでは違和感がなかった。男の自分が用事あってひょこひょこ出入りしても、誰も気にしていない様子だった。まあ上総からしても、白いドレス姿でうろうろしている人々の群れ、としか映らないので、グラビア写真集を見た時のような心臓の鼓動は感じない。肌襦袢とすそよけ、と呼ばれる和装下着でもって構成はされているらしい。細長く畳まれた浴衣を引っ張り出し、簡単な帯で腰を結わえていた。最後に桃色、橙色、その他いろいろなうわっぱりを用意して上から羽織っていた。だいぶ落ち着いたらしくみなお茶をすすっていた。

どうしても目が行くのが、一番奥でぶっきらぼうに膝を抱えている藤野詩子の姿だった。相変わらずすねているのだろう。上総も正直なところ、ごもつともなとこだと思っている。下ざらいで母と一戦交わしたのも関係しているのだろうが、あれ以来ずっと詩子は上総をにらみつけてくる。どうしてかわからないけれども、怖いのでうつむいて目を合わせないようにしている。母と繋がりのある人々とは不要な会話を交わさないようにしておくのが、わが身を守る方法だ。

上総としては決して彼女が嫌いなわけではない。同じクラスだったら、たぶん近寄らないタイプだろうと思うけれども、あいさつはするだろう。清坂美里の友だちらしいとも聞く。たぶん、それなりに会話を交わしたりはできただろう。あくまでも、学校では。

でも、いったん日本舞踊というフィルターがかかると話は変わってくる。上総にとって、母の繋がりで垣間見る「日本伝統芸能」の世界は、やはり嫌いではないし、むしろ面白いと思う。三味線や鼓の響きも、洋楽のロック系のものよりはなじみいい。あまり人には言えないけれども、

はるかに心が楽な音楽の系統だ。しかし、一度その幕がかかると、ふつうに会話できる人々がどんどん遠くなっていく。決して先まで進んではいけない、という大きなたて看板が目の前に見えるような気がする。

その典型が藤野詩子だった。

たぶん同じ年だろう。でも、お互いに会話を交わすことを頑なに拒んでいる。できればこのまま一切口を利きたくない。嫌いだからではなくて、この空気の中では繋がりを最低限のものにしておきたい。それが関係を保っていく唯一の方法ではないだろうか。他の日本舞踊関係の女性に対してもそうだけれども、特に、藤野詩子には強く感じていた。

ただ、

——あの衣装は、辛いだろうな。

下ざらいでちらっと見た清元「玉兔」の衣装だが、袖なしのちゃんちゃんこみたいなものを羽織り、膝くらいの着物をきっちり纏い、頭には耳鉢巻をつける。兔の耳がついている。鬘は時代劇のちょんまげを小さめに結ったような感じだった。下ざらいだから化粧はしていない。なおさら違和感があったのかもしれない。

あとで母に聞いたところ、本来は金太郎がしているようなひし形の「腹掛け」に、「肉じぼん」と呼ばれる下着のようなものを着るのだそうだ。足首のないタイツのようなものを履いて踊るのが正式なのだが、

「やはり女の子だからね。着物にしたのよ」

とのことだった。自分が藤野詩子の立場だったら卒倒するだろう。見る分には面白いと素直に思うけれども、ただもう少し。

——他の子が、振袖のかわいらしいのを踊っているんだからさ、もう少し演目なんかならなかったのかな。その辺の事情よくわからないけどさ。

上総はぼんやりと、藤野詩子のむくれつつらを眺めながら思った。

「そろそろ本番ですよ、みんな、髪の手解いて顔洗ってきて。羽二重してちょうだい。ほら、化粧落としておいてよ。早くしないとあなた順番先でしょ。ほら、詩子ちゃんも顔を洗ってらっしゃい」

順番としては「玉兔」はかなり前だった。お名取さんたちが入門の順番からか後ろに回っている。プログラムの構成らしいが、その辺もよくわからない。

「わかりました！」

返事をしたのはお母さんだ。かなり、娘の初舞台とあって血が頭に昇っているらしかった。娘を叱り、他の人にはぺこぺこしつつも、やはり上総の母に対しては心穏やかならないものがあったのだろう。

——あの人は敵作るからなあ。

楽屋にたどり着くのに迷いつづけるお客さんたちを案内したりしているうちに時間はどんどん流れていった。「浅妻船」「お染久松」「藤娘」「屋敷娘」それぞれの扮装が出来上がっていく。まだ鬘を被っていないので頭だけ紫色の布で隠したお坊さんに見えた。廊下をうろうろしつつ

、椅子に座っている姿を眺めているだけでも笑えた。

十一時開演で、序は師匠の「北州」から始まった。らしい。順番としてはあと、四番ほどで藤野詩子の出番「玉兎」だ。十二時過ぎだろう。

手の空いている時に食事を終わらせて起きたかった。

「母さん、どうせこれからもっと混むだろうから、俺も弁当食べていいかな」

「そうね。まあ落ち着いてきたし、楽屋にあまり男がうろつくのもご機嫌よくない子いるらしいしね」

「なんだよ、その言い方さ」

自分の方が気にしていたのだが、母は無視していたのだ。いきなり文句を言われても困る。

「いやね、あんたなんかを男だと思ってる子いないと思ったんだけどね。やはりお年頃の子がいるといろいろ面倒よ」

——やっぱりな。

出所はたぶん藤野詩子あたりだろう。それとも大学生のお姉さんたちだろうか。いつもながら向けられた視線を思い返して上総はため息をついた。誰がときめくかって。

「じゃあ悪いんだけどあんた、ここで荷物見ていてくれる？ 新名取の子の面倒見てこなくちゃいけないし、しばらくは他の子も手伝ってくれるから。どうせあんたにはこれから荷物運びとかなんとかいろいろあるからね。そうそう、私宛てになんか届いたら。まあそういうことはないと思うけどね。預かっていてくれる？」

すでに部屋には、和楽器と洋楽器のコラポレーション関係で繋がりのある方から、大きな蘭の鉢植えが届いていた。ちゃんと部屋に飾られている。

「わかった。どうせ上手の方にいるんだろ。用があったら呼びに行く」

お盆にかつサンドのつつみを置いてくれた。

戸口には「時辻」と、母の苗字が張り出されていた。「立村」でないところがみそだ。荷物運びも大変だろう。帰り、この蘭の花、どうするつもりなんだろう。花に話し掛けてみた。

「なんか、俺って馬鹿だよな」

あっという間に弁当を平らげた後、誰かがふすまの前に立っているようなけはいを感じた。よくあることだ。母のお客さんだろうか。お祝い持ってきたりしたのだろうか。

「すみません、母は今、上手の方に」

言いかけて、息を呑んだ。ふすまを滑らせた手が止まった。

「……羽飛」

制服姿の貴史が無言で立っていた。そこまでが上総の記憶だった。あとは覚えていない。一発、頬に張り手が飛んできた。倒れる瞬間にすばやくふすまを閉じたので、たぶん誰にも気付かれなかっただろう。もちろん貴史も敷居をまたいで部屋に入ってきている。ふたりきりで、初めて対峙した時に上総は覚悟を決めた。

——こうなって当然なんだ。

2 羽飛貴史の昼下がり

開場三十分前には到着していた方がいい。そう親たちにも言われた。正式な格好をするよりも、制服で出かけた方が一番無難だという姉の意見ももっともだ。やたらと襟のきついつなワイシャツや、丈の短くなった小学校時代のスーツとか、そんなものよりも楽な方がいい。美里には、「あんた、なんで制服なんかでいくのさ。全く、あんたってば洒落っ気ないんだもんね」

とあきれられた。美里の格好はというと、予告どおりひらひらしたうすねずみ色のワンピースだ。ちゃんと胸に白い花までつけてきた。そこまで気合入れてめかしこむ必要あるのか、と貴史の方が尋ねたかった。もっとも美里のことを良く知っている貴史としては、下手なことを口走ったら自分の身が危ないのでよけいなことは言わなかった。

ふたりともあえて、口には出さない。

あの場所で、誰に会うのかも。

プログラムを見ると、演目の四番目に藤野詩子の「玉兔」が載っている。日本舞踊については全くわからないが、やたらと漢字ひらがなの羅列という印象が強い。どうせ、途中で何か食ってロビーで寝てればいいだろう。美里は美里なりに藤野のところへ行く用事があるかもしれないが。

到着して、楽屋に向かうまではそう思っていた。

「じゃあさあ、貴史、先に詩子ちゃんところに行ってくるね。あんた、その辺にいるよね。まだ始まってないしね」

めかしこんだ美里は、手鏡らしきものを取り出しいろいろ表情をチェックし始めた。

「顔しつこく見たってよくなるわけでもねえのに」

「うるさいわね。あんたの方こそもう少しまともな格好しなよ。ほんっとあんたってば」

ぴしゃんと叩かれた。痛くはない。

「じゃあ、俺もその辺でジュース飲んでるぜ。しかしこの辺って暑苦しいよなあ」

チケットと引き換えにもらった「志遠流おさらい会」のプログラムを開いてすぐに閉じた。

ロビーにたむろする集団はみな、着物を纏った女性ばかり。年齢層は広い。帯を平たくたたんで背中にしよった人もいれば、金銀の布でこしらえた亀みみたいなものを背中にくっつけたきれいな人もいる。ただみな、髪の毛を上にあげているので顔の分別がつかない。みな同じ人に見える。またやたらと頭を下げて「本日はおめでとうございます」と繰り返しているのが謎だった。手には複数個の紙手提げをぶら下げ走り回る人もいた。いつだったか鈴蘭優ちゃんのコンサートで来たことのあるロビーとは雰囲気は全く異なっていた。

——あんときもなあ。楽屋の入り方っていい方法ないかって話してたんだよなあ。

——楽屋？

キーワードがぴたっとくっついたような気がする。

同じ年代の連中がいらないかどうかをぐるっと見回し確認した。

——もしかしたら。

美里が向かった先も、楽屋のはずだった。美里の推理が当たっているとするならば、そこにはもうひとり美里の会わねばならない奴がいるはずだ。四日間姿をくらましている相手がいるはずだ。

——立村、いるのか？

頭の中にある鍵穴に、ぐいと入った鍵。

行動するスイッチが入った。

——楽屋だな。言い訳すればいいか。美里が戻ってこないからついてきたってことにするか。

貴史は制服のネクタイを結び直した。襟のところだけを指でなぞり、はみだしてないか確かめた。完璧だ。学校では絶対にしない、完璧な違反なしの格好だ。「非常口」のランプがついた目立たない入り口を探し、着物姿の女性群にくっついていった。やはり楽屋へ向かうのだろう。その辺貴史は嗅覚がするどかった。

「靴を脱いでください」と張り紙されているけれども、前の女性軍団は無視してぞうりのままあがっていった。当然貴史も真似をした。幅一メートルくらいはある通路、ちょうど舞台の袖が見えた。横にはスポットライトやちゃらちゃらした花飾りとか、天井からぶら下がっていた。中にはすでに、鬘を被った時代劇の女優さんっぽい格好の人が椅子に腰掛けていた。椅子って言うのがなんだか妙だ。また黒い忍者の格好をした人が顔を出してうろついている。時代劇の撮影現場ってこんな感じなのだろうか。できれば大正時代の卒業式っぽい格好を、ぜひ鈴蘭優ちゃんにしてもらいたいと思った。まかり間違っても美里には似合わないだろう。それだけは断言したかった。

着物女性軍団についていくと、やがて突き当たりに辿りついた。途中、藤の花を背負って黒い帽子のようなものを被りポーズをとっている場所にぶつかり驚いたりもした。記念撮影を、どうやらここでは廊下で行っているらしい。藤野かもしれないと顔を覗いたが、真っ白く顔を塗ってある意味お化けじみた雰囲気だったので判断はできない。たぶん「藤娘」ではなかったような気がした。

「きれいねえ、やっぱり『藤娘』はいいわよねえ」

——美人がやればな。

ようやく楽屋らしい匂いが漂ってきた。大部屋、小部屋、色々並んでいる。戸はあけっぱなしのところもあれば、きちりと閉じている部屋もある。とにかくうるさいことだけは確かだった。なんでここまでガキの音がうるさいんだろう。またすれちがった時代劇扮装の人を眺めながら、美里の姿を探した。かなりめかしこんできた美里でも、この環境下ではありんこレベルの認識しかされないだろう。

——かわいそうな奴だ。まったくな。

大部屋に向かったのかもしれない。一瞬足を留めた。湯沸し所らしきところの壁に、一枚紙が貼られていた。

——もしかして、これってな。

「時辻」と、見慣れた文字が並んでいた。

——美里、見たのか。

この前、コピーしてくれた立村のノートにも、同じような筆跡が残っていたはずだ。力が抜けたような、見ただけでは絶対に男の書いた文字だとは思えない書き方。習字の時間も文字だけはきれいだと言われている。時辻という苗字が仮に、立村だとするならば。

——奴はいるのか。

躊躇する暇はなかった。美里もいなかった。部屋の前には誰もいなかった。

「すみません、母は今、上手の方に」

立村の声だった。四日ぶりに聞く、か細い声だった。

器用な奴だ。敷居をまたいだと思ったとたん、真横のふすまが自動ドアのように閉まった。自分の手が奴の頬を張り飛ばしていたのは条件反射だった。

密室を作ってしまう立村、こいつはやはり普通じゃない。

なんだか気が抜けて貴史は立村を見下ろした。

「なにびびってるんだよ」

一言だけつぶやいた。伸ばした片足を立てて座りなおすようにして、立村は貴史の顔を見上げていた。静かだったが、貴史のぶつけた本気らしきものは「痛み」として残っているはずだろう。

痛いなら文句を言えばいい。

怒鳴ればいい。殴り返せばいい。

反応してほしかった。

やはり立村は指先で頬をさすだけで何も言わなかった。ぐっとうつむき、片膝をかかえていた。側には食べ終わった紙の弁当の空箱が放り出されていた。食事でもしていたのだろう。四畳半もない小さな部屋には、蘭の鉢植えやら、紙の手提げ袋やら、格子のボストンバックとか、荷物だけがごちゃっと詰まっていた。立村ひとりであるわけではないということが伺えた。

「どうして来たのかって、聞かねえのかよ」

返事をしない。だんまりを決め込もうというこいつのやり方だろう。いらだった。ねめつけた。

「どうしてなんも言わねえんだよ」

やはり外に声が漏れるのはよくない。閉じられたふすまに響かないよう、貴史は言葉を押さえて続けた。

「時辻って苗字じゃねえかって美里が言ってたから、もしかしたらって思ったけどな。ここまでぴったりだとは俺も思わなかったぜ」

息を呑んだように立村が顔を上げた。

「お前の母さん、時辻っていうんだろ。この前、廊下ですれ違ったきれいな人だろ」

答えなかった。視線を蘭の花に向けていた。

少し耳がはもっているように聞こえた。耳の穴を指先でほじった。自分の声が、なぜかいつも

と違っていた。もう一度立村の目を見つめ返し、つぶやいた。

「お前と目の感じ、おんなじだったから、一発でわかるって」

無言でうなだれたまま、唇を噛んでいた。けど、逃げ出さなかった。うつむいて、貴史の言葉を受け止めている。動こうとしなかった。嘘ではないということだけが伝わった。

——こいつの答えかよ。一年以上かかってやっとかよ。

初めて貴史は自分のことばがたいらなまま、立村に伝わったことに気付いた。

——俺が最初から言えばよかったんだな。こいつには。

——俺が、先回りして言うしかねえんだな。こいつには何を言うにしても。

——美里も早く気付いけよ。そこんところ。

たぶん南雲がささやいた通り、立村は美里と貴史がカップルになったとしても、抵抗なく友だちでいられると思っているのだろう。周りでもそう思われているのだから、神経過敏すぎる立村のことだたぶん、自分を守る価値がないと、思い込んでいるに違いない。。

——白状しろってどんなに責めたって、こいつには通じない。こいつには、俺のやり方が通じないんだ。だったら、どうする？

立村をはたいた時に残ったちりちりした指の痛みが、温もりに代わってきたような気がした。

こいつが貴史の求める返事をするのはまずないだろう。そういう奴だ。教室で問い詰めても、美里に激しく罵られても、奴は内にこもるだけで何も言い返さなかった。今この場にて、思う存分殴りつけて言いたいことを怒鳴り散らしても何もしないだろう。明日以降も相変わらず冷たい態度で通すだけだろう。貶められることに立村はきっと、慣れている。怖いと思っていないのだろう。

そういう立村のことが貴史は腹立たしかった。宿泊研修の時も、その前の前の時も、何も相談してくれなかった立村のことが許せなかった。でも、そのやり方しか知らない立村を責めることはもうできなかった。目の前で言葉とは違う返事を返して、これからどうすればいいか内で悩んでいるらしい立村を見ていると。

追い詰めるのではなく、おびきよせる。怒鳴りつけるのではなく、話し掛ける。

真っ正面からでない言葉を用いて、それでもつながりたかった。

そう思える奴は立村以外今までいなかった。今でもひとりだけだった。

——大人になるしか、ねえのかよ。

貴史と美里に問い詰められて言葉が出なくて能面状態だった立村を、今まで通りにひっぱりだしてやりたかった。貴史は深呼吸した。自然と気持ちがやわらいでいった。口を尖らせて息を吐き出した後、続けた。

「立村、さっきはごめん。ってか、この前も悪かった。俺も、美里も、言い過ぎたって思ってる」

おそろおそろといった風に立村が貴史を見つめた。おびえているのがまだ見え見えだ。

「ぶっちゃけた話、宿泊研修の時、なんで俺に話もちかけてもっと別のやり方考えなかったのか

、それが腹立ってただけだ。俺だったらクラス全員を味方につけて、狩野先生に電話をかけて、とにかく最後まで菱本先生を説得したと思うんだ。お前と菱本先生は天敵同士だから俺が代わりにやってもよかったと思う。俺そういうのは得意だからなあ。けどな、立村」

学校では絶対に言えない。美里がいる場所では決して口にできないことを、さらにつなげた。「お前、言えない性格だよな。そういうこと。俺の方が気付けばよかったんだよな」

小さく首をふるしぐさをする立村へ、貴史は落ち着いたまま話し掛けた。「もしな、もしかしてけどな、友だちなくしたくなくて美里と付き合ってるんだったら、そんなのやめたっていいんだからな。俺は誰とくっついても、お前と友だちやめようなんて思ったことねえからな。お前らが別れても美里と友だちでいるのやめるわけねえし、たぶん美里だって、同じだと思うからな」

かぼそい声が、立村の口からもれた。

「ごめん、羽飛」

「あやまるのは俺の方だ」

初めて気付いたかのように立村は頭をもたげた。美里のことを忘れていたのだろう。「きよ」と小さくつぶやき、改めて、

「清坂氏、来てるんだろう」

ふすまの方を指差した。

「今ごろ楽屋探してうろうろしてる」

手首の時計を覗き込み、立村は側にほおっていたプログラムを広げた。

「藤野さんに会いにか」

「ああ、あいつと藤野、小学校の頃いろいろあって、喧嘩別れしてるんだ。たまたま招待されたらしくて俺もセットで来るようにと言われちまってさ」

あまり詳しいことは話さなかった。

「だから、一応付き合いで来たって感じみたいだなあ。とりあえず挨拶につて、先に楽屋に行ったんだ。けどこの辺にはいねかったみたいだし」

親指であごの先をなで、立村は立ち上がった。いつもクラスの教壇に立って、ロングホームルームの司会をしている姿に似ていた。何かをしようとしている奴の、前座の気配だった。

「藤野さんの順番からすると、そろそろ準備でばたついているはずだ。舞台が終わった後の方がいいんじゃないかな」

「舞台って、なんだよ。俺その辺わからねえけど」

「清坂氏がいたら、そろそろ客席に戻るように言った方がいい。舞台終わってから改めて楽屋に来た方がいいと俺は思うから。それの方が藤野さんも落ち着くと思う」

もう、貴史に殴られてうなだれていた姿は残っていなかった。貴史を見下ろすようにして、頷いた。

「本番前の方は、大抵そうだけど緊張しているんだ。そういう時によけいなことをされたり、さっきの話じゃないけれど清坂氏と藤野さんに何かがあったんだったら、かえって迷惑になると

思う。だから、終わったら俺が連れて行ってもいい。羽飛、悪いけどさ、その辺を頼む」

「俺じゃねえだろ、先はともかく、今はお前、美里の相手だろ」

貴史も立ち上がった。南雲のささやいた言葉を振り切るように。

「どっちにしろぶにしる、立村、美里と決着つけて来い」

いきなりふすまが開いた。見覚えある大きな瞳の女性が立っていた。

「あらま、どうしたの上総、お友だち？」

あの日すれ違った年増のべっぴんさんそのまんまだった。髪の毛を上げて派手な化粧をしているところは、日舞系の人と思えなくもないけれど、目だけが違う。らんらんと輝いているところ。絶対にこれは立村と血縁関係にある奴だと断言できる。頭だけで貴史はお辞儀をした。

「あの、母さん、あのさ」

どもるように言葉をつなげ、立村は貴史の方を見た。

「俺の、青大附中の友だちで、羽飛くん。さっき別の友だちのあいさつで、ここ見つけてきてくれたんだ」

「あら、上総のお友だちね。偶然ねえ、この馬鹿息子と付き合うのって大変かもしれないけれど、どうかこれからも面倒見てやってね」

膝に手を握り締めたまま、なぜか立村の顔は真っ赤に染まっていた。目をすぐにそらし、歯をかみ締めているようすだった。ただ、貴史を紹介してくれただけなのに、なぜこんな様子なのだろう。

——なんでそんな無理なことしてる顔してるんだよ、立村。

つぶやこうとした。でもやめた。

——きっと、立村にはこれだけでも辛いことなんだろうなあ。俺には想像全然つかないけど。

「いや、こっちこそいつも、お世話になってます。はい」

いきなり貴史の腕を掴み、立村は部屋から引きずり出そうとした。ずっと座っていたのでふらついた。足が痺れていた。

「なあによ、上総。せっかくだからお弁当持たせてあげなさいよ」

うむを言わずに銀色の小箱を押し付けられた。両手に納まる程度のお上品な箱だけどずっしりしている。立村の母らしきべっぴんさんは、明らかに貴史に聞こえるような口調でささやいていた、

「あんた、まともな友だちがいるんじゃないの」

「うるさいな、こんなところで言うなよ」

明らかにこの二人は親子である。もういっぺんぺこりと頭を下げた後、貴史は立村に引きずられるような格好で部屋を出た。

第八章

1 清坂美里は楽屋にたどりつけるのか

異様な熱気は学校祭の直前、全校集会、体育祭に似ている。美里が楽屋の中を覗き込もうとしたとたん、紫色の布で頭を坊主に巻いた人がぞろぞろ出てきた。一人は紫の矢絣に振袖、また浴衣姿でくっついていく人もあり。

——なんか可愛いけど、頭が変。

顔を白く塗り、口紅が赤い。目の周りを縁取りしている。

舞台の席から観るとそれほどでもないけど、近づいて見るもんじゃないと美里はつくづく感じた。

手元のお菓子をぶら下げたまま、美里は立ち尽くしていた。すぐに詩子ちゃんのところに行くつもりでいたのだが、どうもそれどころではなさそうだ。みな同じ浴衣に着替えていて誰が誰だかわからないし、怒鳴っている人いるし、とにかく美里が入り込む隙間なんてない。と思ったら、後ろで、

「すみません、ちょっとどいてください」

と、誰かが花束を抱えて美里を押しよけた。失礼な、とにらもうとしたら、無地の深い青の着物姿の女性がつかつかと楽屋内に入って行って別の誰かに花束を渡していた。かなり強引だった。

——どうかなあ、行った方がいいかなあ。

見えないように廊下の壁に背中をつけた。真上にはきれいな文字で「出演者控え室」と習字の文字で書かれていた。女性らしい文字だった。中にはちゃんと「藤野詩子」が入っていた。たぶんここだろう。

詩子ちゃんに会うのも目的だが、美里にはもうひとつ確認したいことがあった。

——立村くん、いるよね。いるに決まってるよね。

何気なく目配りしてきたつもりだったけれども、見慣れた痩せ型の少年は見かけなかった。どこにいるのだろう。やはり体調がよくなって今日は来なかったのだろうか。四日間熱を出していたということならば、考えられないことではないけれど、でも。

——立村くん、いるよね。

会ってどうするというのだろう。自分でもわからない。美里も、立村くんに会った後何をすればいいのだろう。後味悪い火曜のこと。こずえも、「口にしたことはしょうがないじゃない」と笑ってくれたけれども。簡単に許してくれる人ではないような気がする。いつもおだやかで、何を言われても「俺が悪かった、ごめんな」と許してくれるかもしれないけれど、それ以上にもっと重たいものを突きつけてしまった美里を、果たして許してくれるだろうか。

いや、許してなんて思っていない。確かに美里や貴史が立村くんにつきつけた事実は、嘘がひとつもないのだから。立村くんが素直に宿泊研修のこととかを話してくれれば丸く収まるのだ

。どうしてだろう。いつも本当のことを言わないで逃げる理由がわからない。

——許さないなんて言ってないんだよ。私、立村くんのことわかろうとしてるんだよ。どうして。

顔を合わせたらまた罵ってしまうのだろうか。ひとつひとつ、立村くんがかくしてきたであろうことを並べ立てた時、不思議に感じた優越感が気持ちよかった。こずえに止められなかったら永遠にしゃべりつづけていたかもしれない。押さえていたってことはめちゃくちゃ苦しかったのだと、あらためて美里は感じた。

——会ったら、どうしよう。

目の前を通り過ぎていく派手な衣装の女性たち。みな華やかだ。「いってらっしゃい」と声をかける人々、拍手で迎える人々。さまざまだ。鬘をつけて一気に、お人形らしく仕上がった人々が背を向けていく。どうやら舞台に向かうらしい。詩子ちゃんの出番をプログラムで確認した。

——最初が「北州」で、次が「屋敷娘」、次がええっと「お染久松」、次ね、「玉兔」って。どんなきれいな着物着るんだろう。見たいなあ。

きれいなものが大好きな美里にとってはひとりひとりの衣装を見ているだけで飽きなかった。すうっと桃色の着物に桃太郎の装束めいたものを来た人が通り過ぎていったのに気付くのが遅れ、思わず声を上げた。

「詩子ちゃん？」

ちらっと、白塗りの顔が美里を射た。

表情は隠されているけれども、笑顔ではなかった。

足首より短いピンクの着物に、ちゃんちゃんこのようなものを羽織っている。さっき通り過ぎたお嬢様たちにくらべて軽そうな衣装だった。いや、それ以前にこれって衣装なのだろうか。鬘にかんざしがひとつもない。代わりに猫の耳に見える鉢巻を締めている。

——「玉兔」か。ってことは、あの鉢巻、って、兔の耳？

詩子らしいその人は、無言で楽屋に入って行った。お母さんらしい人が慌てて風呂敷を抱えて、詩子を追いかけていった。美里には一切気付いていないようすだった。歓迎されていない客、あらためてそう思った。手元のお菓子包が重かった。

——私、来るべきじゃなかったのかな。来たらいやがられるって、わかってたのにね。

おしろいのおいが漂う中、美里はそっと楽屋の中を覗いた。詩子らしき兔の耳をつけた人は、パイプ椅子に座ってストローでジュースを飲んでいた。背が高いし、このくらいだったらたぶん間違いはないだろうと思う。しかし、あの格好はいい。

——詩子ちゃん、もっときれいな格好するんだって思った。もっと振袖のひらひらしたの着て、かんざし一杯つけて、可愛い格好するんだって。今のだって似合っていないとは思わないけど、でも。

ずっと美里の頭に浮かんでいた羽子板のイメージが消えていた。白塗りできれいだったけれども、美里の美学からすると、今ひとつものたりなかった。

挨拶だけして、帰ろう。

入ろうとした時だった。

——何？

左手の手首を誰かが押さえるけはいがした。

「え？」

振り向いた。黒いスーツ姿の、見慣れた人がそこにいた。か細い折れそうな姿でいた。

「立村くん？」

手首を握られていた。軽く引っぱられ、美里は楽屋から自分が離れていくのを感じた。違う人だったら手を振り放すだろう、怒鳴るだろう。失礼なとわめくだろう。でも、いえなかった。美里は立村くんの背を見たまま、黙って廊下の奥に引きずられていくだけだった。すれ違う人がげんそうにふたりを見ているのがわかる。体が火照った。手首からカフスの布を通して感じるのは、確かに立村くんの温もりのはずだった。一度だけふれたことのある、指先の温かさのはずだった。

「りつ、りつむらくん、あの」

この前怒鳴りつけた時の勢いなんてどこかに飛んでしまった。腕のゆるやかな温もりが怖くて、従うしかない。やがて立村くんは美里を舞台脇に連れて行った。真横には三味線の音が鳴り響き、マイクでさらに膨らんでいる風に聞こえた。黒いカーテンが三枚、上には紫色の花のれんみたいなものがぶらさがっていた。マイクを持って指示をしている人がいた。舞台の真ん中でしゃがみこんだり立ち上がったたりしながら鞠つきの真似をしている、矢絰の着物を着た人が見えた。

美里が立ち止まると、立村くんも少し手を緩めた。慌てて振り払った。

「なにをするのよいきなり」

「悪かった」

短く答え、立村くんはもう少し近くに来るよう目で指図した。ふうっと通路口の扉を視線で追うように。

「藤野さんに会いに来たのか」

「やはり知ってるんだ」

ずっととぼけていたくせに、ここになって認めてくれたのか。もう遅すぎる。でもなんで。心に言葉が飛び交う。唄が長く伸びておなかに届きそうだった。

「今は客席で見たほうがいい。直前はみんな緊張しているからそっとしてあげた方がいいよ」

「わかってる、けど」

「終わったら、ここで待ってるから」

立村くんは表情を荒立てずに、でもうむを言わせぬ口調で美里を見つめた。

「待ってるって、ここで」

「この入り口まで、羽飛に連れてきてもらえよ」

動かないと今度は無理やり腕をひっぱられるかもしれない。温みが蘇った。美里は射すくめられたまま頷き、唇を噛んだまま出口まで走っていった。立村くんは背を向けたままだった。靴を

履きかえる時振り返った時も、そのままだった。

——立村くん。

扉を閉め、観客たちのざわめきに包まれて美里は我に返った。

また入れ違いで着物姿の女性たちが戸口に吸い込まれていく。拍手が客席の扉から聞こえた。たぶん矢絣の人が踊っていたものが終わったのだろう。立村くんが言うとおりに、次は詩子ちゃんの出番のはずだ。

——貴史、どこにいるんだろう。

着物軍団の人々と違って、貴史の格好は青大附属の制服姿で目立っているはずだ。明るくなった客席に戻り、ひとり、またひとりと顔を覗いていった。ちょうど後ろの席に、くわっと口をあけて寝ている奴がひとりいた。ネクタイがまがっている。制服姿、ひとりしかいない。たぶん奴だろう。美里は後ろから近寄り思いっきり両肩をマッサージしてやった。飛び上がるのが面白い。

「おい、お前、何するんだっつうの！」

「こんなとこでいびきかいててどうするのさ。次だよ、次。詩子ちゃんの番だよ」

「しかし日本舞踊ってさあ、死ぬほど眠いよなあ。今も気が付いたら寝てたもんなあ」

幸い、周囲に座っている人はほとんどいなかった。みな、前の席に固まっているらしい。しかも、演目が終わったとたん、みな手提げやら花束をぶら下げて出口に急いでいる。みな、一曲終わるたびに人が入れ替わっている。

「ところでなあ、美里」

「なによ」

「お前、藤野に会ってきたのか」

手にもったままのお菓子包みに目を留めたらしい。

「楽屋で見たけど、口利いてくれなかった。衣装着てたけどね」

「衣装って、あんな袖の長い着物きてか」

「ううん、桃太郎みたいな格好してた」

噴き出した貴史を軽く叩いた。

「失礼だよ。笑いたくてもわらっちゃだめだよ。でもさあ、詩子ちゃん背が高いし美人だから、白塗りしてもすごくかっこよかったよ」

「兎のぬいぐるみでも着て、ライダーショーみたいなことやるのかと思ったぜ」

「かもね」

まだ、貴史には言わないでおこうと思った。だんだん上の方のライトが薄暗くなってきて、お互いの表情が読めなくなってきた。だんだん真っ暗になり、扉の端にある非常口用のライトだけが緑に光っていた。美里はそっと、さっき立村くんが握り締めてくれた部分を同じようにふれてみた。

——あんな時に、あんなこと、しなくたって。

美里が振り払った時も、立村くんの表情は変わらなかった。ちっともおどおどしていなかった

。ずっと静かに、何を言われても平気のへいざって顔をしていた。いつもああだったらいいのに。

——ほんとに、いるのかな。

黒いスーツに身を纏った立村くんの姿は、黒子のように周りに溶け込んでいた。自分だけが浮き上がっていた。美里は幕が開くのを待ちながら、見えるはずもない立村くんの姿を左手の方に探していた。

目の前に広がる舞台は青い背景に、大きな月。

さっき見た、耳つき鉢巻をしめた桃色の着物姿の少女が、白い顔のままぽんと跳ね上がった。

隣りで思いっきり笑いをこらえてうずくまっている貴史をつねりながら、美里も下を向いた。

——立村くんも、あの場所で見ているのかな。

——本当に、待っててくれてるんだろうか。

笑えるのは舞台を見ている時だけだった。美里は指でわっかを作り、立村くんのふれたカフスのあたりを握った。そうすると、切なくなれるから。

幕が下りるまで、笑えばいいのか感動した振りをすればいいのかわからず、美里は貴史とふたり、ひそひそささめきあっていた。拍手はもちろんしたけれども、雰囲気からしてあまり長くぱちぱちしててもよくないみたいだった。

「日本舞踊って、なんか想像してたのと違うよね」

貴史も顔を瞬間、しかめて答えてきた。

「なんってか、テレビのバラエティ見てるみたいだったよなあ。寝ないですんだのはいいけどなあ」

華やかといえば華やかだ。顔を白く塗って桃色の短い丈の着物、袖が短くて桃太郎のようなベストっぽいものを着ていた詩子ちゃん。決して似合わないとは思わなかった。顔が凛々しくて、かっこいいと思う。でも踊りの内容はやはり、足を広げたり、かちかち山の真似をしたり、「これあいあいさあ」とか意味不明の台詞を叫んだり。美里の知っている詩子ちゃんのイメージではまったく、なかった。もちろんこれが「新しい詩子ちゃん的一面よね」と心ときめけばよかったのだが、日本伝統文化にもともと向いていない自分の感覚だ。

——なんか、変。

これしか感じられなかった。

「ねえ、これから楽屋行くけど、あんた、どうする？」

「ひとりで行けよ。どうせ俺は藤野に嫌われてるしな」

「まあね、じゃあ貴史、ロビーでうろうろしててよ。どうせすぐ戻るもん」

「ちなみになんって感想言うんだよ。お前まさか、大爆笑で死にそうでしたとか言うんでないだろな。俺だったら」

「あんたにだったら言うかもしれないけど、私だってそこまで馬鹿じゃないわよ」

呆れ顔の貴史。手元に銀色の小さい紙箱を取り出している。何か食べ物らしい。中から同じく銀色に包まれたお菓子のようなものを取り出していた。あとで分けてもらおう。おなかすいた。

「じゃあ、行ってくる」

何か言いたそうに貴史は銀紙包を広げていたが、

「別に、遅くてもかまわねえよ。俺も食べ物食ってるしな」

食い意地の張った奴である。

2 清坂美里が立村上総に告げられた言葉

ふたりにロビーに出た後、美里ひとりでさっき通った楽屋への扉を探した。やはり分かりづらいところにある。着物姿の中年女性らしき人々が手に花束とか、紙包を持って行く道を辿れば簡単だった。もぐりこみ、隣りの人の着物の袖で顔をすられながら靴を脱いだ。やっぱり「靴を脱いで」と張り紙がされている以上きちんとしなくては。スリッパを探した時、ひょいと目の前に緑のビニールものが並べられた。

足も同じだった。

「立村くん」

黒い服に、深緑の目立たないネクタイをした立村くんが立っていた。襟元に目を留めた。うっすらとチェックが入っていた。

——立村くん、ネクタイ、チェックだったんだ。

宿泊研修の時、お土産に買った黄色いタータンチェックのキーホルダーを思い出した。

——あれ、まだ持ってくれてるのかな。

「行こう」

一言だけつぶやき、すぐに背を向けた。今度は手首を取ってくれなかった。

「うん」

——よかった。ひとりで来て。もし貴史がいたら、修羅場よね、今ごろ。

幕の下りた中、舞台ではトンカチの音、怒号、照明器具の取り付け、降りてきた藤の花、などが入り乱れていた。次の舞台の準備をしているのだろう。こういうのを見るのは初めてだった。立ち止まり眺めると、立村くんも歩を留めた。振り向いて、斜に美里の方に向いた。

「清坂氏、あのさ」

だいたいふたまたくらい間があっただろうか。

「なによ」

距離を取ったまま、美里は答えた。立村くんは目を廊下側奥の、白い背景のある場所に向けた

。

そこでは桃色の着物姿で桃太郎っぽい格好をした人が写真撮影をしていた。周りには花束を持った人たちがうろうろしている。たぶん詩子ちゃんの記念撮影だろう。立村くんの背中に近づいて、廊下の方を覗き込んだ。茶色の杵を振り上げて、先生たちに「ほら、もっと腕を張って」とか言われながらポーズを取っている。

「写真撮ってるんだ」

踊る前の緊張した面持ちとは違い、ときたまえくぼが浮かんでいた。ほっとしたのだろう。一生懸命やっていたんだったらそりゃ気持ちいいはずだ。

「ああやって、衣装着た後、みんな記念撮影するんだ。その後ですぐに衣装を着替える。だいたい二十分くらいかかると思う」

美里に話し掛けるのに、目線をあわせなかった。そのまま詩子ちゃんがフラッシュを浴びているのを眺めていた。

「でも、詩子ちゃんはもっときれいな振袖とか、そういうの着た方が似合うのにな。どうしてだろう。あんながにまたになったり、変な掛け声かけたりする踊りにしたんだろう」

立村くんは美里を射た。

いつもの「ごめん、俺が悪かった」と様子を伺うようなそぶりではない。

どこか突き放したような、冷たい光だった。今までその瞳は、菱本先生を始めとする連中へのみ向けられていたはずだった。なのに、今立村くんが見つめているのは、美里ひとりだった。

「清坂氏、これから藤野さんに会うんだろう」

「そのつもり。だってお土産渡してないもん」

「着替えが終わるまで、少しだけいいか」

「いいかって、何をよ。私と、話したいってこと？」

記念撮影を眺めている集団から立村くんはひとり抜け出し、また斜に美里を待っていた。追いつくとまっすぐ背を向けたまま歩きつづけ、時たま頭を下げていた。一番奥の、水のみ場のようなところまで来ると、もう一度振り返り、立ち止まるよう目で指示した。

——「時辻」って書いてる。

廊下で待っている間、その文字が教室の模造紙に機会あるたび書かれた文字であることに気付いてはっとした。読みが当たっていたのだと、美里は確信した。男子の文字とは思えない楚々とした筆跡。立村くんが書いたものだと、すぐに気付いた。

その部屋に入っていき、ふすまを開け、誰もいないのを確認した後、

「入ってほしいんだ」

いやとは言えない雰囲気だった。

「いいよ。誰もいないでしょ」

靴をそろえて上がった。先に上がっていた立村くんは、美里が上がるのを待って、戸を開いたままにした。きちんと閉めたのに、すぐに開けた。膝を整えて座った。

「いったいなに、話して」

開いているとかえって落ち着かない。美里は正座して立村くんに対した。立村くんも軽く手を握ったまま、膝に置いていた。正座するのは茶道の時いつもしていることだけど、今日は外のざわめきや三味線の音が響いて少し気が散った。

「立村くんが時辻さんの親戚だってことは、もうわかってるから」

「そういうことじゃないよ」

立村くんはゆっくりと美里を見つめた。冷たい視線は代わらなかった。居心地が悪くてつい、

戸口に寄った。身動きしない立村くんがしばらく言葉を選んでいる間、美里は後ろの蘭の花に目を向けた。「時辻沙名子さん江」とカードが入っていた。

——こういう花、もらえるお母さんなんだ。

見た事のない、立村くんのお母さんを想像した。

「ずっと、これは話すべきだったんだと思う。六月から」

「六月？ なによいきなり話飛ぶの？」

「でも、やはり言えなかった」

話がとびとびになっている。違うのは、立村くんがめずらしく真っ正面から話をしていること。

目をそらさないこと。

「あ、この前のこと……」

「いや、違う」

ゆっくりと立村くんの視線が下から上へと競りあがっていくのを感じた。笑いのない、冷たい視線。

「俺は、一年の頃から羽飛と清坂氏、どちらも同じように大切な友だちだと思ってた。けど」
かすかに痙攣したように唇が震えていた。

「六月過ぎても、俺の中ではそれが全く、変わってない。だから」

——六月、そうなんだ。

水無月の雨、茶室の中、ふたりっきり。

廊下でしゃべりまくる通りすがりの人々。ざわめきが今は雨の代わり。

「俺はもう、清坂氏とは付き合うことができない。清坂氏がしてほしい付き合いは、できない」
四フレーズに切り取って、間違えないようにはっきりと、立村くんは美里に伝えてきていた。
嘘ではない証拠に、視線を一切そらさなかった。

——何言ってるのよ、立村くん。

——振るんだったら私の方じゃない！ 変よ。そんなの。

——貴史と同じくらい大切な友だちだったらいいいじゃない。立村くん。

美里もじっと見つめ返した。ふたりで今くらい見つめあったのは、出会ってから初めてだろう。

立村くんの眼はいつも伏せ目がちだったけれども、覗き込むと思ったより大きい。目が潤みがちだった。黒くぬめったような瞳の怖さを、美里は初めて受け取った。

「それって、つきあい、やめるってこと？」

「友だちはやめたくない。でも、つきあいやめることでそうなるなら、仕方ないと思っている」

「友だちとつきあいて、別に、私、なんも」

「清坂氏、ひとつ聞いていいか」

立村くんは美里の返事を待たずに畳み掛けた。

「もし羽飛と清坂氏が付き合っていたとしても、別の奴と清坂氏とそういう付き合いをしていたとしても、俺はどっちにしても友だちでいられる。そう思う。そういう奴とあえて付き合いたいと思うか」

——立村くん、今になって気付いたの？

マシンガンで一氣にまくし立てられたら楽だろう。学校でだったらきっとそうするだろう。でもここは、立村くんのホームタウン。目の前の蘭が凜々しくにらみついている。

「だって、そういう相手がないから私立村くんと付き合って」

「今のが俺の本心だ。どんなにやっても、俺はそういう感じ方しかできなかったんだ」

「私を、友だちとしか、思えないって？」

立村くんは口を閉ざした。ただじっと、美里の方を見つめつづけた。いつもの「ごめん、俺が悪かった」とかその他の言い訳をしようとはしなかった。四日間熱を出して苦しんだ後なのだろう、少し顔がやつれたように見えた。何でもいいから言い訳してほしかった。

「立村くん、私が火曜に言ったこと、気にしてるの」

「あれはみんな本当のことだから、当然だと思う。でも、俺は清坂氏のしてほしい形での付き合いはできない。それだけなんだ」

自分の言葉が言葉でないように飛び出してくる。

「私、そんな難しいこと言ってる？ 私、立村くんのこと、嫌ってないって言ってるだけ。だから何あってもいいって言ってるだけじゃない」

「わかっている。でも、言えないことを無理に言うことはできない」

「言えないことってなによ。時辻って苗字がお母さんのことだってこと？ 詩子ちゃんのこと知ってたってこと？ 宿泊研修で菱本先生に頭に来たってこと？ 小学校時代が暗かったってこと？ そんなこと知ってたって私、あんたを差別なんてしなかったよ。わかってるでしょ。私も、貴史もずっと」

「うん、わかってる。だから、感謝してる。羽飛と、清坂氏には。でも、羽飛と清坂氏と同じもんだと思って付き合っちゃ、いけなかったんだって今やっと、気付いた」

「じゃあ、どうすればいいのよ。私、私だって、いきなりそんなこと言われたって」

「俺なんかとつきあうよりも、もっと清坂氏にはいっぱいいい奴がいるはずだ」

どんなに美里が言葉を投げかけても、立村くんの答えはひとつだった。

——俺はもう、清坂氏のしてほしい付き合いはできない。

ここは一度、作戦を練らなくてはならない。

素直にうなだれて涙するほど美里は単純な女じゃない。

「わかった。これ以上話しても立村くん、どうしようもないよね」

想像以上にかたくなな人だったのだと、あらためて思った

「立村くんはここの方が話しやすいかもしれないけど、私は学校でないとだめ。だから、明日。貴史も待ってるし」

立ち上がり、スリッパに履き替えた。黙って立村くんがふすまを閉め、後ろに続いた。

「いいよ、ひとりで行けるから」

「いや、もうひとつだけ、頼みがあるんだ」

「付き合っている間に？」

「違う、藤野さんに」

廊下に立ち、「時辻」の張り紙を横目に見ながら、美里は立村くんをしっかりと見据えた。

「今日は、十五夜だって知ってたか？」

「十五夜お月さん？ あ、今思い出した」

あまり暦に詳しいほうではない美里である。首をかしげた。

「たぶん、藤野さんは自分の演目がどういう理由にせよ、気に入ってないと思うんだ。さっき清坂氏が言っていたようにもっときれいな着物を着てみたかったんだと思う。でも、『玉兎』という踊りには、今日の日のイメージを絡めて、初舞台にかけて、一生の思い出にしてあげたいって先生たちの気持ちがこもっていたと思うんだ。俺はあまりそういうことわからないし、口出ししたくないから言わないけど、でも、もし気付いていないようだったら、なにかの折に、藤野さんに教えてあげてほしいんだ」

「あんたが言えればいいじゃないの」

「俺は一度も、藤野さんと口を利いたことなんてないよ。これからもたぶんそうだと思う」

さっきまでずっと風の吹き抜けているような瞳だったのに。

美里に話している時、ふといつもの立村くんに戻っているようだった。やわらかな視線。穏やかな表情。さっきまでの力をこめて威圧しようとする部分は一切感じられなかった。

きっと、無理していたのだろう。美里は確信した。

「仲のいい友だちでしかそういう話はできないと、俺は思うからさ」

——ああ、やっぱり、こういうところが立村くんなんだ。

——私、つきあいやめるなんて、あっさり飲むことなんてないからね。

3 清坂美里が藤野詩子につたえること

そりゃあ、いきなり立村くんにあんなこと言われたらショックでないわけがない。

——俺はもう、清坂氏のしてほしい付き合いはできない。

なのに不思議なくらい、美里の気持ちはすっきりしていた。

火曜日にあれだけ罵るだけ罵った相手だ。振られるのは当然だ。

お前のことが嫌いだと言い切ってつば吐きかれるのもしかたない。最悪の場合、ひっぱたかれることも覚悟していた。立村くんのプライドをずたずたに傷つけたことは自覚しているのだから

。

なのに、やっぱり会うと立村くんは、美里の知っている立村くんのままだった。

立村くんはずっと美里のことを待っていてくれたのではないか。しかも、ちゃんとひっぱっていきたくれ、結局「別れ話」……美里は素直にそう受け止めていないが……が出た後も、詩子ちゃ

んが着替え終わる頃まで側にいてくれた。

心臓がどくんどくん言いつづけていた。「時辻」と書かれた和室の中で、思わず自分の嫌いな

「お願い、付き合いやめるなんていわないでよ」

と縋りつくパターンになるところを間髪回避できたのはなぜだろう。

ちょこっと指をくわえて考えてみた。楽屋の前で帯を締めてもらっている詩子ちゃんをずっと眺めながら、美里はふと思った。

——そんなに私の望む付き合いが出来ないっていうんだったら、あんたの望むつきあいてのがなんなのか教えてもらえばいいことじゃない。なんだ。私、聞けばよかった。

——貴史と同じくらい私のことを好きだってことじゃない。あの人がとうとう、私に告白したようなもんよね。立村くん、きっとあんたは気付いてないと思うよ。私のことを振らなくちゃって思っていたんだと思うよ。きっと、私をめいっぱい傷つけたと思って落ち込んでると思うよ。けどね。

切り札が見つかった。美里はもう一度、微笑んだ。

——だから、安心して言いたいことを、こう言う風に言ってくれればいいんだよ。立村くん。

可愛い着物だと美里は素直に思った。化粧しないでこのまんま、舞台に立ってくればよかったのに。詩子ちゃん、なんで桃太郎ルックなんかしたんだろう。聞きたいけれど立村くんの助言もあったので飲み込んだ。たぶん今の中学の友だちが何かものを持ってきておしゃべりしていた。その子たちがいなくなった後、もう一度覗き込み呼んだ。

「詩子ちゃん」

髪の毛をお母さんらしき人に結ってもらっていた詩子ちゃんがようやくこちらを向いた。

「美里、来てくれたの」

「うん。初めて日本舞踊って観たけど、面白かったよ」

まずい、と気付くのが遅かった。「面白い」はちょっと禁句だ。

「あら、美里ちゃん、本当にお久しぶりね。ほらこちらの椅子に座ってどうぞ」

詩子ちゃんだけがどういう顔をすればいいのかわからないようすで戸惑っている。化粧を落とした後、妙に頬がてかてか光っていた。お土産を詩子ちゃんのお母さんに渡し、美里はそっと座った」

「あれ、変だったよね」

「変って、踊りが？」

「やっぱりそうなんだ」

踊り終わった直後はほっとしていたのか笑顔も見えたのに、今はすぐに表情が暗くなる。立村くんの言った言葉もまんざらはずれてはいないのかもしれない。

「ううん、すごく可愛って思った。桃太郎さんみたいで」

「もも、たろう？」

完全に逆効果だった。貴史の助言をもっと聞いておくべきだった。美里は出された和菓子の包

を手にとり、時間稼ぎに食いついた。

「だから、本当は誰も呼びたくなかったのよ。美里」

「どうして？ いいじゃない」

「よくなんかないって。私だって本当は、もっときれいな衣装着たかったもの、でも」
お母さんが間に入って肩をすくめた。

「詩子ちゃんまだ言ってるの。やめなさい。もう終わったことなんだから」

「だって、もう」

ふくれっつらで詩子ちゃんもお菓子をつまみ始めた。お菓子入れの中身がどんどん減っていく。会話は無いけれども、食べることにだけは集中してしまう。お茶をいただきながら、美里は立村くんに言われたことをいつ切り出そうか、迷った。

——相当、詩子ちゃん、むくれてるね。まあわからないでもないけどね。

お母さんが周囲の人たちをうかがいながら、小さい声で詩子ちゃんにささやいた。美里にはかろうじて聞こえる声だった。

「わかってるでしょ。詩子。女踊りなんて選んだら家がどうなると思うのよ」

「だって、最初は私、『手習子』だったんでしょ。なのに、なんで」

「いいじゃないの、上手に踊ったってみんな先生たち誉めてくれてたわよ」

「そんなんじゃないよ」

突然、詩子がうつつむいた。お母さんにきつく言い返していた様子が崩れて落ちた。

「詩子、ちゃん」

「美里に観られたくなかったのに、なんでよりによって来たのよ。美里、どうして」

顔を覆い、頬を抑えた。目からはにじみ出るような涙がぽつりと落ちた。

「ほらほら、何泣いてるのよ、詩子。感動してしまったのかしらねえ、もう。感極まったって感じですよねえ」

後の言葉は他のお弟子さんたちに向けての言葉らしかった。怪しまれないように。みな浴衣姿でお茶を飲んだり伸びて寝ていたりとさまざまだった。

「私、来ない方がよかった？」

「いてほしい時にいなくて、来なくていい時になんで来るのよ。それも羽飛と一緒に」

「貴史も気を遣って、楽屋には行かないって言ってたんだよ」

「いつもそうよね、美里。いつも、美里は羽飛といつもくっついてたよね。どうして」

「どうしてもこうしてもないよ。だって親友なんだよ、あいつとは」

「私といるよりよかったってわけ」

後は涙で聞こえなかった。なぜ、貴史の話にまで飛ぶのかわからなかった。踊った後の感動を味わっているのではないということはわかる。でも、いったい詩子ちゃんは美里に何をしてほしいのだろう。

そうだ、この感じは前にも味わったことがある。

詩子ちゃんが青大附属を受験すると言い出した時。

受験に失敗して落ちたと聞かされた時。

——詩子ちゃん受けたってしょうがないってみんなわかってたのに、なぜ。

お世辞にも詩子の成績は、青大附属に受かるようなものではなかった。なのに、べったりと、「美里が受けるから私も」

と言い出したことが美里はうざったかった。それが本音だった。

なんで小さい頃から一緒だった貴史とは、一日中一緒にいてもそんな気持ちにならないのに、詩子ちゃんにだけそんな気持ちになってしまったのだろう。

——だから、なんで私にばかりくっついてくるのよ。

美里はつぶやきながら、なにげなく詩子ちゃんを避けていたような気がする。わざと貴史と家に帰ったり、児童館に通ったり。トイレに行くのも、帰りもいつも一緒。そういうべたっとした付き合いが美里は耐えられなかった。

——詩子ちゃんが私と大の仲良しでいたいってのはわかるよ。でもね、程度ってものがあるよ。

——私も詩子ちゃん傷つけたくなかったから言わなかったけどね。

——もしかしたらもう一度友だちになれるかも、て思ってたけど。やっぱりだめだよ。

「詩子ちゃん、いい。貴史待ってるからそろそろ帰るけど、ひとつだけ伝言があるんだ」

切なげに涙をこすっている詩子を美里はじっと見つめていた。

「なに」

「詩子ちゃんの踊り、『玉兔』っていうんでしょ。今日は『十五夜お月さん』の日なんだから。で、詩子ちゃん今日初舞台なんですよ。一生の思い出に残るように、十五夜お月さんの舞台として、兔になればいいんですよ。きっと先生たちがそう決めたんじゃないかって、ある人が言ってた」

隣りで様子をうかがっていた詩子ちゃんのお母さんが、驚き眼で近づいてきた。

「あら、美里ちゃん、いいこと言うのね」

「いいえ、私の友だち、というか、あの」

彼氏、とは使えなかった。

「とにかく、私の知ってる人が、そう教えてくれたのよ。詩子ちゃんがずっとこの踊り好きじゃないんじゃないかって気にしてて。心配してくれたのよ。でもその人、自分からは絶対に言わないって決めてたみたいで、私を通して教えてあげてくれって言ったの」

「誰、その人って」

「立村くん。私が今付き合っている人」

ゆっくり、この部分に力を入れた。

「詩子ちゃん。私、今日の踊りがいいのか悪いのか全然わかんない。でも、その前の踊りを見ていて寝ていた貴史が、詩子ちゃんの踊りは面白がってみていたよ。面白いものを面白って言って、そんなに悪い？ 私、詩子ちゃんがもっと堂々とすればいいのって思うよ。悪いけど、今日詩子ちゃんと話をしてもとの友だちに戻れるかな、って思ってたけど、やっぱり今の詩子ちゃんとは楽しくないよ。私、もっとべたべたしたとこのない詩子ちゃんと話したかった。なん

かわかんないけどずっとむくれてて、口尖らせて、きれいな衣装着れなかったってふくれてる詩子ちゃんを慰めるために来たんじゃないもん。これからどうなるかわかんないけど、今のところは」

美里は立ち上がった。詩子ちゃんのお母さんに聞こえないようにそっとささやいた。

「もし、また何か踊る時あったら、連絡ちょうだいね。私、今の詩子ちゃんとは付き合えないけれど、いつかは前みたいな友だちになりたいって思うから。その時まで毎回観に行くから」

詩子ちゃんは目をこすって美里をにらみつけた。動揺の色が隠せなかった。

「美里、どうしてそんなこと言うの。私、あんなに仲良しだったのに」

「今の私が仲良くしたいのは、いいことはいい、悪いことは悪い、って自分の考えを持っている人なの。青大附属ってそういう奴ばかりだよ。立村くんだって、人見知り激しいし言いたいことなかなか言ってくれないけれど、すごく私や貴史のことを大切にしようって思ってくれてる。だから、私、付き合うって決めたんだ。もしかしたら振られるかもしれないけど、今、詩子ちゃんの『玉兔』の由来教えてもらって初めて分かったよ。口を利いたことのない女子に対して、こここまで心配してくれて、思いやってくれるところがわかるから、かなって」

「ねえ、美里、どういうこと。立村くん、ってまさか」

「そうよ。時辻くんと同一人物。詩子ちゃんの想像した通りだよ。詩子ちゃん、立村くんのことを背の低い冴えない奴だと思ってたみたいだし、たぶんそう思う人がほとんどだと思う。でも、私はそんなのをとっばらっても、やっぱり立村くんと付き合いたいって思うもん。そう思わせてよ。詩子ちゃん。めそめそ泣いてないで、私が詩子ちゃんとしゃべりたいって思うようなところ、見せてよ」

美里は立ち上がり、ゆっくりと椅子を畳んだ。

「じゃあ、またね」

詩子ちゃんがまだうつぶして泣いている。お母さんがまた背中をさすって慰めの言葉をかけている。でも美里は振り返らなかった。戸口で一礼したのは、詩子ちゃんの姿が隠れるから。

——今の詩子ちゃんとはしゃべりたくない、か。

——ひどいこと言っちゃったって思うけど、でもそれが、今の私の本音。

急いでもと来た舞台脇の通路を通りロビーに戻った。一気に明るくなる照明器具。目が暗さになれていたせいかわらつた。

「貴史、貴史」

つぶやきながら青大附属の清風を探すと、貴史がぼけらっとした顔をして座り込んでいた。一時間近く待たせたことになる。

「ごめん、長すぎたね。許して」

「あとでおごれよ。『竜宮上』のソフトクリーム」

「やあ、あれって350円もするんだよ！」

「そのくらいしたっていいだろ。ばあか」

大あくびをしたところみると、相当眠かったのだろう。

「じゃあ行くか。ところで美里」

「なによ。詩子ちゃんとは会ってものを渡した。それだけ」

ガラス張りの玄関から出て、美里は貴史が口篋もっているのに気が付いた。

「会ったか」

「だから詩子ちゃんに」

貴史は答えず、ネクタイを緩めてポケットにつっこんだ。

「あんた、何が言いたいなのよ」

「言いたいわけじゃねえよ」

——あんたの言いたいことわかってるよ。どうせ。

外に出ると、幅広い雲がたっぷり浮かんでいるのが見えた。空いたところに光る青空の色がちらついていた。明日からはまたお天気が崩れるという。歩いていると暑いくらいなのに。

「貴史、あのね」

美里は空に向かって言葉を発した。

「私、さっき立村くんに振られたんだ」

案に反して貴史は答えを返さなかった。黙って口篋吹いて歩いている。

「けどね、明日、『告白』って形にひっくり返してやるんだ」

「はあ？」

つかつか寄ってきて、顔をまじまじ見るのはやめてほしい。

「お前、何考えてるんだ？」

「立村くんね、ちゃんと教えてあげなくちゃだめだよ。一生懸命本当のことを言ってくれたんだったら、いいことにちゃんとなるんだって、証明してあげるんだ。私と貴史がやってきたこと、無駄じゃなかったのかもって、ねえ、思わない？ 思うよね、きっと」

「美里言ってること、俺にはアイドントノー状態」

もう一度貴史は、アップテンポの軽い口篋を吹き始めた。

1 立村上総が受け取ったもの

——俺は、清坂氏の求めるつきあいをするには、できない。

たったこれだけのことを伝えるのが、どうして大変だったのだろう。

口にしてしまった後、美里に激しく食って掛かれたことも、それどころか「つきあい」を続けることを求めてこられたことも、上総にとっては信じられないことだった。

——とっくに俺が振られたってことになってるはずなのにな。

上総は三年A組の教室前に佇んでいた。

一週間近く本条先輩と連絡を取っていない。学校を休んでいたというのもあるけれど、あえて自分を甘やかしたくなくて口を閉ざしていた経緯もある。十月中旬からは学校祭やら体育祭やらで忙しくなるのだから連絡をしないのもおかしいだろう。

「よお、立村、お前顔真っ白だなあ。どうした」

肩にかばんをひっかけて、ブレザー制服のネクタイを緩ませて本条先輩が上総の顔を覗き込んだ。やはり、休んでいることを知っていたのかもしれない。

「先週風邪引いて休んでました。連絡遅くなってすみませんでした」

棒読みで上総は答えた。

「ふうん、そうかそっかそっか。生きてるだけでもめっけもんだ。立村、とりあえずだな、冬休みの評議委員会演劇ビデオの予定を早めに出しとけよ。ほら、お前ら二年が仕切るんだからな。それと学校祭とか、体育大会とかやったらめったら行事は目白押しなんだぞ。体力持たないとやっていけねえぞ」

頭をぐりぐりと撫でつけるのはやめてほしかった。首を振った。でも離れなかった。

「俺だってな、来月辺りからはさすがに真面目な顔で受験生の顔せねばなんねえんだからな。わずかな俺との時間を大切にしろよ、おい聞いているのかよ」

——来月、十一月か。

本条先輩は公立を受験するはずだった。今のところ知っているのは、上総を含む一部の連中だけのはずだ。

「本条先輩」

ぶるっとふるえが走り、肩を思いっきり竦めた。まだ咳が残っていてむせた。

「なんだよ」

「まだ、誰にも話してないんですか」

「何をだ」

「先輩が、受験すること」

横にひっぱられるような本条先輩の口。ゆっくりと元の形におさまった。

「俺のことをか」

「はい。先輩」

身体がすうっとかたくなっていくようだった。背筋が寒かった。

「俺はまだわけを聞いてません。本条先輩、どうして、公立に行くんですか」

自分の口にした言葉を、本条先輩は受け止めた証拠に上総と目と目を合わせてくれた。答えがない。ただじっと見つめられるだけだった。美里にあのことを告げた時と同じ、覚悟の必要な言葉だけが流れた。

「本条先輩、プライバシーの侵害と言われてもかまいません。どうして、青大附属を出て行くんですか」

初めて七月の評議委員会合宿で告げられた本条先輩の公立高校受験。

打ち明けてくれたのは上総が最初だと言ってくれた。

その場でも何度か尋ねたが、「プライバシーの侵害だ」とごまかされてしまった。本条先輩に逆らってはならないという上総なりの判断で、今日までずっと聞かずにいた。なのに、口が勝手に動き出した。言いたいけどいえなかったことを、すらすらとしゃべることができた。

「立村、あのな」

廊下に他の三年連中がいらないかどうかを確かめるように見回し、本条先輩は片腕で上総の頭を抱えた。汗臭い匂いでむせた。

「俺ひとりでうちの親にくっついて転校するか、それとも青潟に残るかって言われたとする。お前ならどっちを選ぶ」

「どっちと言われても」

いきなり口籠もる。転校なんて考えたこともない。想像つかない。

「俺は青潟に残ることを選んだ。年子の兄貴とな」

「先輩、それは」

「ふたりで下宿なりなんなりするんだったら、親にあまり金せびれねえだろ」

「ああ、私立だし」

「だったら公立でいいじゃねえかってことだ」

腕が離れ、上総は何度か首を振った。

「転校するって、どこに」

「どっかわからん外国か、青潟とは違う場所かのどっちかだ。けど、俺は青潟でもう少し遊びでえってことでだ」

かばんの角で上総を軽くはたくようにして、本条先輩は自分の教室に入って行った。取り残された上総は一礼すると階段に向かって歩き出した。

まさか本条先輩が教えてくれるとは思わなかった。

どうしても聞きたくてたまらなくて溢れた言葉。

——本条先輩。青潟に残るんだ。

詳しい事情はわかるようでわからなかった。納得できるようでできなかった。ただ、上総が感じたことはひとつだけ。

——青瀧に、いてくれるんだ。本条先輩。

三ヶ月、ずっと聞きたくて聞けなかった言葉を、封印していたものが、こんなにすらすらと引き出されていくなんて信じられなかった。

二年D組の教室に入ると、一部の連中から、

「立村お前生きてたのか！ 台風で飛ばされたかと思ってぞ」

「しかし、精魂尽き果てたって顔してるなあ」

「人生長いんだからな、気を確かに持てよ」

励ましてくれてるのか物わらいにしているのかわからない言葉の雨に打たれた。笑って受け流すことも、このクラスではできる。すでに到着していた古川こずえに授業の状況を尋ねたり、いつもの朝の漫才をかまされたり、ごくふつうの一日が始まりつつあった。変わっていたのは机の中の大量プリント類くらいだろうか。一枚ずつ折ってかばんに詰め込んだ。

「立村くん」

熱中しているうちに、聞き慣れた声が、聞き慣れた調子で聞こえた。

「あ、清坂氏」

それしか言葉が出なかった。教室に入ってきてすぐに上総の机前に来たのだろう。さっぱりした笑顔で立っていた。

「あのね、企画書。あとでひとりで読んで」

「企画書って？」

条件反射で尋ねてしまった。昨日あれだけ修羅場をやらかしたというのに、美里の顔は後遺症を残していない。傷が治らないと泣いているのは、上総だけなのかもしれない。

「だから企画書だってば」

——学校祭の行事関係なのかな。それとも。

周りはたぶん、ふたりが仲直りしたと思っているのかもしれない。

もしくは火曜の段階で美里が上総に愛想尽かしをしたと思っているのかもしれない。その辺は想像するしかない。上総がわかっているのは、美里が渡してくれたものが決して、評議委員会関連の「企画書」ではないことくらいだった。

——授業中、だったら読んでいてもわからないよな。

上総は机に素早くしまいこんだ。隣りの古川こずえに覗かれたりなんかしたら、大変なことになる。

チャイムが鳴るぎりぎりに貴史が飛び込んできた。ちらっと目を向けたが、すぐに席に付いたので会話はなかった。上総の隣りに南雲が悠々とやってきてすわり、すぐにミュージックテープ交換を始めたので、はたしてふたりが何を考えているのかは見通せなかった。羽飛はシャープを鼻と唇の間に挟み込み、何とかして動かないようにしようとかしゃくしゃの顔をしていたし、美里は黙ったまま近くの女子たちとテレビ番組のネタで盛り上がっていた。その辺はよくわからない。

菱本先生が入ってきて、ちらっと上総の方を見た。

「立村、もうだいぶよくなったのか」

「はい」

最低限の返事だけ返した。

「他の先生たちのところへ、ちゃんと補習用のプリントもらいに行ってくいよ」

「わかりました」

腫れ物に触るような態度だが、それでもかまわなかった。菱本先生に関してのみ、遮断用シャッターは下りていた。はたして父と珈琲を挟んでどういう会話をしたのかは想像つかないが。手におえない息子のことをぐちったのだろうか。宿泊研修のごたごたについて不満たらたらだったのだろうか。

——他の奴にも同じようにできればいいのにな。

隣りで古川こずえがささやいた。

「なあに、反抗してるのよねえ。まったくあんたったらガキなんだから」

「悪かったな」

上総はつくえの中で手を動かし、封筒から「企画書」だけ抜き取り、ノートに挟み込んだ。教科書と重ねて机の上に置いた。授業が始まってから、ゆっくりと読もうと思った。こずえや南雲には気づかれぬように、ぱらぱらとめくった。窓辺の美里は知らん顔して近くの席の子たちと明るくしゃべっている。

そっと、めくってみた。レポート用紙に小さく「企画書」と上書きされていた。評議委員会関係の書類の顔をしていた。上の方でステイプラーによって留められていたので、一枚ずつめくってみた。

——立村くんへ

これから書くことは、私から立村くんへの提案です。

私が立村くんになにしてほしいか、ってことはずっと前から話してきました。

けど、昨日の話でそれができないということがわかりました。

だったらしかたないので、私の方でどうしたらいいかを書かせてもらいます。

もし、これでよかったら、放課後、自転車のところへ来てください。

これでだめだったら、しかたないのでつきあいやめてもいいです。

立村くんがあまり、私に家のこととかそういう話をしたくないってことがわかりました。

だったらもう無理にそういう話はしなくてもかまいません。別にそういう話がなくなっても、立村くんと話をすることはできます。今までそうだったし。評議委員会のこととか、クラスのこととか、そういう話をずっとしてきたんだったら、それでもいいです。

ただ、私は立村くんに、ひとつだけお願いがあります。

私にしか話せないことを、ひとつだけ、教えてください。

貴史とか、南雲くんには話せないこと、たったひとつだけでいいです。

立村くんは六月に、私のことをひいきするって言ってくれましたよね。

別に他の人たちの前で変なことしてほしいなんて思ってません。

ただ、ひとつだけ、立村くんの秘密を持っていただけです。

なんでもいいです。本当にしょうもないことで大丈夫です。言いたくないことがあればそれはそれでしかたないと思います。それ以上突っ込んだりしません。ただ、ひとつだけ、そういうのがあれば、立村くんが私をひいきしてくれたと思えます。

立村くんだけにそういうのを要求するのはフェアじゃないので、私も立村くんだけに、秘密を話します。

それは、あの藤野詩子ちゃんのことです。

すでに貴史からも聞かされているかもしれませんが、詩子ちゃんと私は小学校時代ものすごく仲がよかったんです。でも、六年の半ばから、だんだん女子と一緒にべたべたするのがいやになりました。理由なんてわかんないけど、詩子ちゃんのように私にまとわりついてくるのがうっとおしかったんです。

だから、青大附属に受かって詩子ちゃんと離れられたのがとってもうれしかった。

こんなこと思っちゃいけないとわかっていたけど、本当にすっきりしました。

このあたりは貴史にも話しているのでたぶん、秘密じゃないですね。

今年の一学期に立村くんとこずえがふたりで、詩子ちゃんの写真が載っているチラシを見て話していたので、初めて彼女が日本舞踊を習っているということを知りました。前から立村くんのお母さんが日本舞踊とかそういうのに詳しいってことを聞いていたので、たぶん知っているんじゃないかなって思っていました。私も詩子ちゃんとは、後味悪い別れ方をしていたので、いつか仲直りしたいという気持ちはありましたし、たぶん立村くんも協力してくれるんじゃないかなと勝手に思ったりもしていました。本当は最初に相談したかったんです。

でも、いろいろあって、この前の日舞の会みたいなことになってしまいました。

立村くんが楽屋に連れていってくれてから、初めて詩子ちゃんに会いました。

詩子ちゃんはやっぱり、立村くんの言うとおりの「玉兔」という踊りを気に入っていなかったようです。だから、ちゃんと立村くんの話していたことを全部教えました。でもそれ以上に、詩子ちゃんがわがままばかり言っているようにしか思えなくて、思いっきりひどいことを言いまくってしまいました。

早い話、「友だちではいられない」ってことです。

今の詩子ちゃんとは、どうしても友だちとしての付き合いができないし、私もがまんできないと思ったからです。詩子ちゃんにとっては、もしかしたら私は友だちなのかもしれないけれども、また小学校の時のようにべったりした付き合いをしたいのだったら、私は耐えられないと思いました。

この話はまだ、貴史にもしてません。打ち明けたのは立村くん、ひとりだけです。

でも、詩子ちゃんと永遠に絶交したいというわけではありません。

もし、詩子ちゃんがあの「玉兎」という踊りに誇りを持ってくれて、あの桃太郎っぽい衣装でも堂々としていたら、私は元の友だちに戻れたかもしれません。そして、他の踊りをするようになってもっと、自信を持って私と話をしてくれたら、その時は仲良しに戻りたいと思っています。

この話は立村くんにはしかできません。立村くんは詩子ちゃんのことをちょこっとは知っているし、日本舞踊のことも舞台のことも、私よりももっと詳しいはずです。だから、お願いします。立村くんには詩子ちゃんのことを相談させてください。貴史にはここまで話すつもりありません。

もう一度書きます。

もし、この条件でつきあいを続けてもいい、というんだったら放課後、自転車置き場で待っていてください。私も誰にも言いません。立村くんも言わないでください。お願いします。

——清坂美里

上総は二回読み返した。授業はまだ始まっていない。すぐに目を通した後、かばんの中にしまいこんだ。

——放課後か。秘密か。

あの藤野詩子があいかわらずすねた態度を取っていたのを、上総は覚えていた。たぶん何かひともんちゃくあったのだろうとは思っていたけれども聞かずにおいた。

——清坂氏も、ずいぶん言うよなあ。

納得はする。美里が詩子のような甘えたがりの女子に対して冷たい視線を送っているのは、二年の付き合いゆえ重々承知していた。でも、よりによって楽屋の中でそういうことを言うとは想像していなかった。

——でも、永遠に絶交したいわけじゃないとも言ってるな。そうなんだ。

「企画書」の内容は上総の想像をはるかに超えていた。

美里はつきあいをやめないと主張していた。さらに言うなら、上総にあまり踏み込まないという譲歩案まで出してくれている。

——こんなにしてくれるだけの価値、俺にあるのか？

きっぱり、言いたいことを伝えた時の覚悟がだんだん揺らいでくるのを感じた。

突き崩した積み木を、次の瞬間もっとわかりやすい形に作り直してくれたような感じだった。

——これで、突っぱねたら、俺は人間としての付き合いもできない奴だよな。

そっと後ろの羽飛を見た。窓際の美里を見た。最後に外の空をすかしてみた。

白い空がうっすらと広がっていた。晴れているのに、光が押さえられた曖昧な天気だった。

——秘密か。

美里にしか話さない秘密。

上総は時計版を覗き込んだ。放課後まで授業は六時間挟まっていた。

——清坂氏はどう思うかわからないけど、藤野さんとのことを考えたら、俺ができることはきっと、あるはずだから。だから。

美里の求める付き合いとは違うかもしれないけれど、上総は自分のことばで、もう一度伝えたかった。もう打ち明けることが怖いと思わない。雲を突き抜けた奥にちらつく青空が見えるようだった。

2 羽飛貴史が気付いたもの

美里の性格を熟知している貴史にとって、立村が何を言っても無駄だということはよくわかっていた。

——あいつは簡単にあきらめる女じゃねえからな。

約束どおり「竜宮上」のソフトクリームをおごってもらった後も、家に戻って家族に土産話をした時も、貴史はずっと次の日の展開を考えていた。

——立村が美里を振ったってことかよ。まあな。あいつも相当神経参ってたみたいだしなあ。けど、美里が「告白」って形にひっくり返すって言い放ったってことは、まだまだ付け入る隙があるってことだよなあ。あいつも、どういうこと考えているんだか。

「あいつ」とは美里なのか、それとも立村なのか。

やたらと小ぶりで腹の足しになりそうになかった弁当を思い起こしながら、貴史は目を閉じた。いつもだったら部屋の真ん中にべたべた貼っている鈴蘭優のポスターにチューするのが日課だが、それすら忘れた。

もし、立村が宿泊研修の時に、ああいう事件を起こさなかったとしたら。

たぶん貴史は、別の方法で美里と立村をくっつけてやるべく手段を考えていただろう。もちろん立村のように停学すれすれのことをやらかすほどばかではない。美里を巻き込む形で、他の男子たちに協力させて、立村のジェラシーを掻き立ててやろうと思っていた。

——男はな、追っかけるほど、燃えるんだ。この前教えただろ、美里。

小学校時代の野郎連中に美里と一緒に歩かせるかデートさせるか何かして、立村に吹き込んで、思いっきり嫉妬に狂わせて、最後には美里を独占しようという行動に出させる。これは想像するだけでも楽しかった。だから二学期に入ったらふたりを思いっきりいちゃついたカップルにしてやろうというのが、貴史の思惑だった。

しかしあっさりと予定は覆り、立村の本心らしきものをすべてめくってしまった。

美里も気付いていたのだろうが、貴史にすらうちあけてくれなかった本心。

——立村、お前、本当はそうじゃなかったのかよ。

——俺が惚れてたのは、美里じゃねかったのかよ。

自分がずっとこしらえてきた微妙な繋がりを、立村はあっさりとは断ち切ってしまった。

美里はもちろん、自分の「彼氏」としての裏切りを知ってショックだったろうが、貴史だって「親友」としての繋がりを拒絶されてしまったわけだ。

どうすればよかったのかわからぬうちに、目覚めた。朝がくればいつもの儀式、鈴蘭優のシングル「風の鼓動」を目覚まし代わりにテープで流す。家を出て美里を誘う。いつものように学校に向かう。

「美里、結局、何たくらんでるんだ？」

「ないしょ」

「内緒って、まさかお前、やらしいこと考えてるんじゃないだろうなあ」

「なによらしいことって。そういうことを想像するあんたの方が変なのよ」

美里の横顔は、作っているのかすっきりしていた。少なくとも「振られたばかり」の女顔ではなかった。

「しかし、お前なあ、藤野とはどうだったんだ」

「たいしたことないよ。これもないしょ」

これ見よがしではない。さぐってほしいわけではない。ただ、内緒にしているだけ。

——俺には何でも話してたくせにな。何考えてるんだ、美里。

立村が教室にいて、古川こずえたちと相変わらず漫才をかましていた。

「寝ている間何してたのさ。あ、そうっか。思いっきり自己発電してたんでしょ。ベットでね」

「古川さん、一週間会わないでいたけど、全然会話変わってないな」

「当たり前でしょ。それよりもどうなのよ。体力消耗しなかったの」

「何が楽しくてそういう話に返事しなくてはならないんだ。昨日は死んでたんだ。あるところでさんざん人使いの荒い人にこき使われてたんだ」

「へえ、そんな激しい運動してたのかあ。でも持久力のことを将来考えると必要かもね」

「ああ、激しかった。一日中駆けずり回ってたからさ」

会話の内容を耳にするに、いつも通りだった。

ちらっと立村に視線を送り、挨拶代わりに頷いてみせ、自分の席についた。

美里がノート一冊入る程度の封筒を立村に渡しているのが見えた。

——あれか、「告白」にひっくり返す作戦ってのは。

授業が始まる前、ずっとふたりの様子をうかがっていた。あまり露骨に気付かれないようにしたけれどもなかなかそうも行かない。消しゴムを落とした振りをしてはちらっと覗き込み、窓際の美里がいつも通りけらけら笑っているのを聞いた。ついでに南雲が立村へなにかと話し掛けているのをじくじくする思いで眺めた。

——なんであいつ、立村にああも話し掛けるんだ？ 次期規律委員長様だからかよ。

この前、南雲に投げかけられた言葉がまだ響いている。

——勘違い野郎。俺がもし美里に惚れてたら、立村に譲るなんてことしねえよ。そんなにお人よしかと思ってたのか。もしそういうことするとしたら。

貴史はひとつだけ、例外のパターンを頭の中に描いた。

——美里が救いようのない馬鹿男に惚れるか惚れられるかして、人生アウトになりそうだった

らだ。恋愛なんかじゃねえよ。親友を助けるために、「つきあった」ふりはするかもしれねえ。ああそうさ。そのくらいの演技はいくらでも俺だってできる。けどな、今、曲がりなりにも美里とつきあっているのは立村だ。南雲、お前みたいな奴じゃねえ。だったら、俺が動くことなんてねえってわかってるだろ。

振り返った立村と目が合った。そのまま美里に目を向けていた。

何かを感じたのだろうか。貴史は知らん振りをしていねむりこいたふりをしていた。

立村は休み時間ほとんど姿を消していた。別に驚くことではない。青大附属のお約束たること、「休んだあとは補習プリントの嵐に見舞われる」のだから。四日間休んだ以上、量は半端なもんじゃないだろう。南雲と話をすることが多かったようで、結局貴史とはほとんど言葉をかわさなかった。美里も話し掛けていなかった。

帰りの会が終わってから、軽く「お先に」と告げて去っていった立村を、貴史は見るともなしに見送っていた。が、次の瞬間美里が立ったまま立村の背を見つめていたのに驚いた。すぐに近づいて尋ねた。

「美里、どうしたんだ」

「どうしよう、帰っちゃった」

「は？ そりゃ家があるんだ帰るに決まってるだろ」

「違う」

周りにはほとんど気付かれていない。なのにふたりは会話が続かない。

「貴史、悪いけど私も帰るから」

意味が通じない。そのまま美里は教室を飛び出した。

「おい、待てよ」

なんで追いかけてしまったのかわからない。貴史は玄関を出るところでふと足を留めた。

美里が精一杯走り続けたのを、九月の段階では追いかけて留めることもできた。

でも今は、こっそりつけたほうがいい。

——だから美里、猿知恵だっていうんだよな。全く。

顔を覆い、目をこすりながら美里は自転車置き場へ向かった。こう言う時、貴史は黙ってついていく。美里も貴史がひとりで行動しようとする時、いつもそうだった。気付かれないように、美里の様子をうかがうだけだった。

銀杏の葉がだいぶ色づいていた。一枚、まだいきいきしたまま落ちている葉を踏んで歩いた。美里の足取りは重たい。相当、参ったに違いない。ふだんだったらちゃかしつつも、「なあに落ち込んでるんだ？ ったく、ひとりでなに勇み足やらかしてるんだよ」と頭を叩いてやるのだろうが、そうはできない雰囲気だった。ぶら下げたかばんが揺れている。

スパイには向いていない。自分でいうのもなんだが、こっそりあとをつけるのはいやらしい。

「美里、悪いが先に帰るからな」

急ぎ足で貴史は美里を追い抜いた。はっとした表情を向ける美里だが、それ以上声をかけるこ

とはなかった。

いったい美里が何を考えていたのか、わかるようでわからない。

たぶん立村に最終通告を突きつけたのか、それとも泣き落としをかけたのか。

——あいつは負ける勝負をする奴じゃねえからな。

自転車置き場で自分の愛車を引き出すと、貴史はゆっくりと校門へ回った。どちらにせよ、校門を抜けないと自転車組は学校から出られない。この辺でもう一度スタンバイしていようと決めた。

盗み見するのは汚いけれど、待っているなら別にかまわないだろう。

偶然を装うのもひとつの手だ。

校門に戻り、自転車をつけた。部活に入っていない連中が貴史の顔を見て、「あれ？ 今日清坂さんと一緒じゃないの？」

と声をかける。おそらく美里と付き合っていると思われるのかもしれない。立村と美里が公認の関係になった現在でもそうなのだから、前はさらにそうだったのだろう。貴史は首を振ってついでに手を挙げた。関係ねえよ、の意味だ。

——立村は校門を出てねえのか。

大急ぎで教室を飛び出していったのを見たから、帰ったとしたらとっくだろう。

美里が泣き出さんばかりで「行っちゃった」と口走ったのだから。

——けどな、立村のことだ。評議委員会の関係かもしれないだろ。本条先輩とまた「ホモ説」のやり直ししているのかもしれねえしな。

——しかし美里にせよ、立村にせよ、なんで俺にこんな面倒かけるんだよ。まったく、ガキじゃねえんだから、自分のことは自分でやれってんだよな。美里はいいさ、まだあいつだって一応は女子だ。紳士であれってことだからな。けど立村。お前、もっとまじな大人だと思ってたのにな。もう少し男として、それなりなことしろよ。まるで俺はお前と美里の保護者じゃねえか。

——保護者？

風が首筋をすり抜けた。

——そうだぜ。南雲さっさと気付けよ。俺と美里と立村とは、お前と奈良岡のねーさんとは違うんだ。単に別れてくっついていちゃついてって、そんなあっさり終わるような関係じゃねえんだ。どっちがくっついて別れても、ずっと盛り上がっていけるんだ。そんなことも気付いてねえなんて、所詮お前もそれまでだな。

どこにいるのかわからない南雲に思いっきり、悪態をついてやった。

生で口には出さない。自分だけがわかってれば十分だ。

自分の位置を見極めているから、貴史は今、校門にいる。

美里がひとりで戻ってくるか、それとも立村を捕まえてふたりで帰ってくるかは神のみぞ知る

。

だいぶ人がひけた。校門の前で空を見上げながら漫画を引っ張り出して読んだりしているが落ち着かず、後ろばかり振り向いていた。

——美里、おせえなあ。

「ないしょ」と秘密めかした口調を思い出し、貴史は深く深呼吸をした。

——だからお前だって俺に男心の研究についてもう少し突っ込めばよかったんじゃないか。まさか別のところで泣いてるなんて言わねえだろうなあ。立村と別れて修羅場だったなんていうなよな。

三十分近くたったけれども、まだ立村が通った形跡はなかった。また美里もいなかった。自転車通学の連中の中にふたりはいなかった。

——まさかまさかとは思いますが、もっとすげえことしてるんじゃないか。

よく学園漫画のエピソードに出てきそうなラブストーリーが思い浮かび思いっきり受けた。

美里がヒロインだなんていったら笑いすぎて臍が取れそうだ。

「美里、おい、美里か」

目を凝らすと、見覚えのある自転車が砂利を弾いていた。貴史が知らず知らずのうちに名を呼んでいた。

遠くから見ても美里だと分かるおかつ髪が遠めでも揺れていた。表情はわからなかった。

——ひとりだ。

——立村はいないか。

——待ち人、来ないって奴か。

貴史は校門の影から出て、真っ正面から美里を待った。途中で自転車を止めた様子。美里らしき自転車の主が降りて、ゆっくりと引いて進み始めた。かすかに頷いているように見えた。手は振らなかった。

——泣いてなんか、ねえよな。

貴史は仁王立ちのまま、じっと目を凝らしつづけた。美里が逃げずに近づいてくるのを待った。

。

3 清坂美里の受け取った答え

昨日、徹夜して何度も書き直したレポート用紙。表紙には「企画書」と書いておいた。

ふつうの手紙で書こうものなら、他の男子連中に立村くんが奪われてしまい、物笑いになる可能性大だからだ。美里なりに最善を尽くすところという形になる。

——これでも、いやだって言うならしかたないよね。

夜中の三時にやっと納得できるものが仕上がった。もう一度机の中におさまっている着物姿の立村くん写真を取り出し、両手で温めた。闇の中、じっと胸に抱いた。

——どうか、うまくいきますように。

貴史には詩子ちゃんとのことを話さなかった。話すタイミングがずれただけだった。

一応立村くんに突きつけられた三行半の件のみ、伝えた。

最低限の会話だったし、貴史もめずらしくつつこんでこなかった。だから、今のところ詩子ちゃんとの会話は美里の胸に収められている。

簡単に言いたい話題ではなかったからなおさらだった。家に帰ってあらためて思うと、自分でもずいぶん残酷なことを言ってしまったものだ。美里は嘘をついたつもりがない。むしろいつかははっきりと口にしなくっちゃと思っていた。でも、その重さが楽屋の中では和菓子の甘さ以上にくるものがなかった。

——だって、せっかく一生懸命踊ったんだから、もっと堂々としててほしかったんだもん。詩子ちゃんは小学校の時ずっとりりしくて、くだらない男子の悪口を無視して、気に入らない女子たちとは堂々と喧嘩してたんだ。そんな詩子ちゃんが私は大好きだったんだよ。けど、どうして六年になってからあんなっちゃったのか、私にはわかんない。

——中学違ってたって、友だちでいられたはずだよ。ふつうにしてればね。

——私は詩子ちゃんと、ふつうの友だちでいたかっただけだよ。

——そんなべたべたした、トイレに行くのも一緒、どこにいても私と同じ班になりたがる、そんなのがすごくいやだったただけだよ。そういう子じゃなくなっていたらって、どっかで思ってたのに。

——全然変わってないじゃない。詩子ちゃん。

身勝手かもしれないけれど、美里の方が裏切られた気持ちだった。親姉妹、そして貴史にも言えないことをつい、詩子ちゃん本人にぶつけてしまった。自分だったら百発くらい言い返すだろうが、詩子ちゃんはただにらみつけるだけだった。たぶんこれで友情らしきものは終りだろう。立村くんにせよ詩子ちゃんにせよ、どうして自分はここまで人間関係を壊すのが得意なのだろう。後悔はしないからなおさらやっかいだ。

——こういう時、誰かに話したいよね。

桃太郎風のベストっぽい衣裳に桃色の短い着物を着た少女。兎の耳を白い鉢巻につけていた詩子ちゃん。

——詩子ちゃん、衣裳は変だと思ったけど、蟹股踊りは変だと思ったけど、でも舞台では堂々としてたよ。あんな詩子ちゃんだったらよかったんだよ。

——そうだよ、昨日の立村くんみたいに。

「立村くん」という言葉が浮かんだとたん、一気に明日の答えが紡ぎ出されてきた。どうすれば立村くんに前言撤回させることができるだろう。ぼやけていた答えが、詩子ちゃんの舞台と会話を思い出したとたん、あっさりと思い浮かんだ。

——だから「企画書」なのよ。立村くん。

美里は大きめの茶封筒に「企画書」を詰めて、封をしないままかばんにしまった。

立村くんはたぶん、美里の求める付き合いができないだろう。あらためて思うのだが立村くん

はかなり強情だ。どんなに美里が頼んでおだててみても、全く微動だにしない。覚悟を決めたら絶対に動かさないタイプなのだろう。なんとなくそういうところを感じないわけではなかったけれども、自分がターゲットにされるとかなり苦しい。

でも、美里や貴史のことを「友だちとしては一番大切な存在」とも言っていたではないか。

美里が「これはひっくり返せる！」と掴んだのはこのあたりだ。

今まで美里は立村くんが、自分のことをどう考えているのかを掴みかねていた。もちろん多くの友だちの中では仲のいい方だと思っていたし、つきあいをかけたときだって「清坂氏をひいきする」と断言してくれた。それなりのことをしてくれた。でも、一年の杉本梨南さんや、こずえとかとはかなり仲良くしているようだし、「その他大勢」の扱いなのではという不安もないわけじゃなかった。

——でも、立村くんは、貴史と私を、特別な人だって思ってくれてたみたいだ。

——貴史と一緒にるのがちょっとね、ひっかかるけど。でも、女子では私を特別にしてくれてるってことは確かなんだ。立村くんの口からはっきり引っ張り出せたのは収穫だよ。

嫌われているなら脈がないとあきらめるしかないけれど、脈は大ありじゃないか。

要は、美里側の要求と立村くん側の要求をすり合わせた形で、もう一度検討をお願いすればすむことだ。

ずっとひとりで考えた後、出した結論を「企画書」に詰め込んだ。

次の日は天気うす曇だった。貴史と誘い合いいつものように話をしつつ教室に向かう。やはり立村くんが先に到着していた。こずえを相手にまた夫婦漫才やらかしている。顔は青白いままだけど、こずえを相手にするのだったらそんな気を遣わないですむのだろう。こういうつきあいを立村くんは求めているのだろうか。

——私だってできるのに。

美里はつぶやいた。昨日のことなんて水に流したような顔をこしらえた。

「立村くん、あのね、企画書。あとでひとりで読んで」

和室で冷たい視線を投げかけた時の立村くんとは違い、相変わらず目が定まらない。

「あ、あの清坂氏」

「だから企画書だってば」

——大丈夫、ちゃんと、立村くんならわかってくれるはず。

六時間、美里は知らん顔して通すことに決めていた。どんなことがあっても、提案した答えを教室では受け取りたくなかった。立村くんはじっくり考えて答えを出したい人だろう。だから六時間、考える時間をあげた。美里のできる譲歩はここまでだ。

——たったひとつだけでいいから、立村くんと私の秘密がほしいの。

——それだけでいいよ。私、立村くんのプライバシーをしつこく突っ込むことしないから。

——貴史にも、南雲くんにも言っていない、私だけの秘密をください。

隣のこずえが「こいつ何やってるんだろ」と言いたげな目で美里と立村くんを見つめていた。でも何も言わなかった。後ろで貴史も美里をちらちら眺めていたが、やはり何も言わなかった。

ふたりとも、気付いていても言わないでいてくれる。

——ありがと、貴史、こずえ。やっぱりあんたたちは私の親友だよ。

——私、詩子ちゃんに言ったこと、後悔しなくていいよね。

立村くんの様子は特別変わったところもなかった。評議委員として最低の会話を交わすこともなかった。仕事がそれほどないというのもあったのだろうか。六時間目が終わるのを時計とにらめっこして待ち、美里は号令をかけた。帰りの会が終わるまでは、立村くんを見ないと決めていた。

「お先に」

すり抜ける声。美里は立ち上がった。

「あ、立村くん」

思わず声が出た。立村くんは知らん顔して、一言だけ残して教室を出て行ってしまった。

「美里、どうしたんだ」

相当まぬけな顔をしていたのだろう。貴史がかぼんを頭に載せたままやってきた。

そうとうお笑いの格好をしているのに、それを笑えない。

——帰っちゃった。立村くんが。

心の中でとどめておきたかったのに、貴史の側では言葉がもれる。

「どうしよう、帰っちゃった」

日本語わからない外国人風に肩をすくめ、貴史が返す。

「は？ そりゃ家があるんだ帰るに決まってるだろ」

「違う！」

両手を握り締めた。怖くてがたがた震えてくる。強い口調にひいたのか、貴史が顔をのぞきこんできた。何か言われる前に逃げたい。どうしていいかわからない。

「貴史、悪いけど私も帰るから」

いつもならば貴史をひっぱってってさんざん立村くんのつれなさをぐちることだろう。もしくは手伝わせて立村くんを捕獲することを考えるだろう。それが美里のいつものやり方だ。でも、立村くんにそれは通用しない。どんなに美里が言葉を尽くしたって、立村くんは「清坂氏の求めることはできない」と言い放つだけだろう。ああいうことを言える人ではないと思っていた。言わないでずっと優しくしてくれる人だと思っていた。でもとうとう美里は立村くんを追い詰めてしまった。

——なんでよ。どうして立村くん帰っちゃうのよ。

——ちゃんと自転車置き場で待っているって「企画書」に書いたよね。私。

——立村くん、どうして。

勝ち目のない戦いはしない。だから「企画書」を渡した。

でも、それが甘かったのかもしれない。

——そんな、そんな。

「おい、待てよ」

貴史の声が追いかけてくる。振り切って美里は歩いた。予想に反して貴史はそれ以上追いかけてこなかった。ありがたかった。今にもぱちんとはじけそうな涙の塊を、見られたくなかった。

自転車置き場は銀杏並木の真下に位置していた。雨にぬれないようちゃんと屋根がついていた。自転車をひっぱりだして、もう一度砂利道を横切って走り、校門に出る。

美里はサドルに腰を押し付けたまま、かばんを籠に入れた。

——来るわけ、ないか。

さっき貴史が急ぎ足で

「先に帰るからな」

と去っていたところを見ると、たぶん美里の計画はばれていないのだろう。貴史にも最低限のことしか話していないのだから当然だ。結構美里と貴史とはお互いの考えが読めてしまうので、心配そうにくつつかれたらたまったものではなかった。

「あれ、美里、今日は立村くんと帰るの？」

同じく自転車通学の同級生に声をかけられ、美里は、

「うん、そうだよ」

と答えてしまった。もう二度と帰らないかもしれないのに、条件反射で。

一通り顔見知りの子たちが自転車と一緒に帰った後、美里は時計を覗いた。まだ十分くらいしか経っていなかった。いつも立村くんは適当なところに自転車を押し込んでいた。銀色の細身な自転車だった。手入れはよくされている。籠はついていないので後ろにひもでくくりつけていた。そっと近づいてみて、ハンドルのところを指先で触れてみた。冷たかった。

一時間待ってもこなかったら帰ろう。

時計の針が四時にあと五分近づいた頃だった。

「清坂氏、遅くなってごめん」

背中が声が聞こえた。振り向く前に美里は唇を一文字に結び直した。でないと、表情が丸見えだから。

「立村くん、来たんだ」

一本調子で答えた。声が震えるのをできるだけ聞かせたくなかった。

「どうして向こう側から来たの。ずっと生徒玄関の方見てたけどいなかったから」

「うん、後ろの窓から飛び降りた」

「え？」

言っている意味がわからない。じっと美里は立村くんの顔を見つめた。嘘じゃないかを確認めた。

「四日間休んだ分、補習があるから先生たち全部に頭下げてきて、予定を決めてきた。生徒玄関から出るとたぶん、遅くなるから、職員室の窓から」

確かに職員室の窓から自転車置き場は真っ正面だ。最短距離ではある。

「誰にも見られなかったの」

「わからない。窓はあきっぱなし」

遠くの反射光が見えなかった。たぶんあそこから立村くんは走ってきたのだろう。

靴が黒の上靴だというのが、嘘じゃない証拠だった。立村くんは少しだけ息を切らせていた。片手には茶封筒を丸めていた。美里の渡した「企画書」だろう。でもふらついていなかった。真っ正面から美里の顔を見つめていた。昨日よりもまだ、温もりのこもったまなざしだった。

言葉が出なかった。出すと、泣けてきそうだから。

立村くんは美里の目を見たまま、ゆっくりと言葉を発した。

「昨日の夜、藤野さんの様子を『なおらい』っていうか、お疲れ様の会みたいところで観察していたんだ。俺もやはり、気になっていたところがあったから。確かに機嫌はよくなかったみたいだし、俺が清坂氏の知り合いだってことで、かなり考えるところがあったみたいだ。それ以上のことは話していないからわからないけれど、でも初舞台が無事に終わったことそのものはよかったと思っているようだった。だから、何がどうってことはまだないけどさ。でも」

息をついで、企画書を丸めたまま持ち替えた。

「今は放っておいてやった方がいいと思う。まだまだ時間があるし、それに、俺もちょくちょくそっちの情報を仕入れて清坂氏に教えたりすることもたぶんできると思うから」

この間一切、立村くんは視線をゆるがせなかった。

「私に教えるって、その、日本舞踊のこととか、詩子ちゃんのこととか？」

「うん。もし清坂氏がよければ。それとさ」

しばらく口籠もるように、美里の自転車の籠をいじり始めた。

「もうひとつ、約束があったよな」

——私と、立村くんとの、秘密。

さすがにここではうつむいた。立村くんは籠に企画書の入っているらしい茶封筒をぽんと入れた。

「本条先輩が、公立受けるんだ」

——本条先輩が？

驚きよりも何よりも、美里の頭に浮かんだ言葉。

「本条先輩と、秘密とどう関係あるのよ」

同じく平坦なままの言葉で答えた。

「今年の七月、評議委員会合宿の時、聞かされたんだ」

そういえば立村くんは評議委員会合宿中ずっと、本条先輩にべったりくっついていて、泊る部屋も一緒、行動するも一緒。ふたたび「本条・立村ホモ説」がささやかれるのも無理はないような状況だった。

「でも、どうしてなの」

「今日の朝、直接本条先輩に聞きに行ったんだ。直接はっきり聞いてみた。そうしたら、家の事

情で青潟から出るか、それとも上のお兄さんと一緒に青潟に残るか、選択を迫られたらしいんだ。それで、本条先輩は公立に行くかわりに、青潟に残ることを選んだって」

立村くんは息をとめずに勢い良く続けた。

「三ヶ月間かないでいたの？ 私だったらどんどん追及しちゃうな」

「聞いたらだめだと思ってたんだ。だから賭けだった。本当のことを言っても、もしかしたらうまく行くかもしれないって思ったから」

「立村くん、嬉しかったの？」

美里はゆっくりと尋ねた。

「うん、公立に行かれることがずっとショックだった。けど、青潟にいなくなるよりはずっといいって、今はそう思ってる。三ヶ月悩むよりも、そっちの方がよかったって、今はそう思うんだ」

ずっと籠の中に目を落としたまま立村くんが話している。美里はゆっくりとつぶやいた。

「本条先輩がいなくなることで、そんなに立村くんには大きいことなの」

「こんなこと言ったらまたホモ説だとか言われるんだろうな」

かすかに笑みを浮かべ、立村くんは片足をかけるようにして美里に向き直った。

「俺にとってあの人は、いつかああいう風になりたいっていう相手だから。どんなに口に出しても伝わらないって思ってたんだ。変な意味じゃない。ああいう風に人を上手に使って、巧く評議委員会を仕切って、それでいて後輩たちに思いやりを持っている。そんな人なんだ。けど、そんなこと言うともた、ホモ説を吹かれるだけだと思って羽飛にも清坂氏にも言わなかったんだ。でも今の清坂氏なら、そういう気持ちをわかってくれるかもしれないってちょっとだけ思った。だから」

立村くんが語る言葉よりも、その眼の光を美里は受け止めた。逸らさなかった。

「わかった。合格」

まだみずみずしい黄葉した銀杏を拾った。ほおっと肩が下りたように見えた。

「だから、これからも、お願いします」

茎をつまんで立村くんに差し出した。受け取り、ほんの少し見下ろす感じで立村くんも答えてくれた。

「先は長いけど、こちらこそよろしくお願いします」

正直なところ、どうして本条先輩の公立進学が立村くんにとっての秘密なのか、腑に落ちないところもあった。立村くんにとって本条先輩が最大の憧れだというのは想像ついていたし、美里も公立進学という話は初耳だった。ショックがないとは言えない。成績のいい本条先輩がなぜ、そういう究極の選択をせざるをえなかったのだろう。

——もっと、別の秘密ってなかったのかな。立村くん。

まだ未練が残っている自分に気付く。

——だって、本条先輩が公立受験するってことは、来月あたりになったらばれちゃうよ。立村くんが三ヶ月真剣に理由を聞くか聞かないか悩んでいたのはわかるけど、そんなの秘密じゃな

いよ。

もっと別の言葉をほしがっていたのかもしれない。

もっと別のことをしてほしかったのかもしれない。

立村くんが籠に目を向けたままひとりごとしている間、気持ちが右往左往していた。拍子抜けしたという感じだった。もっと、つきあいたい同士だったらすることがあるはず。言ってくれることがあるはず。——私のことを、本当はどう思ってるのかとか、ね。

でも、語っている間の立村くんを見ていると、話の内容などどうでもよくなっていた。本条先輩が公立に行こうが行くまいか、関係ない。横顔がひきつり、何度も瞬きをして、つんとついたら崩れそうな程早口にしゃべりつづける立村くん。あまり美里が見たことのない姿だった。

——だから、今はそれだけでいいよ。立村くん。

——私に、今まで見せないところを見せてくれたんだから。今はそれでよしとしとく。

「清坂氏、悪いんだけど、今日はもう一度職員室に戻って補習の資料をもらってくるから。先に帰っていていい。もし羽飛がいるようだったら一緒に帰ってもいいしさ」

「え？ また戻るの？ まさか窓から？」

「いや、生徒玄関から。上履きの泥落としてもう一度行って来るんだ。それに開けっ放しの窓を閉めないとあとで怒られる」

自転車を押しながら立村くんと並んで歩いた。生徒玄関の前でもう一度、頭を下げた。

「じゃあ、わかった。また明日ね」

立村くんは素早くすのこの上で靴を脱ぎ、なんだか地面に叩きつけていた。知らん顔して上がってしまってもいいのに。こういうところが律儀な人だ。

美里は背を向けて校門に向かって自転車をこいだ。砂利道の石が勢い良すぎて遠くに飛んだ。とたん、目の前にいる制服姿の男子に気が付いた。

——貴史、先に帰ったはずなのになんでいるのよ。

自転車を止め、下りた。美里は一度立ち止まって正面から貴史の姿を見据えた。

——待っててくれたの？

今までのパターンからすると不思議なことではない。だんだん身体が温かくなってきた。風で冷え切った手が、ぬくもってきた。今起こったことを、立村くんとの内緒部分を覗いて、すべて話すことができる相手が、そこにいる。きっと、喜んでくれる奴がそこにいる。

——貴史、貴史、あのね。私、立村くんと。

「どうしたんだお前」

「あのね、立村くんと」

言葉にならなかった。立村くんの前では涙が出なかったのに、貴史の前では平気だった。思いっきりしゃくりあげた。鼻水がずるずる言う。ハンカチで押さえた。

「奴と会ったのか」

「うん、今までどおりでいいって」

「今までどおり？」

「うん、立村くんは私と貴史、同じくらい大切だって言ってくれたんだ。だから、これから」
あとは言葉にならなかった。

「ほらほら、ひでえ顔だぜお前。ほらさっさと動くぞ。よくわからんがうまくいったんだったら今日はたいやきを一匹おごれよ。めでてえなことでな」

貴史があきれた顔して文句を言っている。通りすがりの鯛焼き屋さんで焼きたての二匹を包んでもらった。

「何隠してるんだよ」

「ないしょ」

こつんと額をつつかれた。貴史にたいやきの入った包を渡し、美里は千切って口に放り込んだ。

「貴史、これからも男子の心理についてレクチャー、よろしくね」

美里は半分しっぽの方を千切ると、貴史の口に無理やり押し込んだ。

「おい、お前なにするんだよ。あちい、まじで口の中やけどするかと思ったぜ。」

口をさすようにしてあがあがさせながら、貴史が必死に飲み込んでいる。面白い。にやにやしながら眺めていると、貴史ははあはあ舌をぴろぴろさせながら、

「ったく、俺って美里と立村の親代わりじゃねえかよ。世話の焼ける奴らだぜ。まあまかせとけ！俺が全部面倒みてやるぜ」

いつか自分を取り戻した詩子ちゃんと友情復活できるかもしれない。

まだまだ先の話かもしれないけれども、できればその時まで立村くんにいっぱい相談にのってほしい。

今の立村くんにとっては美里に打ち明けられる秘密が本条先輩のことくらいなのかもしれない。

物足りないけど。ちっちゃな一歩だけど。

——どうせこれから、貴史と同じくらい立村くんとも秘密が増えていくはずだもんね。第一段階突破ってところで、いいかな。ね、貴史。

終——

ふたいろの幕がおきるまで

<http://p.booklog.jp/book/77991>

著者：舞夜じょんぬ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/maiyoruaogata/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77991>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77991>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ